Faster Bigger 2

げんじあきら

目次

わさびと鶏と米のスープ

沢風ゆりが姿を消した

２１１４年の湯花邪無。ジャカルタと東京に住んでいる。たまたま放浪中にジャカルタのスパイス学に入れられた。33歳独身である。ジャカルタの大学に入った。入ったというより入れられた。スパイスをつくって新宿とジャカルタで販売している。２メートル88キロ。大きい方ではない。ニューヨークゴジラに３メートルのピッチャーが入団した。東京ライオンと同じリーグである。上海ドラゴンにも３メートルのピッチャーがいるようだ。ジャカルター東京50分である。
時代はエネルギー大変革。アースバッテリーを開発した先里風香が世界の救世主である。エネルギー代がタダなのだ。地球にも人にも、何も害を及ぼさない。スマホも冷蔵庫もレンジもドンドンアースバッテリーに変わっていく。アースカーが世界の50％を占めた。
先里風香はフロリダに住んでいるらしい。誰も顔を見たことがない。先里風香を支援したのは、フロリダのバッテリー会社であるワールドバッテリーである。ワールドバッテリーはアースバッテリーの世界シェアーの32％を持っている。
先里風香は、地球や人に良いことをしているのに自分に危険が迫ることを承知している。従来の地球資源によるエネルギーの役割が縮小するのだ。
先里風香は老人である。老婆かもしれない。代理を華美美鈴に託している。華美美鈴も危ない。
日本の戦車の会社がアースバッテリーをパワーアップしたくて、華美美鈴が説明にやってきた日本で、拉致してしまう。先里風香を日本に呼び戻したいのだ。日本人だから、協力するのは当然だという態度である。
２１１４年７月26日。華美美鈴がプサンで日本から脱出する時、湯花邪無は、先里風香を見た。かなりのお年であった。男である。「助けてくれてありがとう」と言った。
８月17日カサブランカのＦＡＲ通りの街灯のアースライティングの点灯式が

あった。イベントである。１週間も前にカサブランカに行くとメッセージした華美美鈴。誰も知らないが、湯花邪無は自分へのメッセージだと思った。誰にも言わずに、湯花邪無はカサブランカに出かけた。
湯花邪無の前にアメリカ人らしいカメラマンがやってきて、１８７９と書かれたメモを渡した。部屋の番号だと思った。
点灯式で点灯後に、湯花邪無の後から手が伸びてきて拳銃が発射されそうだった。華美美鈴が見た。湯花邪無は両手で拳銃の手を跳ね上げた。乾いた拳銃の音がした。
湯花邪無は18階の79部屋に向かった。18階には警備の２人とフロアーマネージャーのような男がいた。
華美美鈴は、湯花邪無を招き入れた。
「もう逢えないと思った」
「これが最後だからキスして欲しい」
湯花邪無は、男の手を押し上げた映像が撮られていて、華美美鈴を救った人として表に出てしまうと覚悟していた。
しかし、湯花邪無が羽田に到着した17時30分にも、撃ち損じたと報道されたままだ。
新宿のスパイス湯花もジャカルタのスパイスｙｕｈａｎａも年中無休である。新宿に行っても仕事をしている。しかし湯花邪無は、日曜は会社に出たことがない。
「ただいま〜」
「わたしを探さないで欲しい」
「華美美鈴をあなたに近づけたわたしが間違いだった」
「警察にあなたを売った」
「もしこのメモを読むことがあったらゴメンなさい」
沢風ゆりだった。
湯花邪無は納得がいった。
８月11日に有村聡と真野裕也がジャカルタのスパイスｙｕｈａｎａにやってきた。湯花邪無は、華美美鈴を拉致する２人と思った。とうとうバレたと思った。有村聡と真野裕也は、湯花邪無が拉致犯だと思ってやってきた。
湯花邪無は日本まで跡をつけた。２人は警察庁に入った。

有村聡と真野裕也は、情報があったと言った。沢風ゆりだったのだ。
沢風ゆりに読まれたのだ。
「どうして華美美鈴のことに命を賭けるようなことをするのか」
湯花邪無は、バカバカしいと思った。確かに、湯花邪無は、華美美鈴のことになると、身体が動いてしまう。華美美鈴も、危険を冒しても、湯花邪無に逢いたいというメッセージを伝える。
しかし、これしかできない。
華美美鈴には、先里風香がいて、世界のエネルギー大転換という大仕事があるのだ。
いくら湯花邪無に惚れたからといって、自分の役割を放り出してしまうわけがない。
「もう逢えないからキスして欲しい」
華美美鈴が言ったことは当たっているのだ。
こんなことを、どうして沢風ゆりはわからないのか、腹がたつ。
「沢風ゆりが怒る」と言った華美美鈴の言葉どおりになった。
沢風ゆりの電話は通じなくなっていた。
沢風ゆりと華美美鈴は、友人だった。
湯花邪無は、沢風ゆりがつくっていたトマトソースを探した。沢風ゆりのナポリタンを見ていた。

観光大国モロッコ

８月18日だった。
北千住から羽田までのアースカーで、湯花邪無は、カサブランカのライブテレビを見ていた。
華美美鈴が驚いている顔がアップされた映像である。そして華美美鈴を狙った男が、輸送中に、警備の警察官から拳銃を奪って自分を撃ったと報じていた。泊まっていたホテルでは、フランス人を名乗っていたと報じていた。
どうして華美美鈴を狙ったのか、背景を探ることが難しくなったとも報じていた。

華美美鈴はフロリダに帰ったのだろうか。よくわからない。
月水金は、午前中はジャカルタの料理学校で午後は新宿のスパイス湯花である。
「おはよう」
「おはようございます」
湯花邪無はジンの部屋に急いだ。
「今日は料理学校ね」
「そうだ」
「明日だけど、わさびと鶏と米のスープの工房に案内したい」
「明日ラナン達とカラオケに行く約束をした」
「イエスタデイを歌えるようになったのか」
「わからない」
「鼻歌でも聴いたことがない」
「自信がない」
「社内にうわさが広がる」
「ゼンゼンダメ」
「まずいな」
「夜でしょ？」
「そうだ」
「レトルトの会社11時の約束だから」
「カラオケ遅くならないで」
「待ってるから」
「わかった」
「いってきます」
湯花邪無は、料理学校に向かった。カサブランカのライブテレビを見た。
華美美鈴を狙った男の身元を割り出すことに焦点が集まっていた。しかし、パスポートは偽造だった。フランス人というのも怪しい。霧の中に入ってしまいそうだとキャスターが言っていた。
ただ、湯花邪無に繋がる情報は何もなかった。
華美美鈴と湯花邪無の繋がりを知っているのは、沢風ゆりと日本の警察の有村聡と真野裕也と、カサブランカで会った、アメリカ人らしい女性カメラマ

ンとホテルの18階で会った警備の２人とフロアーマネージャのような男である。
華美美鈴も湯花邪無も、湯花邪無の存在を知られないように気遣っている。知られると、湯花邪無のスパイス湯花とスパイスｙｕｈａｎａの社員が困る。
湯花邪無が脅されると困るのだ。
湯花邪無は、何度も華美美鈴を助けている。誰だかわからないが、湯花邪無を狙う可能性も高い。
有村聡と真野裕也は、誰かに言われて華美美鈴の拉致犯人を特定しようとしている。事件ではないので逮捕はできない。
有村聡と真野裕也が湯花邪無を脅すことはない。
「ミスターユハナ15日はご馳走さま」
「わたしがご馳走するつもりだった」
「私は料理を教わっている」
「失業中のミスターユハナにご馳走になるのはまずい」
「少しの蓄えがあるから心配いらない」
「ミスターユハナは何者なんだ」
「主夫の修行をしている」
料理学校の７人は、笑ってミナの話を聞いている。イケメンの湯花邪無が料理学校の先生のミナにアプローチされていることをよく知っている。40歳くらいだ。
「今日はタブタブソースをつくる」
「揚げ物の似合うソースだ」
「レシピを配る」
「サンバルを使うからサンバルもつくって」
「サンバルはこの前やったからつくれると思う」
「いいですか？」
「サンバルは少しでいいのか」
「そうだ」
「誰かが代表してつくることでいいか」
「オレがやる」

「夜レストランで働いている若い男が手を挙げた」
「いいでしょう」
「今日はオレが買い物をする」
若い男が率先して近所のスーパーマケットに向かった。
「今日はみなさんよくできました」
「帰って揚げ物をやってみてください」
「ミスターユハナ、また違うお店を紹介しますから空いてる日を教えてください」
「考えておきます」
「考えるようなことじゃないでしょ？」
みんな笑っていた。
「ただいま」
「おかえりなさい〜」
湯花邪無は、一旦スパイスｙｕｈａｎａに帰ってくる。すぐに新宿に行くのだが、メール１本で消えるようなことはしない。
「今日はなにをやったの？」
「タブタブソース」
「おいしかった？」
「味見しただけだ」
「今日のお昼アヤムゴレンなんだけど」
「できてたら少しもらってくる」
湯花邪無は、アヤムゴレンがどんな料理なのかわからない。
ジンは、まだ調理中だろうに、アヤムゴレンをもらってきた。チキンフライだと思った。今日の給食である。そして湯花邪無が持って帰ったタブタブソースを器に移してきた。
「タブタブソースをかけて食べてみて」
「ジンも」
ジンは、かなり多めにタブタブソースをかけて食べた。
「おいしい」
湯花邪無もおいしいと思った。
「これもらって帰る」

「少しは料理が上手になった」
湯花邪無は、スパイスｙｕｈａｎａからジャカルタ空港まで、カサブランカのライブテレビを見た。運転はアースカーに任せた。
依然として、カサブランカで華美美鈴に拳銃を発射した男の身元がはっきりしていないらしい。白人男性である。拳銃もカサブランカの闇市で売っているようなフツウのモノだった。
湯花邪無の心配事は、実は、華美美鈴を狙った拳銃を外させたのは、この男が、拳銃の腕を跳ね上げげたからだと報道されることだ。誰かが写真を撮っていたら、湯花邪無だとわかってしまう。
狙いを外した男になっていた。
「こんにちわ〜」
「おかえりなさい〜」
お客さんがたくさんいるのだが、お店に入ると、みんなで声を揃えて湯花邪無にあいさつをする。スパイスｙｕｈａｎａもスパイス湯花も、同じである。
湯花邪無は社長だが自分の部屋がない。スパイス湯花を仕切っている水野まさみの部屋を使っている。机もない。水野まさみがボスであることを表現している。
スパイスｙｕｈａｎａでも同じである。湯花邪無は、ジンの部屋に行く。机もない。ジャカルタは、ジンが仕切っているのだ。
「在庫が少なくなってきている」
「ジャカルタに行って相談していいか」
「東京や大阪や名古屋でもインドネシア料理やタイ料理やベトナム料理などのアジアンテイストが盛んだから」
「家庭でもですか？」
「お店によってはスパイス湯花を使ってくれている」
「価格はそのままですか？」
「安くして欲しいとの要望はあるけど」
「スパイス湯花のスパイスは、それでもリーズナブルだと思うけど」
「そう答えることにしている」
水野まさみがジャカルタに行くことはあまりない。湯花邪無に伝えてくれで

足りてしまう。
「ジンとエミルと相談してください」
「わかった」
「30%増やしていいか」
「わかりました」
「ルピアはどうですか？」
「ドルと円に較べて高くなる傾向にある」
「ドルと円はあまり変わらない」
「スパイスｙｕｈａｎａでドルにして輸出しているからスパイスｙｕｈａｎａで為替損が出る可能性がある」
「そう大きな変動はないとは思うけど」
「わかりました」
「わさび工房もわさびの森も会社ができてるけど、社員を募集してないけど」
「24日に真空パックを見てきますから」
「できればうまくいってほしい」
「スパイス湯花も販売の準備をしていいか」
「お願いします」
「価格と商品がまだはっきりしない」
「できれば24日に決めたい」
「ジニを連れて行ってくれ」
「伝えてください」
ジニはインドネシア人で日本に留学している。日本料理に興味がある。スパイス湯花で働いている。
湯花邪無は、北千住のスーパーマーケットで刺身を買った。冷蔵庫に入れっぱなしの真空パックをしたスライスわさびの残りがあったはずである。
沢風ゆりがいない。自分で食事を準備しないといけない。
「ただいま～」
北千住のマンションは暗かった。沢風ゆりは、もう帰ってはこないと思った。人は不思議である。親友だった華美美鈴が沢風ゆりを頼って北千住のマンションに来た。沢風ゆりも華美美鈴を守った。

華美美鈴を守ることに必死になる湯花邪無と、華美美鈴の湯花邪無を見る目に嫉妬心が芽生えたのだろう。
沢風ゆりは警察に通報した。
湯花邪無は、日本で華美美鈴を拉致しようとしている犯人にされた。
ただ、誰も捜索願を出したわけでもなく、事件になっていない。
有村聡と真野裕也は、湯花邪無が拉致の犯人でないことは確認したが、ホントの犯人を捜せたかどうかである。
沢風ゆりは、何をしようとしたのだろうか。湯花邪無を取り戻そうとしたのだろうか。
人は時々、何かわけのわからないことをする。
華美美鈴も、用心するだろう。ムンバイでも拉致されたのだ。日本に連れてこられた。
カサブランカで会った、アメリカ人らしいカメラマン風の女性とホテルの18階にいた２人の警備員とフロアーマネージャーのような男の４人に頼らないといけない。
ごはんが炊ける時間がこんなにながいとは思わなかった。
いつもは沢風ゆりがいた。ただ食べればいいだけだった。寂しい。
８月19日だった。
朝起きてどうすればよいのかわからない。お腹が空いている。
冷蔵庫を開けてみる。水がある。パンを置いてある場所にパンもない。
羽田で何か食べようと思った。
いつものように８時のジャカルタ行きに乗った。50ドルで11回乗れる。タクシーで羽田から北千住の方が高い。
カサブランカのライブテレビを見た。
どこのライブテレビも、華美美鈴が拳銃で撃たれたニュースをやっていなかった。
今日のニュースは、観光大国になったモロッコのニュースだ。モロッコの観光業者５００人が箱根を訪れている。日本は不思議な国である。おもてなしが身に着いている国民性がある。
それなのに、何か安心できない雰囲気を持っている。３００年前から変わらないと言われる。Ｎｏ１意識が強いからだと言われる。政治的気が抜けない

国なのだが、国民性は、おもてなし上手な国なのだ。
観光大国を目指したモロッコの人々は、日本の人が持っているおもてなしのこころやしぐさを学ぼうとしたのだ。
ジャカルター羽田が50分50ドルになって、世界の壁は薄くなった。プロ野球だってアメリカと日本と台湾と韓国とオーストラリアの球団が同一リーグで戦っている。今度上海の球団が入ってくる。
モロッコの人々は、イスラムでもありアフリカンでもあり、アジアと近くて、ヨーロピアンでもある特性を活かしている。
北欧の人々は、モロッコで夏を過ごすことが夢になっている。

■■○カラオケレストラン

「おはよう」
「おはようございます」
「ミスタージャム、わさびと鶏と米のスープの工房に案内するけど」
「何時に出ますか？」
「アースカーで30分だから10時30分に出ます」
「わかった」
「もう８月19日だけど大学の講義の準備はできているのか」
「できている」
「パブリックホルダに公開してくれるのか」
「公開する」
「コショウの話でいいのか」
「そうだ」
「みんな楽しみにしている」
「自信はある」
「なにかありますか？」
「順調だ」
「水野まさみさんが相談があるって言ってたけど」
「明日やってくる」
「早いな」

「輸入量を30％増やしたいそうだ」
「なんとかしてやってくれないか」
「エミルが考えている」
「ジャカルタもクアラルンプールもシンガポールもバンコクも数が足りない」
「エミルは頭が痛いのか」
「そうだ」
「品質を落とせば20％は増やせるが」
「止めてくれ」
「わかっている」
11時に、湯花邪無とジンは、タベットのスパイス工房より南のカワンにいた。スパイスの森はもっと南である。カワン食品である。
45歳くらいの女性のクスマがオーナーだった。弟のマリキスが専務だった35歳くらいだろうか。
「レトルト食品の専門工房だ」
「他の事はなにもやっていない」
「自社ブランドも持っているしＯＥＭも受けている」
「品質には自信がある」
「まず工房を見て欲しい」
湯花邪無は、この時点で、もう決めていた。
自分のことを工房と言っていることは、商品を丁寧につくりたい意欲があることだ。工場と言うと、儲けの話が優先する。
ステンレスのキレイな工房だった。レトの釜もキレイだ。
「１ロットいくらですか？」
「フツウのサイズで２万だ」
ジンと湯花邪無は、「持って帰って食べてみてくれ」と、６種類のソトアヤムとタフチャンプルを４種類をもらってきた。
「わたしレトルトのソトアヤムをあまり食べない」
自分で料理できるからだ。
「ミスタージャムはどうだ」
「食べたことがない」

「わたしたちはフツウの市民じゃないな」
「お昼食べてないからこれでいいか」
「ええ」
「ちょっと待ってて」
「私も行きます」
「いいわよ〜アースレンジでチンするだけだから」
ジャカルタでは、電子レンジのことをアースレンジと言うことがフツウになっている。
「これ私がつくるソトアヤムよりおいしい」
「わたしのつくるよりもおいしいかもしれない」
「カレーなんかおいしそうですね」
「考え直さないとダメね」
「ジニを貸してください」
「ジニはわさびをやります」
「わさびと鶏と米のスープだけど」
「ああ〜そうか」
「明日水野まさみさんが来るから頼んでいいか」
「そうしてください」
「わたしエミルと相談あるから出かける」
「明日のことだ」
「そう」
「わかった」
「ミスタージャムはラナン達とカラオケでしょ？」
「今晩」
「練習しておいた方がいい」
「下手だったらうわさになる」
「怖いな」
「オンナは怖いわよ」
「わたしこっちに帰らないかもしれない」
「待ってる」
「わかりました」

ジンとは、もう４年も続いている。
「遅くならないで」
「わかった」
ジャカルタの経済雑誌を走り読んでみた。少し時間がある。
湯花邪無は、先里風香的に考えてみた。
インド、中国、アメリカ、インドネシアの順に経済規模が大きい。
市場経済社会での経済は、再生産と消費である。中国は、１００年前から、世界の生産を引き受けてきた。そして、人口が多いことから、消費も活性化した。インドも、ほぼ、中国と似た、世界経済での役割を果たしてきた。
アメリカは、１００年前から消費の国だった。経済は再生産と消費だから、アメリカは、経済的には、片肺状態でずっとやってきた。
インドネシアは、再生産を役割にしているのか消費を役割にしているのか、よくわからないところがある。とにかく、働いて稼いで消費をしているのだ。過去の財産で食ってはいない。
過去の財産は、再生産を伴っていないので、ヨーロッパや日本のようになってしまう。経済的には片肺なのだ。
今後の１００年のジャカルタを考えると、豊かになって、財産で食べる風土が大きくなると予想される。賃料や金利や株式配当や金融資産の売買や土地などの資産売買だ。
再生産がないことなので、すべて片肺の経済になって、次第に勢を失ってしまう。
ただ２１１４年のインドネシアはグッドである。
女性も90％が働いている。大統領も女性であり、職場にあかちゃんを連れてくる社員も多くいる。職場に保育室がある会社も多い。みんなが働いている。つまり再生産している。当然ながら、消費も拡大する。
食糧は、タイなどの近隣諸国と農産物で、オーストラリアと畜産物で輸出入の帳尻を合わせていて、大きな人口を賄っている。原油も天然ガスも出る。
最大の問題はエネルギーである。アースバッテリーに救世主的望みを繋ぐことが好ましいと、湯花邪無は思う。
なによりも、ジャカルタの人たちにＮＯ１思考が少ないことが救いだと思ってしまう。インドを抜いて世界１になるなどといった雰囲気は、ジャカルタ

にはまるでない。
１５０年くらい前の日本では、ドイツを抜いて世界２位の経済大国になった時、もしかしてアメリカも抜けるのではないかと思った人が大勢いたらしい。どうしてＮＯ１を志向するのか、湯花邪無にはわからない。２１１４年の日本も、もうそんなチカラはないのに、Ｎｏ１を志向する人がたくさんいる。よくわからない。
「カレット駅近くだ」
「アースカーでは駐車できない」
「歩いても10分だ」
「地図を送る」
ラナンからカラオケの地図が送られてきた。
「ごはんを先に食べるから遅れないように」
「４人でごはん食べないで待ってる」
「17時30分だ」
ジャカルタのカラオケのお店は、レストランとセットになっている。２時間30分のうち30分で食事をしてカラオケボックスに向かう。予約がないと入れない。
湯花邪無は、カラオケレストランには行ったことがないが、システムは承知している。遅れて行ったら怒られる。
「ミスタージャム待ってた」
17時30分ピッタリにカラオケレストランに入った。ジーンズのパンツに履き替えていた。ジンが見たら驚く。
「コースで頼んだけどいいか」
「わかった」
「飲み物はなにがいいか」
「ジャワティー」
ラナンは３人を紹介してくれた。
湯花邪無は、顔は知っているのだが、名前がわからない。10代の社員４人ということはわかっている。
「ミスタージャムはカラオケに来たことがあるのか」
「はじめてだ」

４人は、顔を見合わせた。
ソトアヤムが運ばれてきた。
「ラナンたちは毎週ここに来ているのか」
「ポイントがついて助かる」
「なるほど」
「カラオケは日本語だけど日本ではどこにでもあるのか」
「何万店もあると思う」
「ミスタージャムは日本では行くのか」
「行ったことがない」
「歌を歌うとストレス発散できる」
「歌を歌うことはいいことだと思う」
揚げ物が出てきてごはんが出てきた。テーブルがおかずでいっぱいになる。
「カラオケボックスに行く」
ラナンは時計を見て、みんなに言った。
ラナン以外の３人は、少しぎこちない。やはり社長と一緒だからだ。
ラナンには、そういうものが全くない。隣のおじさんのように湯花邪無に接する。
みんな一斉に湯花邪無を見た。
ミスタージャムがどんな歌をどういうふうに歌うのか、興味津々なのだ。
湯花邪無は、観念して、「ラナン、イエスタデイ」と言った。
ラナン以外の３人が驚いて湯花ジャムの顔を見た。
そして静かになった。誰も何も話さなくなった。
１５０年前の音楽だが、ジャカルタの若者はみんな知っている。
「ミスタージャムは歌手だったのか」
３人が一斉に言った。
「驚いた」
ラナンは口が開いたままじっとしていた。
「恥ずかしくなると覚悟していた」
「ジンは知っているのか」
「ジンとカラオケレストランに来たことがない」
８時になった。

湯花邪無は、４人が歌っているジャカルタの音楽を一緒には歌えない。テンポが早過ぎる。
「ミスタージャム、時々誘ってもいいか」
「イエスタデイしか歌えない」
「また聴かせて欲しい」

月の事故

「ただいま〜」
「早い〜」
「わたしまだごはん食べてない」
「カラオケレストランだよね」
「ごはん食べてきたんだ」
「わたしもらったレトルトにしよう」
「今帰ったのですか？」
「エミル助けてあげないとピンチ」
「生産を増やせないのですか？」
「原料買ってくれれば簡単なんだけどイヤでしょ？」
「わかってるから」
「ステファノも木を増やしているから」
「接木が多いから難しくはない」
「そうですね」
「でも急がせると品質が落ちる」
「水野まさみさんは30％増やしたいんだけど、９月から10％増やすって返事しようと思う」
「ダメ？」
「相談して決めてください」
「日本では生産できないものだから」
「中国のこともモロッコのこともあるんだけど」
「唐辛子は栽培できるけどコショウなどは難しい」

「どうしてもｙｕｈａｎａの森にガンバってもらわないといけない」
「そうですね」
「ミスタージャムは明日はどうするのだ」
「料理学校と新宿に行く」
「水野まさみさんが来るけど」
「相談してくれればいい」
「わかった」
「水野まさみさんはわたしたちのことを知っているのか」
「誰も知らない」
「わかった」
「シャワーするけど」
８月20日だった。
「わたし先に行くから」
「ごはん食べて行ってよ？」
「わかった」
「遅くなるとミナに怒られるわよ？」
「わかった」
今日は水野まさみがジャカルタにやってくる。本社はジャカルタなのだが、日本の会社なので、新宿の店長が来ると緊張するのだろう。早めに出勤する。
湯花邪無は眠ってはいられなくなった。
鶏かゆを食べた。
湯花邪無は、アースカーでニューヨークのライブテレビを見た。自分でも、何が気になるのかわかっている。
アラスカでアースバッテリーの普及が進んでいるのだそうだ。電線だって傷むだろう。アラスカでは、アースバッテリーの反対運動が少ないのだそうだ。フツウの家庭ではアースバッテリーですべて暮らせるようになっている。アースストーブが絶好である。アースストーブと床暖房の組み合わせで、新しい住宅がドンドンできている。暖房のお金がゼロなのだ。
「おはよう」
「おはようございます」

ジンが来ているはずである。
「ジンおはよう〜リニもおはよう」
「ミスタージャム、今度イエスタデイを聴かせてください」
リニが言った。ジンの秘書だ。ラナンたちのうわさが流れている。
「わたしミスタージャムの歌なんか聴いたことがない」
「ジンは何年ミスタージャムと一緒に仕事しているのですか？」
「４年」
「どうして歌を聴いたことがないんですか？」
「わからない」
「仕事ばかりしないでたまにはカラオケで息抜きするのもいいです」
「そうね」
これだと、社内のすべてにうわさが流れているのだと思った。
「なにかありますか？」
「順調」
「もうすぐ水野まさみさんが来ます」
「私は料理学校へ行きます」
「わかりました」
湯花邪無は、月水金の朝、ミナの料理学校に通っている。スパイス学の教授を９月からはじめるのだが、料理ができないスパイス学の教授は何者なのか、自分にもわからなくなったからだ。
「ミスターユハナおはようございます」
「みんなもおはよう」
先生のミナにとっては、湯花邪無は特別なのだ。イケメンで33歳で独身である。失業して主夫の修行をしていることになっている。
「今日は、アヤムリチャリチャをつくります」
湯花邪無は、スマホですぐに検索して日本語に置き換える。鶏肉とトマトの炒め物らしい。
「レシピを配ります」
「買い物をしてきてください」
月水金の午前中のミナの料理教室は８人である。プロの卵が５人いて３人が女性である。リーダーは一番若いと思われる男のプロの卵だ。

「トマトはわたしが選ぶ」
３人の女性のプロの卵の１番年上らしい女性が言った。
「ラエル彼女はいくつなんだ」
「年は話せない」
「料理は上手なのか」
「もう任せてもらってるらしい」
湯花邪無は、１番若いラエルとは話ができる。
「それでは調理の手順を配ります」
「わたしの材料をください」
ミナもみんなと同じものをつくる。湯花邪無たちは、ミナをお手本に調理する。
「ミスターユハナ、今日はよくできました」
「次のわたしとの食事の日を考えておいてください」
教室のみんなは笑っているだけである。
「ただいま〜」
「おかえりなさい」
相変わらずスパイスｙｕｈａｎａのお客さんは多い。
「ジンと水野まさみさんはスパイス工房に行きました」
「わかりました」
「私は新宿に行きます」
「すぐ行くのか」
「お茶はどうする？」
「何かありますか？」
「順調だ」
「コーヒーをいただこうか」
「ホットでいいのか」
「お願いする」
リニは、コーヒーを煎れに行った。
湯花邪無は、ジャカルタ空港まで、ニューヨークのライブテレビを見ていた。
月のホテルで事故があったらしい。ホテルといってもソーラーバッテリーの

範囲だから、大きなホテルはできない。ソーラーバッテリーが故障してドーム内をキレイにすることができなくなったらしい。一旦全員地球に帰るらしい。月ではアースバッテリーは使えないのだろうか。湯花邪無にはよくわからない。しがらみがあって変えられないのかもしれない。
いつもより30分遅い便で羽田に着いた。
「湯花邪無さん待ってました」
真野裕也と有村聡が到着ロビーにいた。
「ちょっと時間をもらっていいか」
「どうぞ」
「車なのか」
「なぜだ」
「車で話したい」
「新宿のスパイス湯花に送っていく」
「わかった」
湯花邪無は、明日はジャカルタである。北千住から電車かタクシーで行くことになる。
「華美美鈴を拉致していた男を見つけた」
「誰なんだ」
「ボディガードの会社の人間だ」
「そんな会社があるのか」
「そこの２人だ」
「写真を見せる」
60歳と50歳の男に見えた。
「確認はとったのですか？」
「事件ではないので自白しない」
「どうしてこの２人だとわかったのですか？」
「華美美鈴に確認した」
確かに、華美美鈴だったら顔を覚えているだろう。
「前科はないのか」
「出国検査の顔パスもＯＫだ」
「拉致犯人ではないか」

「華美美鈴は訴えない」
「私に知らせてどうしようとしているのだ」
「今のところこの２人とこの２人を雇っている男達は湯花邪無を知らない」
「もし湯花邪無を知ったら、華美美鈴のように狙われる」
「それで知らせているのか」
「俺達は警察だ」
「気をつけろなのか」
「佐野次郎と飯野修だ」
湯花邪無は新宿のスパイス湯花の前で降りた。
「こんにちわ〜」
「おかえりなさい」
なぜだかみんなの声が揃う。
「今日は水野まさみのスパイス教室はどうしたのか」
「今日はジニがやっている」
水曜日は、水野まさみがスパイス湯花でスパイス教室をやっている。今日は水野まさみがジャカルタである。ジニがやっているらしい。
「コーヒーですか？」
「すぐにスパイス教室に出るから」
水野まさみがいないと、牧野由香がなんでやっているようだ。
湯花邪無は、スパイス教室にそっと入った。
「ミスタージャム後に座って」
「今日はナシゴレンをやっている」
「お米の炒め物だ」
「インドネシアのお米を使ってください」
「タイ米だと手に入りますからタイ米でもいいです」
湯花邪無は、ジャカルタにも東京にもいるので、ごはんの違いがよくわかる。
湯花邪無は、北千住のスーパーマーケットに寄った。無性に日本食が食べたくなる。湯花邪無にできることは、刺身を買うことだ。
わさびはもう冷蔵庫にはないだろう。
沢風ゆりのありがたさがわかる。湯花邪無が裏切ったわけではない。確か

に、湯花邪無と華美美鈴は、こころが繋がっているところがある。しかし、現実には、会えないのだ。沢風ゆりのようにベッドを共にすることなどできない。
なぜ嫉妬しなければならないのか、湯花邪無にはわからない。なぜ警察に湯花邪無を売ったのか。
沢風ゆりに怒りがあるよりも、おいしいごはんがなつかしい。
８月21日だった。
湯花邪無はパンを買うのを忘れた。朝ごはんが食べられない。
タクシーである。タクシーもライブテレビをやっている。
「チャンネル変えてもいいですか？」
「昨日月から帰る途中の宇宙船が消えました」
「そのニュースをやっています」
湯花邪無は気がつかなかった。
月のソーラーバッテリーが故障したからだ。
「どうして消えたんですか？」
「とんでもないところに飛んで行ったのか何かに衝突したのか攻撃されたのか」
「何人乗っていたのですか？」
「１８２人」
これはとんでもないことになった。
多分、生きてはいないだろう。
アースバッテリーは故障するのだろうか。アースバッテリーも２重に持っていればよかったのにと思う。しがらみがあるからなかなか難しいかもしれない。

華美美鈴がジャカルタ自動車にやってきた

「おはよう」
「おはようございます」
湯花邪無は、ジンの部屋に向かった。

「昨日の報告をしたらダッカに行ってきます」
「何かありますか？」
「順調です」
「水野まさみさんは10％増の数量で了解しました」
「昨日はｙｕｈａｎａの森にも行きました」
「人材を３名増やしました」
「スパイス工房は増産は難しくありませんが、ｙｕｈａｎａの森がタイヘンです」
「あんまりムリをしないように」
「承知している」
「これでいいか？」
「宣伝したりキャンペーンしたりしないように気をつける」
「商品が切れ始めたらホントに切れてしまうから」
「そうですね」
「これでいいか？」
「わかった」
「今晩は？」
「こっちだ」
「わかった」
リニが入ってきた。ドアがいつも開いている。２人の話はなかなかできない。
「コーヒーにしたけど」
「ありがたい」
湯花邪無は、９月１日の大学の講義の原稿を仕上げようと思った。スパイスｙｕｈａｎａのパブリックホルダにも公開しないといけない。
９月１日はペッパーである。10月１日は唐辛子を取り上げる。11月１日を何にするかである。
ターメリックはｙｕｈａｎａの森でも大量に栽培している。若者が多いのだが、マスタードを頻繁に使うようになっている。ｙｕｈａｎａの森でもからし菜を栽培している。ジャカルタでは、近年は、若鶏のサテにマスタードを使っている若者が多い。

湯花邪無は、ＰＣの自分のファイルを探った。スパイスのことでは、実験も多くやっている。どんなスパイスでも話ができる。
「お昼を食べに行くけど」
リニが誘いに来てくれた。
「食べると言ってないけど」
「私が頼んだ」
「ありがとう」
「キャプチャイにごはんだけど」
八宝菜である。
「ミスタージャムはごはんはどうしているのだ」
「食べている」
「それはわかっているけど外食なのか」
「最近は料理学校に行っているからソトアヤムは自分でできるようになった」
「日本のラーメンはできるのか」
「それはできる」
「ターメリックを入れてもおいしくなる」
「それは知らなかった」
「今度やってみてくれ」
「ありがとう」
「ジンに教わらないのか」
「料理学校で教わっている」
「ジンは料理学校の先生もできる」
「聞いてみる」
16時だった。湯花邪無は、ニューヨークのライブテレビを見てみた。
アメリカ政府が、更に州政府に権限を移すらしいという報道である。アメリカは、小さな中央政府を目指している。もう世界の警察官の役割も縮小している。柔らかな連邦制を目指している。
権力志向のまとまりでは、国家独立の機運が高まる。民族単位になろうとしている。
アメリカはまだいいのだが、中国やトルコやロシアやインドやアフリカで

も、そしてイギリスでも、中東でも、昔、国家として強大になるために集まったものを、元に戻そうという機運が強くなっている。
強い者が地球を支配してきた、恐竜と人間の支配の歴史が、少し変わるのかもしれない。覇権などという不遜な行為が少なくなってきている。襲って統合して大きくなった国家が、襲って統合する前に戻ってきている。北アメリカが原住民の元に帰ることはないのだが、どこかの地点にまで戻っている。
やはり、地球は小さくなったのだ。地球全体が見えると、人に恐怖が薄くなる。
大航海時代や秀吉の時代は、海の向こうに何があるのかわからなかったのだ。権力者は、海から襲ってくるかもしれない何かを恐れて調べに行かせたのだ。
地球はもう小さい。
２１１４年には、宇宙の向こうから何かが襲ってくるかもしれないことを恐れている。
「ただいま」
ジンはまだ帰っていなかった。
ダッカは近いのだが何かあったのだろうか。
そうかといって晩ごはんの準備をするほど腕自慢ではないし期待もされていない。
ジャカルタのライブテレビを見るともなく聞いていた。まどろんでいる。
華美美鈴がジャカルタ空港でインタビューを受けていた。
「ジャカルタ自動車の工場の１部がアースバッテリーになります」
「点灯式にやってきました」
湯花邪無は跳び起きた。
８月21日木曜日である。
湯花邪無は、ジャカルタ自動車のホームページを調べた。８月22日11時から点灯式があってお昼のパーティーがある。ジャカルタ工場は１つしかないので場所は理解できる。
「ただいま」
「おかえり〜」
「ごはん用意するから待って」

湯花邪無は、胸が高鳴っているのだが、ジンが帰ってきたからではないことは承知している。
明日の11時である。ジャカルタの北50キロのところにジャカルタ自動車がある。11時にどうしたら行けるのか。料理学校を休まないと難しいかもしれない。
そもそも、会社に入れるのだろうか。ジャカルタのホテルのどこに泊まっているのだろうか。アメリカ人らしいカメラマンらしき女性と、警備員らしい２人の男と、フロアーマネージャーぽい人に守られているのだろう。

２１０９２１時

８月22日だった。
「朝ごはんだけど」
「ソププブンツウツ」
「え？」
「スマホで調べて」
「牛のテールスープだった」
「ああ〜おいしい」
「朝ごはん用にごはんが少し入ってる」
「ああ〜いいです」
「ミナに教えてもらって」
「おいしい」
「ジニが来るから」
「一緒にカワン食品に行く」
「試作をお願いするから」
「レシピはできたのか」
「ジニのレシピだ」
「わさびと鶏と米のスープのレトルトだ」
「わかった」
湯花邪無は、ジンより早く出た。

「おはよう」
「おはようございます」
「早いですけど」
「ちょっと用事がある」
「ジンはまだ来ていません」
「ジニは？」
「羽田を出たと連絡がありました」
「わかった」
「ジンとジニに出かけたと言ってください」
「お茶は？」
「なんかありますか？」
「順調です」
「わかった」
湯花邪無は、不思議そうなリニを残して、裏からアースカーに向かった。
「もしもしミナ？」
「ミスタージャムどうした？」
「急用ができて料理学校には行かれない」
「面接でもあるのか」
「同じようなものだ」
「ソププブンツウツを次に教えてくれないか」
「どうしたのだ」
「ご馳走になった」
「オンナか」
「そういうことではないが友達だ」
「わかった」
湯花邪無は、ジャカルタ自動車に向かった。ジャカルタの北50キロにある。
運転をアースカーに任せて、インドネシアのライブテレビを見ていた。
ジャカルタ自動車のアースバッテリー工場を紹介していた。インドネシアでは、電力不足である。工場の中の１ラインとはいえ、アースバッテリーにすることは、好印象を持たれる。
それは、生活者に対してだ。

産業界では、すべての人が賛同しているわけではない。電力の会社もあるのだ。
アースバッテリーは、アースカーでは、80キロしか出ない。したがって、圧延機などを動かすことはできない。ジャカルタ自動車も、工場の１部分のみアースバッテリーに替えるのだ。
批判を抑える意味もある。微妙な状況なのだ。
10時にはジャカルタ自動車の門を通り過ぎた。
11時から点灯式だと書いてあった。門に飾りつけがされていた。
大きな駐車場があった。多分招待状らしいものを見せている。駐車場に入れない。
マスコミ関係者の駐車場があった。湯花邪無は、迷わず、奥に駐車した。隣の車に腕章が20枚くらいあった。１つ拝借した。
多分、身分証明書を下げないといけないだろうと思った。
４枚あった。
１つ拝借した。
愛はすごいと我ながら思った。愛は人が動く押しボタンである。ギリギリのことをやる。愛がよろいに変化したら、嫉妬になって事件になる。先里風香を読んでいる。そのとおりだと思う。
目立たないように、小走りでジャカルタ自動車の門に向かった。
多分、「身分証明書を揃えなかった」といって、新入社員が怒られるだろうと思う。申し訳ない。
湯花邪無は、何も持っていない。セキュリティーも簡単だった。空港と同じである。
５分が、すごくながく感じられた。じっとしていた。
社員らしき多くの人が集まってきた。近隣の工場の関係者も集まってきて、ゴチャゴチャになった。ただ、検査がしっかりしているので、危なくはないと思っていた。
後から肩を叩かれた。湯花邪無は一瞬にして凍った。
アメリカ人らしいカメラマンの女性だった。どうして湯花邪無を見つけたのかわからない。
メモを渡された。

ホテルの名前と２１０９と21時と書いてあった。
21階の９号室だ。21時だろうか。
「ここにいたらヤバイからホテルに行ってくれ」
湯花邪無は、そのまま、門を出て、マスコミ関係の駐車場に向かった。
「なんで身分証明書がないんだ」
「腕章だけで入れますから」
説得されてシブシブ歩いていた。
湯花邪無は、そっと車の下に腕章と身分証明書を入れた。
まだ10時45分だった。
湯花邪無は、ジャカルタのライブテレビを見ていた。中継がはじまっていた。ジャカルタ自動車から、工場の１ラインのアースバッテリー化の点灯式だ。
11時になって、華美美鈴が現れた。一瞬で静かになった。インドネシアカラーの深い緑のドレスだった。
社長の話があって、市長の話があった。そして、華美美鈴が前に出た。
何かメッセージを読み上げるらしい。
「８月１日に先里風香の代理でわたしがやってきて、今日８月22日に工場の１ラインがアースバッテリーになることは、感激に値する」
華美美鈴のメッセージは短いものだったが、はじめてだった。空港などでの囲みの取材での声を聞いているが、公の場でのメッセージの声は、初めて聞いた。
「ただいま」
「おかえりなさい」
ジンの部屋に急いだ。
「ジンとジニはまだ帰っていません」
「そうか」
「今日はなにをやったのだ」
「料理学校を休んだ」
「飽きたのか」
「用事があった」
「ヤバイことか」

「リニに嫌われるようなことではない」
「ごはんは？」
「新宿に行く」
「わかった」
「何かありますか？」
「順調だ」
「商品が薄いことが悩みだ」
リニはジンに似てきたと思った。
湯花邪無は、12時の羽田行きに乗った。１時間遅れだ。
「こんにちわ〜」
「おかえりなさい〜」
「今日は水野まさみさんはお休みです」
牧野由香がやってきた。
「何か言われていますか？」
「スパイス30％増やしたかったが10％に増やすことになった」
「わかりました」
「ジニがジャカルタに行っています」
「コーヒーでいいか」
「他には？」
「順調です」
「ありがとう」
「ミスタージャム、イエスタデイを聴かせてほしいけど」
「なぜだ」
「水野まさみさんから聞いた」
「ジャカルタではうわさになっているって」
「オーバーだ」
「カラオケで歌ったことは事実なのか」
「まあ〜そうだ」
「今度メールするから一緒に行ってくれ」
「わかった」
「お昼はどうしたのだ」

「空港でサンドイッチだ」
「何かつくれるけど」
「お菓子があったらお願いしたい」
「わかった」
湯花邪無は、19時の羽田発ジャカルタ行きに乗るつもりなのだ。台風が心配だった。どんなことがあっても行きたいのだ。
連絡をしてはいけない。
17時になってジニが帰ってきた。
「クスマとマルキスに会った」
「わさびを持って行った」
「多分徹夜で新鮮を保ってレトできるかやると思う」
「できなかったら添加式に変えないといけない」
「わたしの実験ではできる」
「わたしの手作りほど香りはしないだろうけど」
「賞味期限は？」
「半年にした方がいい」
「わさびの香りなのか」
「そうだ」
「１ロット２万だがいくらなのか」
「今日はそこまで相談していない」
「試作ができない可能性があるんだ」
「そうだ」
「今度はいつ行くのか」
「８月29日だ」
「おいしいといいけど」
「心配はしてる」
「そうだな」
「おつかれさま」
「何をしているのだ」
「調べものだ」
「先に帰っていいか」

「どうぞ〜ごくろうさま」
湯花邪無は、時間をつぶしているのだ。何度も時計を見る。少し早いが羽田に向かった。
華美美鈴と食事をすることはない。どうなるかもわからない。ただ、湯花邪無の顔を見たいだけだと思っている。４人にガードされてるのだ。食事などできるわけがない。
羽田でおそばを食べた。
19時のジャカルタ行きに乗った。
19時55分ジャカルタ着である。
アースカーでホテルへ向かった。まだ時間が早いのだが、どこか近くにいようと思った。
ジャカルタのライブテレビは、ジャカルタ自動車の工場の一部がアースバッテリー工場になったことを伝えていた。華美美鈴が何度も登場したのだろう。深い緑のドレスである。20時25分にはホテルの地下の駐車場に入った。
湯花邪無は、どこでもフリーパスである。ジャカルタの有名人ではないが、ジャカルタにプラスをもたらす１人には間違いない。
気なるのは、台風である。明日は飛行機は飛ばないだろうと予報していた。風速が60メートルもある。明日はジャカルタである。フツウは明日の朝ジャカルタに入るのだが、台風だから今晩入ったとジンに言うしかないと思った。
早くホテルに入り過ぎたと思った。アースカーで横になっているしかない。ひょっとすると、監視されているかもしれない。ホテルのロビーでコーヒーを飲みたいのだが、それもおかしいし危険である。もっと考えればよかったと思いながら、アースカーで何度もスマホの時計を見ながら横になっていた。
やっと20時55分になった。
２１０９２１時である。
21階に上がった。
華美美鈴がこのホテルに泊まっているかどうか、もしかしたら誰も知らないかもしれない。21階はどうなっているのかわからない。

ぎこちなく21階に出た。
カサブランカのホテルで出会った警備員２人とフロアーマネージャーのような男がいた。
フロアーマネージャーのような男は、どこかに電話をした。
３人は湯花邪無を覚えてくれていた。
多分、21階は華美美鈴だけなのだろう。
９号室の前で、フロアーマネージャーのような男は、また電話した。
中からドアが開いた。
「どうぞ」
華美美鈴が顔を出した。
「どうもありがとう」
華美美鈴と湯花邪無は、同時にフロアーマネージャーに言った。
広い部屋だった。旅立つ服装だと思った。
「元気ですか？」
「ゆりと連絡がとれなくなっていて心配しています」
「北千住のマンションから出て行きました」
「帰ってこないと思います」
「わたしのせいね」
「私のこころがどこに向かって揺れているのか知っているから難しい」
「真野裕也さんと有村修さんからあなたのことで確認がありましたが」
「その情報は沢風ゆりから出ています」
「理由はわたしね」
「よくわかっているのにあなたに会おうとするわたしはワルイオンナね」
「私もムリをしている自分をどうしようもないと思っています」
「もう会いたくても会えないと思っていました」
「東京には行かれないし」
「私も会えないと思っていました」
「どのくらい時間があるのですか？」
「時間はありません」
「もうニューヨークに帰ります」
「時間ですか？」

「呼びに来ます」
華美美鈴は、すっと湯花邪無に近づいた。
「ノックされる前に」
華美美鈴の右手が湯花邪無の右肩にかかってそのまま唇が近くなって、ただの挨拶ではない唇になった。
ノックされた。
ほんの１分くらいの時間だから会わせてくれと頼んだに違いない。
ドアに向かって歩きながら華美美鈴と湯花邪無は、フツウのような話をした。華美美鈴の目の奥のなみだが哀しみを表している。
「先里風香さんは元気ですか？」
「湯花邪無さんには感謝しています」
何事もないかのように、フロアーマネージャーに聞こえるように話をした。
アメリカ人のカメラマンぽい女性と21階の警備の男性２人とフロアーマネージャーぽい男は、日本で、華美美鈴が湯花邪無に助けられたことを知っている。華美美鈴が、１分でもいいからお礼を言わせてくれと頼んでいるに違いない。
華美美鈴が、男としての湯花邪無に会いたがっていることなど、夢にも思わないだろう。
華美美鈴は、今は、危険の中にいて緊張して過ごしている。恋など微塵も感じさせないと思う。
湯花邪無は、21階から駐車場に降りた。警備の１人が一緒にエレベーターに乗って駐車場まで送ってきた。
湯花邪無は、そのままタベットのマンションに向かった。
ジャカルタ発ニューヨークの時刻表を調べた。21時38分だった。
多分、21時40分頃のプライベートジェットに違いない。
「もしもし」
「どうしたの？」
「明日は台風で飛行機が飛ばないだろうから今来ました」
「グッドね〜待ってる」
「ごはんは？」
「食べていない」

「わかった」
こんなに愛しているジンがいるのに、華美美鈴に惹かれる自分をとどめることができない。
愛とは不思議なもので、人が動く押しボタンである。

あいしている

８月23日だった。
「私今日お休みの日だから」
「わかりました」
「鶏かゆを食べて行って」
「ええ」
「明日は八ヶ岳だよね」
「ええ」
「今日は？」
「東京に行きます」
「あなたって東京に行くって言うのね」
「わたし夜の疲れが残ってるから起きられない」
ジンの意味のある笑いを残して、湯花邪無はシャワーに向かった。
「おはよう」
「おはようございます」
「今日はジンはお休みの日です」
「わかった」
「コーヒーにしたけど」
「ありがとう」
「これは何ですか？」
「昨日華美美鈴がジャカルタ自動車に来たんだけど」
「華美美鈴の使いの人がスパイスｙｕｈａｎａのスパイスを買いにきてこれを置いていった」
「華美美鈴のメモだと思うけど日本語なのでわからない」

「ジンは見たのですか？」
「見てたけど漢字じゃないからわからないけどおいしいって褒めてくれてるんじゃないかって言ってた」
「あいしている」
湯花邪無は知らなかった。
「もらっていいか」
「なんて書いてあるんだ」
「グッドテイスト」
「そう書いてくれればいいのに」
「わたしお店にいるから用事があったら呼んでくれ」
「わかった」
８月17日にカサブランカのホテルで華美美鈴と会った。そして８月22日にジャカルタで会った。もう会えないと思っていたのに、どうしたことだろうか。それにしても、「あいしている」をメモに残すとは、勇気がある。
湯花邪無は、「あいしている」を財布にしまった。
ジャカルタのライブテレビを見た。今日は、もうジャカルタ自動車のアースバッテリーのニュースはやっていなかった。
ニューヨークのライブテレビも見た。アースバッテリーのニュースは何もなかった。
ジニからメールがきた。
「８時の新宿発新幹線に乗るけどいいのか」
「私も同じ新幹線にする」

わさびの６分割真空パック

沢風ゆりがいなくなって「ただいま」も言わなくなった。北千住のマンションが暗いことが寂しい。
ミナに教わったジャワカレーをつくろうと思った。
集中してつくる。
けっこうおいしかった。時間をかけてメモのとおりにつくっているのだ。お

いしいに決まっているのだが、食べるまで不安になるのが料理の良いところだ。
８月24日だった。日曜だ。
「ミスタージャムこっちだ」
「ジニおはよう」
「朝ごはん食べたか」
「いいや」
「インドネシアのおにぎりつくってきた」
「お茶はそこで買って」
山井生江と次郎が新幹線の諏訪駅で待っていた。
「湯花さんおはようございます」
「みんなミスタージャムと呼ぶから」
「わかりました」
「信州スライスに行ってもいいですか？」
「かまいません」
天海豊がすぐに現れた。
「どうですか？考えは変わりませんか？」
「どういうことでしょうか」
「よくあります」
「出来上がったのにクライアントの考えが変わった」
「私の考えは変わっていません」
「それでは見てください」
天海豊は、４人を試作工場に案内した。
「焦点は、わさびを６分割して真空パックにすることです」
「１つずつはハサミでカットして使います」
「大きいわさびは、カットされてしまう部分も出てきます」
「小さいわさびは、最初から省いてしまうことが好ましいです」
「それではいいですか？」
天海豊は、あらかじめ準備していたのだろう、すぐにスイッチを押した。
10秒くらいで１本できるのではないかと思った。
「１００本あるので全部やります」

18分くらいで１００本が出来上がった。
「商品価値としては完成品だと思います」
「真空パックになっているのですか？」
「触って確かめてください」
「刺身を用意しています」
「どうぞ」
天海豊は、刺身を冷蔵庫から取り出した。
「どうぞご自分で家庭のつもりで」
ジニがハサミで１つをカットしてわさびを取り出した。
一見スライスされていることが表面上は見えない。それほど鋭利にカットされている。しかもたたきのように砕かれている。
「香りがいいです」
「そのままだと辛い」
「刺身にまぶすとグッドです」
湯花邪無もスライスわさびで刺身を食べてみた。
おいしいと思った。
おいしいというか香りがなんとも言えない。
「真空の袋は印刷できますか？」
「ｙｕｈａｎａスライスわさびと透明だけど透けて見えるように印刷できますか？」
「透明だけのシートはないでしょうから」
「よろしくお願いします」
「山井さん、この１００本はいただいて帰っていいですか？」
「どうぞかまいません」
「ジニ、明日ジャカルタに20本持って行っていいですか？」
「かまいません」
「冷蔵しますからちょっと待ってください」
１回の試作しかやってないのだが、この機械だと完璧にできると、湯花邪無は思った。
「今から茅野の八ヶ岳わさび工房に行って、この機械の設置を考えようと思うんだけど」

「山井さんの考えはどうですか？」
「うれしいです」
「次郎さんもいいですか？」
「お願いします」
「ジニもいいですか？」
「グッドだ」
「天海さんも一緒に来ていただけますか？」
「わかりました」
諏訪から茅野までは車で30分くらいだ。
「ジニ何時ですか？」
「11時」
湯花邪無は、八ヶ岳わさび工房を見て回った。工房は稼動していない。次郎がいないと動かない。それほど売上げを期待していない。売り先も道の駅で販売しているだけだ。
「ここに設置しようと思っています」
次郎は、スライスわさびの機械の設置場所を決めていたのだろう。湯花邪無に説明した。
「最初は全自動とか考えないでガンバろうと思っている」
「それがいい」
「ネット販売ではここから出荷するのか」
湯花邪無は、どうするか考えていなかった。
「生産して冷蔵しておくけど新宿に移すだけ新鮮でなくなると思う」
「出荷はどうするのですか？」
「冷蔵で出荷する」
「新宿では店売りだけ移す」
「店売りは冷蔵ケースが必要なんだ」
「そうだ」
「天海さんどうでしょうか」
「十分です」
「スケジュールはどうなさいますか？」
「10月１日から生産開始できますか？」

「現在の試作機と同じものを作ります」
「９月15日に設置でいいですか？」
「わかりました」
「発売も10月１日になりますが」
「承知しました」
「機械の代金はいつ払っていただけますか？」
「９月30日でいいですか？」
「振り込みます」
「４２２万です」
「山井さんお願いします」
「わたしですか？」
「社長だしお金も入っているはずです」
「承知しました」
「次郎さんいいですか？」
「承知しました」
「ジニいいですか？」
「至急にホームページを修正します」
「外箱あった方がいいですか？」
「送るからあった方がいいです」
「道の駅でいくらで売っているのですか？」
「１３００円です」
「同じ値段でできますか？」
「１２００円でいいです」
「２本だったら送料負担させていただくのでどうですか？」
「わかりました」
「わさびの森とわさび工房とスパイス湯花の価格は水野まさみさんと相談してください」
「承知しました」
「お昼ごはんを食べに行きましょう」
「ご馳走させてください」
湯花邪無はうれしかったのだ。なによりもみんなが協力して難しいことを

やってくれていることがうれしかった。

メキシコシティーで行方不明

湯花邪無は、北千住のマンションに帰ってきて、今日のスライスわさびであったことをワード２１１４でまとめて書いた。まとめて書くというより、話した。ワード２０８０から話すと言葉になっているのだが、安心できるものではなかった。ほっておいたら、失礼になってしまうこともあった。今年発売されたワード２１１４では、ほぼ完璧である。
テンキーを使うことが少なくなった。文を最終的に完成させる時だけ使う。
「承知しました」
夜なのに、水野まさみから返事が来た。
「早速明日から作業をします」
ジニからも返事がきた。
「お役に立てたかもしれません、ありがとうございました」
天海豊からも返事が来た。
「明日は料理教室ですか？」
ジンからも返事が来た。
「いつも楽しい時間をありがとうございます」
山井生江からは、山井生江らしい返事が返ってきた。
８月25日月曜である。
８時のジャカルタ行きに乗った。
50分でジャカルタである。
眠れる時間でもない。もう今日の予定を頭に叩き込んでおかないといけない。
今日は料理学校だ。
昨日の夜は刺身にスライスわさびに白いごはんで食べた。
「おはよう」
「おはようございます」
朝早くからお店は混んでいるようだった。

「うまくいったようね〜わさび」
「うれしい」
「ジャカルタはわさびと鶏と米のスープをやるわ」
「ああ」
「料理学校でしょ？」
「すぐ出かける」
「ここ寄るでしょ？」
「ええ」
湯花邪無は裏から料理学校へ出かけた。
「ミスターユハナ、おいしいレストランを紹介するけど」
「今は忙しいから待ってくれ」
「職探しに忙しいのか」
「そうだ」
「みなさん、今日はチャプチャイです」
「レシピを配ります」
「買い物に行ってください」
海鮮の野菜炒めになっていた。
「今日はわたしが買い物する」
「お金が足りなかったら誰か貸しておいて」
１番若いラエルが言った。
タコもエビも貝も買って野菜を買った。
「買い過ぎたかもしれない」
「お金はあるのか」
「足りた」
「帰ったらみんなで分ける」
８人は、もう仲間のようになっていた。
「わたしの材料をください」
９人分の材料を買って１人分をミナに渡す。
「それでは、わたしのやるように、いいですか？」
８人は手際が良くなっていた。
最もどうにもならない生徒だった湯花邪無さえも、手際が良くなっている。

「今日は早いのね」
「それでは食べてみましょう」
「ミスター湯花のチャプチャイをわたしに」
「わたしのをどうぞ」
「なぜだ」
「できがワルイからだ」
「おいしくないと思っているのか」
「当然おいしくない」
「少しは進歩している」
「それではいただきます」
最近は、みんな自分の料理を、少しはおいしいと思えるようになってきている。
「ミスターユハナのチャプチャイはまあまあです」
「おいしいとは言えませんが食べられないことはありません」
「もっとプロの料理人の料理を食べた方がよい」
「おいしいレストランを教えるから時間をつくってください」
「忙しいからちょっと待ってくれ」
８人は、みんな笑っている。ミナにアプローチをされている湯花邪無をおもしろがっている。
「ただいま〜」
「おかえり〜」
「今日の料理はなんだ」
「チャプチャイ」
「おいしかったのか」
「私のはミナが食べたからわからない」
「どうしてだ」
「１番できがよくない生徒だからだ」
「おいしくはないけど食べられるそうだ」
「ミナに誘惑されないように」
ジンには読まれている。
「お昼はどうするんだ」

「新宿に行く」
「わかった」
湯花邪無は、ジャカルタ空港までのアースカーでニューヨークのライブテレビを見た。
アースバッテリーの話は何もなかった。
ホントに、華美美鈴とは、もう会うことがないかもしれないと思ってしまう。
アースカーで羽田を出たところで、手を挙げている女性がいた。
華美美鈴のホテルの部屋を伝えてくれているアメリカ人のカメラマンらしい女性である。
「どうぞ」
「どうしたのですか？」
「華美美鈴がいなくなった」
「多分ケータイを棄てたと思う」
「拉致されたのか」
「わからない」
「あなたに会いに来ている可能性もあるから今朝からつけていた」
「あり得ない」
「オンナは恋すると見境がないから」
「私はもう会えないかもしれないと思っていた」
「なんかアイデアはないか」
「どこでいなくなったのだ」
「メキシコシティー」
「いつだ」
「23日だ」
「何があったのか」
「新幹線を建設する」
「アースバッテリーで動かそうとしている」
「その会議があった」
「華美美鈴も出席したのか」
「そうだ」

「会議が終わって部屋に帰ってこなかった」

「いつもの４人がいたのか」

「そうだ」

「会議は混乱したのか」

「大きな投資なのにリスクは冒せない」

「電力会社の大きな需要になる」

「新幹線は動かせるのか」

「分散して各車両にアースバッテリーをつける」

「可能なのか」

「可能だ」

「結論は出たのか」

「出ない」

「華美美鈴がいなかったら新幹線はアースバッテリーにはならない」

「そしたら反対しているグループが拉致したのではないか」

「今日も会議があるのではないか」

「日曜は休んだがメキシコシティーは朝になるから会議がはじまる」

湯花邪無は、アースカーを羽田に向けて、時計を見てメキシコシティー行きの時刻表を調べた。

「メキシコシティーへ行くのか」

「多分、何の助けにもならない」

「会議でアースバッテリー新幹線案はダメになる」

13時40分の羽田発メキシコシティー行きに乗ろうと思った。

「あなたの名前を知らないけど」

「サマンサだ」

16時10分にはメキシコシティーに着ける。メキシコシティーは０時10分だ。深夜だ。着いてどうするのか、湯花邪無には何もアイデアがなかった。

「もしもし」

「お昼から新宿でしょ？」

「急用ができたので新宿には行けなくなった」

「なにかありますか？」

「順調だから平気」

「また連絡します」

「スライスわさびのことは進めていいのか」

「お願いする」

「わかった」

水野まさみに知られないようにゆっくり話した。

メキシコの新幹線

病室７０６

メキシコシティーは夜中だった。
湯花邪無はずっと飛行機の中で考えていた。
しかし、考えが進まない。
メキシコシティーのことを何も知らないのだ。
イメージが湧かない。
メキシコシティーの地図だけを概略見た。
サマンサはずっと眠っているようだった。
メキシコシティー空港０時10分だ。
空港で車が待っていた。
カサブランカとジャカルタのホテルで湯花邪無が会ったフロアーマネージャーのようなオトコと警備員らしきオトコの３人が待っていた。
「ジムだよろしく」
フロアーマネージャーのようなオトコは、ジムと名乗った。アメリカ人だろう。
「会議が行われているのはどこなんだ」
「レフォルマ通りのホテルだ」
「華美美鈴がいなくなったことは会議のメンバーは知っているのですか」
「知らない」
「今日の会議に華美美鈴がいなかったらそれでいい」
「アースバッテリーの新幹線に決まってほしくない人たちの犯行なのか」
「事実はわからないが、多分そうだ」
「今日の会議が終わったら解放されるのか」
「多分そうだ」
「華美美鈴を傷つけると反動が大きいからやらない」
「あと20時間くらい監禁すればいいのか」
「12時には決まっている」

「華美美鈴はどういうふうに現れるのですか？」
「何を言っているのかわからない」
「申し訳ないで現れるのですか？」
「そうなったらアースバッテリー反対の人たちはラッキーだ」
「近くに病院はあるのか」
「なぜだ」
「めまいがして倒れて担ぎ込まれた」
「目が覚めたら25日の12時だった」
「いなくなったのは23日の夕方だから現実的ではない」
「他にどうやって探すのだ」
「レフォルマ通りに大きな病院はあるのか」
サマンサはスマホで探しはじめた。
１つある。
「そこに連れて行ってくれ」
「どうしてだ」
「外れてるかもしれないが他にやることがない」
「あなたたちは他を探してくれ」
「サマンサとビルの電話を教えてください」
レフォルマ通りの博物館の近くに病院はあった。大きい病院である。湯花邪無は、車を降りた。
「どうするのだ」
「わからない」
「こんな時間に病院には入れない」
湯花邪無は、そのまま救急外来の入り口に向かった。今日は何もないらしく、明かりはついているのだが、物音１つしなかった。
しかし、チャンスはここしかない。
物陰でじっと待った。
２時間待った。３時10分だった。
急に慌しくなって救急外来のドアが開いた。６人くらいの医師か看護師が忙しそうに動きはじめた。
救急車が２台同時にやってきた。

いきなり救急外来はごった返した。
先に到着してストレッチャーで救急外来の入り口に向かったドアを開けた。
ヘルメットに救急外来の上着があった。
素早く着てストレッチャーに続いた。
２台目の救急車のストレッチャーも走っていて、ゴチャゴチャだった。
湯花邪無は、とりあえず、トイレに向かった。メキシコシティーは標高が高い分寒い。
入り口にあった病院内の地図をトイレで調べた。
もし華美美鈴がいるとしたら１人部屋である。眠っているというか眠らされている。
７階の個室階を探してみることにした。
誰かトイレに入ってきた。
慌てずに、静かに外に出てトイレの横のエレベーターに乗った。
誰にも怪しまれていない。
出て正面にナースセンターがあった。エレベーターから降りる湯花邪無を、看護師が見ている。
「今来た救急車です」
「なにか」
「土曜日にそこのホテルで倒れて意識がなくなった女性をお連れしたのですが」
「まだ意識を回復しておりませんがなにか」
「落としたものがありましたので」
「なんでしょうか」
「届けてもいいですか？」
「わたしがお届けします」
「どこですか？」
「７０６です」
「それではよろしくお願いします」
「メモだと思います」
「大事そうに持っていらっしゃったので」
「あいしている」だった。

華美美鈴が、ジャカルタ自動車に来たときに、連れの誰かが、スパイス湯花のスパイスを買って、置いていったものだ。
日本語のひらがなだから誰にもわからない。
「承知しました」
看護師は、湯花邪無がエレベーターに乗るまで見ていた。
１階に降りてその足で階段を登った。
監視カメラがあるだろう。ヘルメットを目深にしておかないといけない。
７階の階段のすぐそばのリネン室に入った。
湯花邪無は、壁にかけてあった男性用の作業着を着て帽子をかぶった。
時計を見た。
３時50分である。
壁のスケジュール表を見た。
１回目が５時50分である。
２時間も早くやったのでは怪しまれる。
20分くらい早くないと、本人がやってくる。
リネン室の奥の棚の後に隠れた。
電気をつけても、少し暗くて見えない。
ながい２時間だった。
５時25分になった。リネンキャスターを押し出した。看護師にすれ違った。
振り返りもしない。素早く仕事をするフリがいいだろう。
ナースセンターに向かって行く。看護師がじっと見ている。
騒がれたらおしまいである。
左に曲がった。７０１号室がある。ノックした。
「誰だ」
「タオルのお取替えです」
「どうぞ」
湯花邪無は、帽子を目深にかぶっている。
「タオルだけか」
「シーツは後でお持ちします」
「わかった」
７０１を出たところでナースセンターを見た。

誰もいない。
そのまま７０６まで急いだ。
ノックしたが返事がない。
「失礼します」
入れない。カギである。
湯花邪無はナースセンターに行った。
誰もいない。
５時35分になった。
左奥に吊るしてあった。部屋のカギすべてだ。
７０６室のカギを持った。
急いでリネンキャスターまで戻った。
そして７０６室のカギを開けた。
ベッドで誰かが眠っている。
華美美鈴だった。
華美美鈴を抱き上げてリネンキャスターに入れた。上からタオルを何枚もかぶせた。
「失礼しました」
カギを締めてナースセンターまできた。
カギを元の場所に吊り下げた。
まだ誰もいない。
慌ててはいけない。
そのままエレベーターに乗った。５時40分だ。もう本物のリネンの担当者がやってくる。10分後には、７０６の患者がいないことに気がつく。
１階に着いた。
「車をすぐに回してくれ」
「病院の出入り口だ」
玄関の扉の近くでリネンキャスターの車輪が故障したかのような雰囲気で車を待った。
「どうしたのだ」
「すぐに直るから大丈夫だ」
すごくながい時間のように思えた。

５時48分だ。
もう本物のリネンの担当者がリネンキャスターを押し出している。多分、７０１から行く。
５時50分になった。静かに、サマンサとジムの車が玄関に横付けされた。警備員２人の車が後にいる。
サマンサとジムが降りてきて、リネンキャスターを静かに押し出した。
「修理してください」
「承知しました」
サマンサとジムは、リネンキャスターを車に積んで静かに走り去った。
警備員２人の車が横付けされた。
「救急出口にお願いします」
湯花邪無は、２人の警備員に告げた。そして、急いで７階のリネン室に向かった。多分リネンの担当者は、７０４くらいだろう。急いで救急ヘルメットと救急要員の上着を着てリネン室を出た。階段だが、監視カメラに撮られている可能性がある。そして、脱兎のごとく階段を駆け下りた。華美美鈴がいないことに気がついたら、入り口を閉められる。
救急の出入り口は、依然として混みあっていた。
少し離れたところに待っていた２人の警備員の車に乗り込んだ。
何も異変はない。
湯花邪無は、どこに向かっているのかわからなかった。
すぐにホテルに入って行った。
５時55分である。
「このホテルは会議をやってるホテルではないのですか？」
「そうだ」
「大丈夫ですか？」
「時間が早いからまだ誰もいない」
地下の駐車場からエレベーターに乗った。８階で降りるまで誰にも会わなかった。
８０４の部屋をノックした。
中からビルが出てきた。
「この部屋は華美美鈴が宿泊している部屋ですか？」

「会議室からここに帰るまでにいなくなった」
「どういう状態ですか？」
「眠らされていると思う」
「ホントに病気だったら怖い」
「ホントに病気だったら私に何も知らされないことはおかしい」
「会議の事務局からは何もないのですか？」
「多分、華美美鈴がいなくなったことすら知らないと思う」
さっきから、サマンサが電話している。スペイン語なので何を話しているのかわからない。
６時20分になって、ビルから電話があった。
「医者と名乗る男が来ている」
サマンサが外に出た。
華美美鈴は寝顔のように思えた。もうかなりながい時間眠っていることになる。
医者のような男とサマンサが部屋に入ってきた。
湯花邪無とサマンサはベッドルームから出た。
「安心できる男なのか」
「先里風香から紹介してもらった」
サマンサが招き入れられた。
６時40分になって、サマンサが出てきた。
「眠っているだけらしい」
「かなり強力らしい」
「気づくんですか？」
「クスリを特定している」
「注射なのか」
「そうらしい」
「麻酔薬なのか」
「そうだ」
「麻酔薬が特定できれば大丈夫だ」
「医者の看護師が来た」
ビルから電話があった。

医者が部屋から出て行った。サマンサも続いた。
医者と看護師がベッドルームに入って行った。
これからどうするかの話もできない。
７時になって医者と看護師が出てきた。
「意識が戻った」
「元に戻っているがなぜここにいるのか理解できないでいる」
「わたしが話す」
「もう１時間くらいここにいてくれないか」
サマンサは、医者と看護師に頼んだ。
華美美鈴は気がついているのだろう。
７時20分になった。
「ミスターユハナ部屋から出ていてくれないか」
「なんだ」
「華美美鈴がシャワーをする」
ベッドルームから直接シャワールームに行けない。
「これを着ていてくれ」
リネン室の制服と帽子だった。
湯花邪無は、部屋を出てビルのいるエレベーターのところへ行った。
「ミスターユハナありがとう」
「あなたの勇気には驚いてしまう」
「気がついたようだ」
「シャワーをするらしい」
「朝食は食べられるのか」
「わからない」
「病院ではどうなっているのだろう」
「意識を失って担ぎ込まれたのだろうからいなくなると病院の責任になる」
「誰が担ぎ込んだのかだ」
「いなくなったからといって出て行けないだろう」
「病院が困っているかもしれない」
湯花邪無は、日本時間を調べた。シャワーが終わってキレイにするだろうから８時になる。23時である。北千住のマンションでは、まだ眠っている時間

ではない。もうすぐ８月26日になる。火曜日は羽田からジャカルタに行かないといけない。
８時になってサマンサと医者と看護師が出てきた。
「もう元気だから心配ない」
「脱水を起こしているから点滴をしている」
「点滴を外しに９時に看護師が来ます」
「話せるのか」
「何も心配はない」
みんなで医者と看護師にお礼を言った。
「請求書はここに送って欲しい」
サマンサは自分の名刺を渡した。
「ミスターユハナにお礼を言いたいそうだ」
「10分にしてほしい」
「華美美鈴は10時からの会議に出席すると言っているので打ち合わせをしたい」
「警備のことも打ち合わせをしたい」
「承知した」
「わたしはジャカルタに帰る」
「８時15分になったら出てきてくれ」
湯花邪無は、部屋に入ってベッドルームに向かった。
ノックをした。
「どうぞ」
華美美鈴は、点滴をしていた。
「湯花邪無が来なかったらわたしは危なかった」
「どうしてメキシコシティーまで来たのだ」
「そんなことはわからない」
「もしよかったらキスをしてほしい」
「時間がない」
「助けてもらってキスをしてくれと言うのはおかしいけど」
湯花邪無は、ベッドに近づいて、華美美鈴の唇を合わせた。
目を閉じている華美美鈴の目からなみだが流れてきた。

湯花邪無は、手で華美美鈴のなみだを拭いた。
「誰にも見られてないのですか？」
「多分誰も知らない」
「あなたが狙われるとわたしはもう何もできない」
「大丈夫」
「誰も知らない」
「ここから出られるのですか？」
「この服装で出る」
「新宿やジャカルタはどうですか？」
「何も知らない」
「今からジャカルタに帰る」
「フツウの勤務だ」
「昨日の新宿をキャンセルしただけだ」
「フツウにしていないと気づかれる」
「やつれている姿を見られたくなかった」
「キレイだ」
「心配はない」
「いつももう会えないと思ってしまう」
「私もだ」
華美美鈴の目からなみだが溢れ出した。
「タオルを取ってください」
「わたしは弱くなったわけではない」
「あなたのことだけが弱い」
「わたしのことでムリをしないで」
「わかっている」
「サマンサと８時15分に出ると約束した」
「もう行く」
「時間が止まってくれればいいのに」
「キスして」
湯花邪無は、このままそっとキスをして離れた。
「あなたが狙われるとわたしは何もできなくなるから」

「わかっている」
部屋を出ると、サマンサとビルが待っていた。
「地下の駐車場で車が待っているから」
「わかった」
「急いでくれ」
「ホテルは人が多くなるから」
「サマンサ元気で」
「ありがとう」
湯花邪無は、帽子を目深にしてエレベーターに向かった。
警備員の１人が運転してくれた。
湯花邪無はメキシコシティーからジャカルタを調べた。９時30分に乗れる。
飛行時間は３時間だ。12時30分にはジャカルタに着ける。メキシコシティー時間だ。ジャカルタ時間２時30分だ。26日火曜だ。ジャカルタの空港ホテルでシャワーを浴びて３時間くらい眠ろうと思った。

「あいしている」はどこに行ったのか

「おはよう」
「おはようございます」
「みんなの声が揃うのはなにかを決めているからに違いないがわからない」
お客さんがいてもかまわず声を揃える。
「昨日はどうしたのだ」
「新宿に行かなかったのか」
「私用で急用ができた」
「今日はフツウなのか」
「タベットのマンションだ」
「わかった」
「水野さんにメールしておく」
「なんだ」
「心配していたから」

「わかった」
昨日新宿をキャンセルしたことを水野まさみは心配しているのだろう。ジンに連絡してきたのだ。
「わたしお店にいるから何かあったら電話ください」
「わかった」
湯花邪無は、メキシコのライブテレビを見ようと思った。
「ミスタージャム、コーヒーでいいか」
「ありがとう」
リニがやってきた。
「最近はｙｕｈａｎａの森のコーヒーが安定して採れるようになった」
「このコーヒーはｙｕｈａｎａの森で採れたコーヒーなのか」
「販売もできるほど高品質だ」
「ジンはなんと言っているのだ」
「スパイスだけでも数が足りない」
「そうだな」
「新宿のお店に送ってもいいか」
「喜ぶと思う」
「わかった」
湯花邪無は、メキシコのライブテレビを見た。
新幹線のアースバッテリーでの着工が決まったとニュースが流れていた。
もう既成事実のように、電線のないアースバッテリーがグッドだと論評されていた。各車両にアースバッテリーが必要らしい。車でさえ80キロしか出ないのだ。よくわからない。浮上させるのかもしれない。リニヤーになっているのかもしれない。
別のライブテレビを見た。メキシコシティーだ。
夕方、華美美鈴がメキシコシティーを離れる姿を映していた。なんともないかのように、にこやかに笑っていた。
湯花邪無は、急に心配になった。
「あいしている」をメキシコシティーの病院の看護師に預けたことだ。
華美美鈴をリネンキャスターに乗せたのだが、「あいしている」を忘れてしまった。

もしかしたら、看護師が７０６に届けていないかもしれない。「あいしている」を持ってきた救急車のオトコが疑われたら、「あいしている」が証拠になってしまう。
心配しても仕方がないが気になってしまう。
すべてうまくいったのだが、「あいしている」だけは心に残った。日本語のひらがなである。わからないから棄ててくれていたらありがたい。

新幹線の実験

メキシコのライブテレビを見ている。
新幹線アースバッテリー反対の人たちの批判が多くて、新幹線車両をアースバッテリーで動かす実験が、メキシコシティーで行われるとニュースが言っている。８月27日だ。会議の時に決まっていたことなのだろう。華美美鈴はどうするのだろうか。
そもそも、車だって80キロしか出ないアースバッテリーだ。重い新幹線車両など動かせるのだろうか。それも時速３００キロである。
わざわざ車が80キロしか出せない仕組みにしてあるのではないかと思っているのを、パンドラの箱を開けるように新幹線を動かせたら、戦車だって動かせるのではないかと心配してしまう。
先里風香と華美美鈴がやっていることだから、湯花邪無が心配しているようなことではないと信じている。
湯花邪無は８月27日は料理学校があって新宿である。フツウどおり新宿に18時までいるとして、メキシコシティーの時刻表を調べた。
21時30時羽田発には乗れる。０時にはメキシコシティーに着ける。メキシコシティーは８月27日の朝の９時だ。国際空港からタクシーでも30分くらいで始発駅のビエナビスに着ける。実験が行われるクアウティトラン駅まで30分だ。グアダダハラ駅が新幹線の主要駅らしいのだが、メキシコシティの近くのクアウティトラン駅で実験をするのだろう。
10時には着けるのだが、適度に変装をしないといけないと思った。華美美鈴もやってくるのかどうかわからない。湯花邪無が興味があるのは、アース

バッテリーで新幹線が動くのかということである。
帰りは、12時に出たとして、国際空港が13時である。８月28日はジャカルタだから直接ジャカルタに飛ぶ。ジャカルタ16時である。ジャカルタ時間で朝の３時だ。また空港ホテルでシャワーをして仮眠をしようと思った。
「眠そうだからコーヒーを煎れるように言われた」
リニがコーヒーを持ってきた。
「ありがとう」
「そんなに眠そうな顔をしているのか」
「疲れた顔だ」
「お客さんはどうですか？」
「お客さんはいっぱいだ」
「来週牧野由香さんたちとカラオケに行くのか」
「なんで知っているのだ」
「渋谷に遊びに行って会った」
「２人で遊んだ時に聞いた」
「わたしも聴きたい」
「ミスタージャムのイエスタデイを聴きたい」
「ジンも聴いたことがないと言っていた」
「ジンに誘ってもいいか聞いたらＯＫだって言った」
「20代の社員連れて行くから誘ってもいいか」
「５人だ」
「わかった」
「歌は下手だしガッカリする」
「ラナンは味があってよかったってみんなに言ってる」
「気が重い」
「メールするから」
「わかった」
「お昼はここで食べるのか」
「お願いする」
「牛のココナツの煮込みだ」
「ごはんはチャーハン」

「わかった」
「ジンはいないからわたしと一緒に食べてくれ」
「どこかに行くのか」
「シンガポールのお客さんが来て食事だ」
「夜もか」
「ジンは夜は接待しない」
「わかった」
「わたしでいいのか」
「うれしい」
湯花邪無は、スパイスの営業の仕事は何もやっていない。シンガポールのお客さんがだれなのかもわからない。ジンは、誰と食事するのかも言わない。言いたくないのではなくて、自分の仕事だと思っているのだ。事実上のジャカルタのｙｕｈａｎａの社長はジンだと思う。
それを誰もが承知していて、湯花邪無も承知している。
「ごはんに行くけど」
12時過ぎてリニがやってきた。
ジャカルタ式のごはんだ。
チャーハンのそばにいろいろなおかずを自分で選んで乗せる。牛のココナツの煮込みは別によそってある。
「ごちそうだ」
「今日のお昼の担当は料理自慢だから」
「その日で違うのか」
「わたしも料理自慢だ」
「わたしの担当の日は数が多い」
「外で食べる社員もいるのか」
「ここで食べるとタダなのに外で食べる社員もいる」
「毎日か」
「そうではなくて料理担当を貼り出しているから」
「リニのごはんはおいしいから誰も外には行かないのか」
「そうだ」
「いただきます」

「いただきます」
ジンやリニと話していても、華美美鈴の話が出ないから、何も知らないのだと思う。
華美美鈴のことで湯花邪無がやっているのは、危険なことだ。新宿のスパイス湯花やジャカルタのスパイスｙｕｈａｎａのみんなに影響が及ばないようにしないといけない。
現在のところ、警察の真野裕也と有村聡と、真野裕也と有村聡に華美美鈴と湯花邪無の情報を流して北千住のマンションから消えた沢風ゆりだけが、華美美鈴と湯花邪無のことを知っている。それに、華美美鈴を守っている、サマンサとビルと２人の警備員は、もちろん知っている。
最も注意しないといけないは沢風ゆりだが、行方がわからない。
「明日モロッコに行きます」
ｙｕｈａｎａの森のステファノから電話があった。
「事前に調べたんだけど」
「ハーブだけどコリアンダーは栽培できると思う」
「スパイスはクミンとパプリカとターメリックとシナモン」
「コショウなどはジャカルタから送りたい」
「アイチャはどういう意見なんだ」
「一緒に考えた」
「29日には報告できると思う」
「ステファノに任せるからお願いしたい」
「理解した」
やはりモロッコ料理というものが中心である。モロッコ料理は、辛い料理が少ないが肉食が多いので、スパイスが欠かせない。クミンが中心だろう。
「ルンダンだけどちょっと辛いから」
「気をつけて食べるんですか？」
「フツウに食べればいい」
ジンが手でインドネシア料理を食べているのを見たことがない。スパイスｙｕｈａｎａでも見たことがない。
「どうだ」
「おいしい」

「明日はフツウなのか」
「料理学校でお昼から新宿だ」
「わかった」
「ステファノとアイチャがモロッコに行くけど」
「モロッコにスパイス出したらまたスパイス工房がタイヘンになりそう」
「できるだけモロッコで栽培したいけど」
「できるものとできないものがあるから」
「わたしもモロッコに行ってみる」
「そうしてください」
湯花邪無とジンの相談は、晩ごはんでもベッドでもできる。
８月27日はジャカルタは快晴だった。
「先に出てて」
「わかった」
湯花邪無とジンのことは誰も知らない。４年にもなる。
ジンのチカラをみんな知っている。湯花邪無がムリをしてジンを、事実上の社長にしているわけではない。特に営業上では、ジンの右に出る人などいないと思ってしまう。
湯花邪無は、華美美鈴にこころの一部を奪われてはいるのだが、ジンへのこころを削っているわけではない。ジンはジンである。
「おはよう」
「おはようございます」
まだスパイスｙｕｈａｎａはオープンしていない。掃除をしているのだが、どういうわけだか声が揃ってしまう。
「ミスタージャム今日は料理学校か」
「そうだ」
「もう自分で料理ができるようになったのか」
「コーヒーがいいけど」
「わかった」
ジンの秘書のリニは、なにかと湯花邪無の世話をする。
「ｙｕｈａｎａの森のコーヒーだ」
「これが１番おいしい」

「商品にしたらパンクする」
「わかってる」
「お店に出てるから用事があったら電話してくれ」
「わかった」
「ジンはもすぐ来ると思うから」
「わかった」
「なにかありますか？」
「順調だ」
湯花邪無は、メキシコのライブテレビを見てみた。
アースバッテリーの新幹線の実験のことはやっていない。ネットで検索してみる。
予定通り実験が行われるらしい。多くの報道関係者が集まるらしい。メキシコだけではなくて、アメリカやインドなどからも集まるらしい。
軍関係者も来るのだろう。
アース戦車は失敗したばかりである。戦車よりも重いと思われる新幹線が、なぜアースバッテリーで動くのか、興味津々だろう。
「ミスターユハナおはようございます」
ミナは、生徒の８人にあいさつしているのではなくて湯花邪無にあいさつする。
みんなはよく知っている。なんともない。
「ミスターユハナは仕事が決まったのか」
「探している」
「アルバイトでよかったら紹介する」
「お皿を洗ったりすることだったらいくらでもある」
「料理人はどうだ」
「まだ修行が足りない」
「それよりもおいしいレストランに出かけないと料理が身につかない」
「お店を決めているから出かける日を教えてくれ」
「今は少し忙しい」
「失業してても忙しいのか」
「また連絡させてくれ」

料理学校の７人の生徒は、湯花邪無とミナの話を笑って聞いている。
「今日はナシアボンです」
「レシピを配ります」
「買い物をしてきてください」
生徒８人は近所のスーパーマーケットに出かける。
「わたしが買い物する」
１番若い女性のラエルが手を挙げた。
「ピーマン探しておいてくれ」
「わたし牛肉を買ってくる」
「時間があるから一緒に行く」
「どうしてひき肉を買わないのか」
「料理学校でひき肉にする」
「安上がりになる」
「お米も買わないといけない」
８人でワイワイやっていてけっこう楽しい。
「ミスターユハナ、計算してみんなからお金を集めてくれないか」
「ラエルは何をするんだ」
「ひき肉にしてくる」
「みんなで一緒にやるから待ってくれ」
湯花邪無は、スマホで８等分の計算をしてみんなからお金を集めた。
「ミスターユハナの料理を食べさせてください」
「小さな器に移して持ってきてください」
「わたしの料理をみんな食べてください」
どういうわけだか、ミナのナシアボンがおいしい。
スパイスも絶妙である。
「ミスターユハナ、少しおいしくなりました」
「ガンバってください」
ミナは、湯花邪無の料理しか食べないしコメントもしない。
みんなよくわかっている。
「ただいま〜」
「おかえりなさい〜」

「リニ、なにかありませんか？」
「上でジンが待っている」
「何かあったのか」
「料理を食べたいのだと思う」
「料理学校で食べてきた」
「それは残念」
「すぐに新宿に行くのか」
「そうだ」
ジンは書類にサインをしていた。
「今日の料理はなんだ」
「ナシアポンだ」
「食べさせてくれ」
「料理学校でみんなで食べた」
「それは残念」
リニはよく観ている。
ジンが何を待っているのか知っている。
「何かありますか？」
「順調だ」
「このまま新宿に行きます」
「気をつけて」
「わかった」
いつもの時間である。少し余裕がある。料理学校が慣れてきているのだと思う。湯花邪無自身が料理に慣れてきている。時間に余裕ができはじめた。
「こんにちわ〜」
「こんにちわ〜」
誰も湯花邪無の顔を見ない。
お客さんの応対をしていて忙しい。
「わたしはこれからソウルに行きます」
「ソウルはジャカルタからやるんじゃないのか」
「ジンが忙しい」
「相談だけはわたしがやる」

「裏はわたしがやる」
「表になったらジンがやるから」
「わかった」
「それより〜ソウルやったらコショウが足りなくなる」
「今日はスパイス教室はないのか」
「臨時のお休みだ」
「そうか」
「何かあったら牧野由香に言ってください」
「わかった」
水野まさみは湯花邪無を待っていたのだ。ソウルといっても40分で着いてしまう。湯花邪無に話しておかないといけない。韓国と日本はずっとうまくいかない。政治的にうまくいかない。民間ではお互いにファンである。
「コーヒーです」
「ありがとう」
「９月５日は大丈夫ですか？」
「空けてあります」
「わたしお店にいます」
「わかった」
牧野由香も忙しそうである。
湯花邪無は、９月１日の大学のスパイスの講義の原稿を仕上げた。スパイス湯花もスパイスｙｕｈａｎａも、社員がパブリックホルダにしてくれと言っている。口語にしてわかりやすくした。日本語と英語の両方で仕上げた。
論文ではない。
１回目はペッパーである。
９月１日の講義が終わったら、すぐにスパイス湯花とスパイスｙｕｈａｎａのパブリックホルダに掲載する。
17時になって、水野まさみがソウルから帰ってきた。
「いつでもできるんだけど品切れになって苦労しそう」
「誰か会ってるのか」
「レイハン」
「料理学校の若い先生」

「韓国料理を教わっている」
「ジニはインドネシア料理を教えているしわたしは日本料理を教えている」
「ジニも行ったのか」
「そうだ」
「いつかソウルには出ることになるから」
「そうですね」
「わたし帰るけど」
「どうぞ」
「何かあったらジニがいるから」
「わかった」
湯花邪無は19時になって新宿を出た。
羽田でおすしを食べた。そしてゆっくりコーヒーを飲んだ。
21時30分のメキシコシティー行きに乗った。
メキシコシティーは０時である。メキシコシティー時間で８月27日の９時だ。
快晴だった。
メキシコシティは人が多い。
湯花邪無がタクシーに乗っても目立ったりしない。そもそもが、湯花邪無は２メートルでイケメンである。大きい方ではないが、しっかり肩を張っていればメキシコのオトコのモデルに見える。
ビエマビスから電車に乗った。
快適な電車である。これが新幹線になるのだそうだ。しかもアースバッテリーである。
クアウティィラトンに着く前に、帽子をかぶった、口ひげを蓄えて、サングラスをした。そのまま次の車両の出口で待った。
もう湯花邪無には見えない。
上着は羽田のアースカーに置いてきた。ノーネクタイだ。
カメラを持っている。ちょっとしたフリーライターに見える。
問題なのは、実験場に入れるかどうかである。
あまりにも見学者が多いと、制限するのではないかと思った。
駅を降りて、多くの人が実験場に向かっている。

もともとこの鉄道の軌道は広いので、車両だけを開発するようだ。
今日は、多分、現在の古い車両を改造したに違いないと思った。
湯花邪無は、報道関係車の駐車場に向かった。
もう実験がはじまるので中継のための記者やテレビカメラマンが走り回っている。
メキシコライブテレビの大きな車の後のドアを開けた。
「社章を忘れた」
これだけは、スペイン語で覚えた。
中では中継の調整に忙しくて振り返らない。
入り口の右に腕章があった。
そのまま腕章を借りてドアを閉めた。
実験の開始が10時である。
もうはじまっている。
湯花邪無は、腕章をして実験場に入った。金属探知をされた。カメラは感知しない。ベルトもしていなかった。コインも持っていない。
専門家と報道関係者への、ごく限られた実験の公開だった。３００人くらいしかいない。
それでも３００人である。
アースバッテリー新幹線車両の説明をしている。
華美美鈴が説明をしている。
英語である。
１車両に５台のアースバッテリーを装着していると言っている。５台のアースバッテリーが、時間をおいて起動することで、重い車両を動かすのだそうだ。長い車両だからこれができる。
一旦５台のアースバッテリーが動きはじめると、時速３００キロに達する。
10両編成であると、50台のアースバッテリーを使うことになる。
アースバッテリーは、自動車のエンジンくらいのコストだから、そう高いわけではない。
ただ、１車両５台のアースバッテリーをコントロールするシステムが大事である。発車時と停止時のコントロールである。
すでに、モデルの段階ではコントロールシステムの確認はできているらし

い。
華美美鈴は、そう言っている。
日本や中国やフランスやアメリカなどの新幹線を持ってくれば、何も不安はない。
アースバッテリーでの新幹線ははじめてである。
反対派が強行に実験を要求するのは、当然のように思える。
この短い時間に、このアースバッテリー５台とコントロールシステムの改造をやったのだろうか。
「質問がたくさんあると思いますが、実験者で３００キロを走った後で質問を受けたいと思います」
「90人しか乗れないので、事前にお伝えしてる方だけ実験者にお乗りください」
「実験ですので、自己責任でお願いします」
「誓約書もいただいています」
「それでは、また後でここに帰ってまいります」
いくらなんでも、湯花邪無は、この実験車両には乗れない。
実験車両を見てみようと思った。
ごくフツウの現在走っている車両である。
ただの車両１両だからどっちが前かわからない。
確かに、車輪が５つである。これがそれぞれのアースバッテリーで制御されているのだろう。車輪だけが新しい。ブレーキのこともあるのだろう。全く新しい車輪なのだろう。
「来てくれるとは思わなかった」
日本語の前に華美美鈴の匂いを感じた。
華美美鈴は独り言を言ったようにテレビには映っただろう。ライブ中継している。スマホで湯花邪無も見ている。
湯花邪無は大画面で中継されている実験の様子を見ていた。ヘリコプターからの中継もしていた。この路線の１時間は、新幹線アースバッテリーの実験のために臨時停車している。
車内はごくフツウの車両である。４人乗りボックスが左右にあるタイプだ。広い軌道だからできる。

動きはじめた。ゆっくりである。80キロを越えるのだろうか。そのまま10秒くらいで80キロに達して、20秒で１５０キロに達した。
「このまましばらく１５０キロで走ります」
華美美鈴のアナウンスがあった。
空か見ると、電車の１車両が走っていて、見かけない風景である。
「２００キロに上げます」
空から見ていると、２００キロでも何も変わらない。
車内では、ワインが配られていた。揺れがあるようには思えない。この車両は現在走っている一般車両である。
「３００キロに達したら乾杯しますからお待ちください」
不安そうな90人の顔を見ながら、華美美鈴が言った。
空から見ていても、３００キロとは思えない。
「車輪の走行テストは何度も行っているのでご安心ください」
「それではみなさん乾杯です」
「サルーン」
ここだけスペイン語だった。
30分もして、実験車両が軌道を外れて、実験場に帰ってきた。
再び大型スクリーンの前に華美美鈴が現れた。
「中継されていたと思いますが、どのように感じたでしょうか」
「さきほど、実験車の中でインタビューさせていただいているので、どうぞご覧ください」
「現在２００キロですが、いかがですか？」
「快適です」
「発車はスムースでしたか？」
「快適でした」
「３００キロでワインを飲んでいらっしゃいましたが」
「快適です」
「不安でしたか？」
「誓約書を書いたので不安でした」
「今はどうですか？」
「不安はありません」

こんなインタビューが５名続いた。
「それでは質問をお受けします」
そこから延々と記者の質問が続いた。
80キロしか出ないアースバッテリーをどのように繋いで３００キロ出せるようにしているのかが、最大の疑問点である。
「実験がはじまる前に説明しましたが、もう１度実験がはじまる前の説明をします」
もうだれも、アースバッテリー新幹線を疑う人はいなかった。みんなが知りたいことは、３００キロのメカニズムである。華美美鈴は、丁寧に３００キロのメカニズムの説明をしている。
湯花邪無は、自分の疑問も解けたし、華美美鈴への応援もできたと思った。
12時にここを出る予定だった。
12時30分である。
まだ誰も実験場を去る人はいない。腕章を返さないといけない。報道車の駐車場に向かった。まだ誰もいない。
腕章をそっと借りた車の下に落として車を離れた。
まだ電車は動いていない。
「華美美鈴に送るように言われている」
常に華美美鈴と行動を共にしている警備員の１人である。
「私より華美美鈴の近くにいてやってほしい」
「タクシー乗り場はどこなのか」
「タクシー会社まで連れて行く」
「どこだ」
「すぐそこだ２分だ」
「私は危なくないが華美美鈴は危ない」
「わかったから２分で着くから」
湯花邪無は、１時間タクシーに乗っていた。何も起きない。ライブテレビを見ていた。ずっと見ていた。まだ華美美鈴が質問を受けていた。
危険が迫っている雰囲気はない。カサブランカでピストルで狙われたような雰囲気ではない。
14時のジャカルタ行きに乗った。ジャカルタ17時である。ジャカルタ時間

で朝の４時だ。
ジャカルタは８月28日である。
結局、北千住で眠っている時間に、メキシコシティーで華美美鈴を見た来たことになる。
ずっとライブテレビを見ていた。
何かあったらメキシコシティーに返るつもりである。
何もない。
湯花邪無がメキシコシティーに来たことは、華美美鈴達は知っている。今日は時間がないのだ。湯花邪無のフツウの時間通りにしないと、湯花邪無が危うくなる。
湯花邪無は、ジャカルタの空港ホテルに部屋をとってシャワーを浴びた。そして３時間眠ることにした。
「おはよう」
「おはようございます」
何事もなく、湯花邪無は、スパイスｙｕｈａｎａに入った。

月のアースバッテリー

月へ向かう準備

ジンは、コーヒーを持ってきていた。
「今日はなにかありますか？」
「わたしがバンコクに行ってくる」
「なにかあったのですか？」
「わたしたちは粉末スパイスしかやっていないがタイでは生スパイスとかハーブをたくさん使う」
「インドネシアでも同じだけど」
「生を販売できるか検討してみたい」
「新鮮ではなくなるから販売は難しいのはわかるけど」
「ジンが考えてみたいんだったらどうぞ」
「市場に行ってくる」
「バンコクですか？」
「クロントイ市場に行く」
「一緒に行きます」
「ほんと？」
「ええ」
「うれしい」
ジンがオンナの顔になった。
「もしもし」
「リニ？」
「今日のわたしのバンコクだけど」
「ミスタージャムと一緒に行くから」
バンコクに行くと言っても、30分しかかからない。空港までアースカーに乗っている時間の方がかかる。
湯花邪無は、はじめてバンコクの宅配業者の倉庫に行った。
「この一角はｙｕｈａｎａさん専用のスペースになっています」

「日持ちのするものばかりですので安心しています」
「たとえば生のスパイスやハーブを扱うとどうなりますか？」
「野菜も取り扱っていますので同じです」
「ほうれん草などもですか？」
「やっています」
「在庫はどうしているのですか？」
「取り決めです」
「取り決めってなんですか？」
「３日在庫して出荷がなかったら廃棄する」
「なるほど」
「ほうれん草などどうしているのですか？」
「こっちに来てください」
湯花邪無とジンは、野菜の倉庫へ向かった。
「ほうれん草は特殊な包装紙で包装してあります」
「この包装紙は呼吸をしています」
「穴があいているのですか？」
「あいていませんが空気を通します」
「この倉庫は15度になっています」
「冷蔵で運んでいるわけではありませんがかなり温度は低いまま運べます」
「この包装紙がポイントなんだ」
「セロファンです」
「ジャカルタでも同じですか？」
「ジャカルタでもほうれん草を宅配しています」
「同じ方法です」
湯花邪無とジンは、クロントイ市場に向かった。
「これはすごいな〜」
「ネット販売が多くなってるんだけどやはり市場に来ると楽しいんだろうね」
「ジンも楽しいのか」
「うれしい」
「今日は特にうれしい」

「ジャカルタで先に検討しないといけないかもしれない」
「葉だけをやってもいいかもしれない」
「インドネシアだとパンダンリーフとかバジル」
「タイだったらパクチーとかバジル」
「タイではパクチーだけどコリアンダーだから」
「料理には欠かせないハーブだけど」
「こんなにたくさん売ってる」
「やるにしてもテスト販売ですね」
「生だからすぐダメになる」
「ええ」
「パクチーとバジルだったらｙｕｈａｎａの森で栽培できるから」
「そうですね」
「商品にするんだったら大量に必要になる」
「わたし明日ｙｕｈａｎａの森に行ってくるから」
「ステファノがラバトに行ってるけど」
「誰かに聞いてみる」
「明日ジンとクワン食品に行くんじゃないのか」
「お昼からだから」
「お昼タイの料理食べよう？」
「わかった」
「夜はわたしが料理するから」
「コースで豪華なお昼でいい？」
「いろいろ食べてみたいから」
「わかった」
15時になって、湯花邪無とジンはスパイスｙｕｈａｎａに帰って来た。
「おつかれさま」
リニがお茶を持ってきた。紅茶だろう。
「２人で出かけるなんて珍しい」
「お昼はタイ料理ごちそうになった」
「いいですね〜タイ料理おいしい」
「なにかかわったことはありませんか？」

「順調です」
「わかりました」
「ミスタージャムは明日料理学校と新宿ですか？」
「そうだ」
「ジンはクワン食品ですか？」
「朝ｙｕｈａｎａの森に行くから10時ごろこっちに来ます」
「わかりました」
「下にいますから何かあったら電話をお願いします」
「わかった」
湯花邪無は、メキシコのライブテレビを見た。
アースバッテリー新幹線のニュースは何もやっていない。華美美鈴に何も起こってはいない。
「イカのバジル炒めだけど」
「白いごはんだからおかずを選んで」
「早速バジルが出てきたんだ」
「そう」
「イタリアンのバジルと同じですか？」
「バジルってたくさんの種類あるからバジルだけでもやっていけるかも」
「そうですね〜」
「あなたはスパイス博士だけどなんでハーブがわかんないの？」
「たいした学者でもない」
「いただきましょう」
「いただきます」
「ああ〜こういう味になるのか」
「この方がいいよね〜匂いあるから」
「そうですね」
「ショウガでもいいんだけどね」
「こういう風に使うんだ」
「そう」
ジンは、積極的に湯花邪無に挑んでくる。もしかしたら、ジンには、他にも親しい人がいるかもしれない。聞きたくもない。いてもかまわない。もしこ

のままならば、ジンと結婚することになると思っている。
「おはよう」
「おはようございます」
８月29日だ。
ジンは今朝はｙｕｈａｎａの森に出かけている。バジルとコリアンダーを聞いている。
「ミスタージャムおはようございます」
ラナンがコーヒーを煎れてきた。
「すぐに料理学校ですか？」
「ラナンは自分で料理やるのですか？」
「やります」
「バジルは使いますか？」
「コリアンダーを使う」
「ピザやったりナポリタンやったりしたらバジル」
「インドネシア料理でバジルは使わないのか」
「使うけど少ない」
「ハーブもやるのか」
「どこで買っているんだ」
「近所のスーパーマーケットだけど売ってないことがある」
「なぜだ」
「わからない」
湯花邪無は気になったが料理学校へ急いだ。
アースカーでメキシコシティーのアースバッテリー新幹線を検索してみた。ライブテレビではやっていないが、ネット上では、大量の情報がある。賛否両論で見ている時間はない。
華美美鈴を検索してみた。
華美美鈴が月へ行く準備をしている。
８月21日以来、月への連絡船は動いていない。

ｙｕｈａｎａの森モロッコ

「ミスターユハナ就職活動はどうか」
「今は主夫の修行中だ」
「働き盛りに働かないのは良くない」
「料理が上手くなったらすぐに探す」
ミナは８人の生徒に話すのではなくて、湯花邪無にあいさつする。
みんなはよくわかっていて、笑って聞いている。
「今日はビーフジャワカレーをやります」
「レシピを配ります」
「買い物をお願いします」
８人は、近所のスーパーマケットに向かう。
「ミスターユハナ、ミナとごはん食べに行くのもいいが、８人で騒がないか」
１番若い女性のラエルが話しかけてきた。
「ミスターユハナは働いてないからお金がなかったらみんなで出すから」
「蓄えがあるからお金の心配はない」
「賛成なのか」
「賛成だ」
「わたしがみんなを誘うから」
「メールしてくれ」
「わかった」
「今日は誰が買い物するのですか？」
「ヤユク」
ヤユクは夜のレストランに勤めている若者である。リーダーのように振舞っている。
「スパイスたくさん使うけど料理学校のスパイスでいいのかな〜」
「ミナに聞いてみたら」
「もしもし」
「ミナ？」
「なに？」
「スパイスは料理学校の使っていいのか」

「使っていい」
「ありがとう」
ヤユクはなんでも素早い。
買ったものを９で割ってみんなに払ってもらう。
「あんた失業中だけど平気なのか」
「貯金が少々ある」
「平気だ」
湯花邪無は、カレーを自分でつくるのははじめてだった。
スパイスをたくさん使う。
「ミスターユハナのカレーをわたしに」
「ナンにしてください」
「３種類作ったが」
「３つともだ」
「わたしのと交換しよう」
ミナのカレーはおいしい。
なんで１種類しかつくってないのかわからない。
しかしおいしい。
みんなはミナに食べてもらえない。お互いに交換して食べている。湯花邪無のことをうらやましく思っているわけではない。ミナがミスターユハナにいかれているだけだと思っている。
「ミスターユハナは腕を上げていますが、レストランではまだ勤められません」
「おいしいレストランを紹介します」
「スケジュールを調整中だ」
「失業中なのに忙しいのか」
「そうだ」
「オンナか」
「料理に忙しい」
湯花邪無は、急いでスパイスｙｕｈａｎａに戻った。
新宿に行かないといけない。
「ただいま〜」

「おかえりなさい〜」
コーラスチームのようだ。
「すぐに新宿に行くのか」
「そうだ」
「今日はなんだったのか」
「カレーだ」
「おいしくなったのか」
「多分」
「コーヒーここだから」
「リニどうもありがとう」
湯花邪無は、ジンからのメールを見ていた。
バジルはｙｕｈａｎａの森で通年栽培できているので、生葉と乾燥バジルを商品として試作してみることにしたらしい。
バジルソースは、午後からのカワン食品との打ち合わせの時に相談してみるらしい。
まずバジルをやってみるのだろう。コリアンダーも相談したのだろうが何も書いてない。
ジンからカワン食品のメールがきたのは、16時だった。スパイス湯花にいた。
「日本人の方がおいしいと感じると思うので30袋試作品を持って帰る」
「わたしはおいしいと思った」
「名前は、わさびと鶏と米のスープ」
「見積もりは82円だった」
「わさびは日本のわさび工房から直接買ってもらう」
「冷蔵で空輸する」
「スパイスｙｕｈａｎａは１５４円でネット販売と自分の店売りをする」
「日本へは82円で直接スパイス湯花が買う」
「バジルソースは１週間で試作が上がる」
湯花邪無の返事は短い。
「わかった」
18時になってステファノとアイチャからメールがきた。ラバトの北のオリー

ブ畑からだ。
「スパイスはクミンとパプリカとターメリックとシナモンを栽培してハーブのコリアンダーを栽培したい」
「スパイス工房モロッコはレッドペッパーの工房を買い取りたい」
「レッドペッパーの工房の近くにｙｕｈａｎａの森モロッコの畑の候補地がある」
「レッドペッパーも栽培ができる」
「明日か明後日ラバトに来てくれないか」
「明日ジンやエミルと相談して明後日モロッコに行く」
「今から水野まさみとはメールで相談する」
湯花邪無は、自分だけで何も決めない。
実質的に、ジンやエミルや水野まさみが会社を動かしているので、必ず、大事なことは相談する。
モロッコに出ることなどは大事なことだ。
８月30日だった。土曜日である。
湯花邪無は、いつものように羽田からジャカルタへ向かった。
沢風ゆりがいなくなって、北千住のマンションは寂しくなった。ごはんがまるでダメである。料理学校に通ってはいるものの、ジャカルタ料理である。北千住では日本食を食べたい。近所のスーパーマーケットで刺身を買って帰ることが多い。
「おはよう」
「おはようございます」
みんなは湯花邪無を見なくてもコーラスのようにあいさつを言う。
「ミスタージャム、ステファノとアイチャのメールを読んだのだが、モロッコの森をはじめるのか」
「ジンと相談したい」
「わたしはミスタージャムの考えでかまわない」
「エミルと相談してやってほしい」
「午後からスパイス工房とｙｕｈａｎａの森に行く」
「カサブランカのＦＡＲ通りにお店をつくる予定だ」
「スパイスｙｕｈａｎａのようなお店なのか」

「モロッコで１店しかつくらない」
「ネット販売でやるのか」
「そうだ」
「ジャカルタと新宿と次がカサブランカになるのか」
「そのつもりだ」
「上海が次なのか」
「多分」
「スパイスｙｕｈａｎａの森モロッコとスパイス工房モロッコを明日見に行く」
「カサブランカのお店は見つけているのか」
「相談をしている」
「来週の日曜に一緒に行ってほしい」
「わたし？」
「そうだ」
「土曜にカサブランカに泊まって日曜にカサブランカを歩いてみたい」
「わたしと？」
「そうだ」
「カサブランカのお店は、新宿のようになる」
「どういうことなのか」
「ジャカルタが本社で新宿は支社だ」
「ジャカルタから新宿の資本が出ている」
「たまたま私が日本人だから新宿に半分いるけど」
「カサブランカに常駐するわけにもいかない」
「カサブランカはジンに任せたい」
「カサブランカに住むのか」
「１週間に１度行くことができないか」
「わたしに任せるのだったら１週間に１度かどうかもわたしに任せて欲しい」
「わかった」
「お昼はどうするのだ」
「スパイス工房で食べる」

「エミルに連絡したのか」
「お願いしたい」
「エミルとガダラに連絡しておく」
「わかった」
湯花邪無は、華美美鈴の月へ行くことが気になっていた。
また事故が起こったら華美美鈴は、宇宙のどこかに消えてしまう。
今の湯花邪無には耐えられないことになる。
ニューヨークのライブテレビでも何もやっていない。
ネット情報でも、昨日今日の情報は何もない。準備をしているのだろうが心配である。
メキシコシティーのアースバッテリー新幹線の話題もなくなった。華美美鈴が拉致されて眠らされていたことなどは、華美美鈴が表に出さない。誰も知らないのだ。拉致の犯人しか知らない。華美美鈴は犯人を追わない。アースバッテリー推進などやっていると、次々に災難が襲ってくる。先里風香と華美美鈴は覚悟をしているのだろう。
「エミルこんにちわ〜」
「ごはん食べに行きましょう」
「モロッコのことで相談あって来た」
「ジンから聞いている」
「スパイス工房モロッコのメンドーを見てほしい」
「それは聞いてない」
「明日ラバトに行くんだけど」
「それだったらわたしも一緒に行く」
「日曜だけど」
「平気だ」
「８時の飛行機に乗るけど」
「わかった」
「ガドガドを食べに行こう」
「わかった」
「ジンは来週の日曜にカサブランカに行くと言っていた」
「モロッコのセンターだ」

「あてはあるのか」

「相談をしてきた」

「レッドペッパーの工房を買うのか」

「私は明日見るから一緒に見てくれ」

「まだ契約はしていない」

「わたしが社長をやるのか」

「自分で決めてくれ」

「ジンは？」

「カサブランカの会社の社長のつもりでいる」

「常駐するのか」

「１週間に１度行ってくれって言ったんだけど任せてくれ」

「兼務なんだ」

「いつかは誰かに任せないといけないけど」

「スパイスｙｕｈａｎａの社長もジンにしたらどうか」

「ミスタージャムは会長しかやっていない」

「グッドアイデアだと思うからそうする」

「ホントなのか」

「カサブランカの会社が立ち上がる時に一緒にやる」

８月31日日曜日である。

「電車にするのか」

「高速電車だと20分で行く」

「わかった」

ラバト駅でステファノとアイチャが待っていた。

「ここからはアイチャの運転で行く」

「先にレッドペッパーの工房に行く」

「どこにあるのだ」

「高速道路で15分だ」

「わかった」

小さな街に出た。

レッドペッパーの工房だがモロッコでは、レッドペッパーを頻繁に使うわけではない。

中国か韓国か日本の工房なのだろう。
「工房の責任者に会えるのですか？」
「待っている」
「誰だ」
「柴田五郎」
「日本人ですか？」
「日本の会社の工房だ」
「わかった」
「撤退して日本に帰るのだがｙｕｈａｎａが工房を買ってくれると思って待っている」
「責任者ですか？」
「社長で本社の課長だ」
湯花邪無は少し不安だった。
買う人が日本人だと、失敗のつけを一緒に払わされるかもしれない。
「こんにちわ〜」
柴田五郎は玄関で待っていた。
「湯花邪無です」
「柴田五郎です」
「ジャカルタの工房の責任者のエミルです」
「よろしくお願いいたします」
「工房を見せていただけますか？まず」
もう社員は解雇したのだろう。誰もいないのだと思った。静かである。
「いつ工房を閉じたのですか？」
「先週だ」
ジャカルタのスパイス工房よりも広い。
「レッドペッパーの畑はどうなっているのだ」
「もう管理していないが畑は今はしっかりしている」
「収穫できるのか」
「できる」
湯花邪無は、唐辛子の畑も見て歩いた。
柴田五郎は、近くの町のレストランからお昼ごはんをテイクアウトしてい

た。
「工房を閉じたので何もありませんが」
湯花邪無とエミルは、お昼を食べて、ステファノとアイチャが候補地に選んだｙｕｈａｎａの森モロッコに向かった。
「30万ドルだけど」
「早く撤退したのだと思う」
「30万ドルでは安い？」
「極めて安い」
「じゃ〜話を進めるけど」
「エミルにメンドーをみてもいらわないと難しいけど」
「わたしがしばらく社長やる」
「いいのですか？」
「こっちでつくれたらジャカルタの品薄を少しは解決できる」
ステファノとアイチャが案内した畑は、レッドペッパーの工房から車で５分の所にあった。
周辺がオリーブ畑だ。
「ここだ」
「オリーブ畑なのか」
「あの森の中にスパイス畑がある」
「今は規模が小さいが大きくできる」
「オリーブはどうするのだ」
「このまま栽培する」
「ｙｕｈａｎａブランドでオリーブオイルがあってもおかしくはない」
「ここは売ってくれるのか」
「交渉した」
「誰がやっているのだ」
「見渡す限りの農場すべてを持っている人だ」
「この１画を切って売ってくれる」
「いくらだ」
「20万ドル」
「テニスコートが１０００枚だ」

「ジャカルタの２倍になる」
「誰ですか？」
「アマルという富豪だ」
「ｙｕｈａｎａにここを売ったとしてもなんともない」
「オリーブオイルで儲けているのか」
「そうだ」
「アイチャの家もオリーブオイルをやっているのではないか」
「工房をやっていない」
「アマルの工房でオイルにしてもらっている」
「近くなのか」
「車で10分はかかる」
「なるほど」
湯花邪無は、アマルに会うために、事務所に向かった。
自宅なのか事務所なのかわからない大きな屋敷だった。プールもある。
アマルは60歳くらいの穏やかそうなゆったりしたオトコだった。
「ステファノとアイチャから話は聞いている」
「スパイスの仕事は儲かるのか」
「オリーブオイルほどではないかもしれない」
「ところでレッドペッパーの工房は買ったのか」
「ここから帰りに寄って返事をするつもりだ」
「買うつもりだ」
「するとここが必要になるんだ」
「そうだ」
「20万ドル小切手で出せるのか」
「出せる」
「責任者は誰になるのか」
「アイチャだ」
「スレファノには時々来てもらう」
「アイチャには応援をしたい」
湯花邪無は、アマルと柴田五郎に、９月７日に、カサブランカにお店を出すことでやってくるので、その時に、小切手で支払うという約束をした。

エミルとステファノと湯花邪無は、アイチャを残して、ジャカルタへ帰った。
アイチャは不安そうだった。
「ステファノが１週間に１度は来てくれるから安心して」
「お母さんとお父さんによく話して」
「ジンもカサブランカに来るし味方が多いから」
それでも不安そうなアイチャだった。

スパイス学の講義

「ただいま」
「東京に帰るかと思った」
「明日大学の１回目の講義だから」
「エミルは帰って来たの？」
「スパイス工房のアースバッテリー化が明日からある」
「帰って来た」
「９月７日に一緒にカサブランカに行ってくれ」
「わかっている」
「ｙｕｈａｎａの森モロッコとスパイス工房モロッコの支払いをする」
「７日？」
「20万ドルと30万ドルだ」
「小切手？」
「そうだ」
「わたしが用意していく」
「ｙｕｈａｎａの森モロッコの社長をアイチャにした」
「スパイス工房モロッコの社長はしばらくエミルがやるって自分が言った」
「じゃ〜明日人事の連絡書を出しておく」
「お願いする」
「チャブチャイだから座って」
「着替えてきます」

「シャワーは後で一緒にするから」
「わかった」
９月１日だった。月曜日だ。
湯花邪無は大学に向かった。
今日は料理学校と新宿である。ミナに連絡してある。
準備はしてきた。１回目はコショウである。
木を育てるところから実の採取からコショウの生産まで、ｙｕｈａｎａの森とスパイスｙｕｈａｎａで撮影して説明できる。
「話の途中でいいからどんどん質問をするように」
「スパイスがなぜ人間の食事に欠かせなくなったか理解してくれたのだろうか」
「コショウの国として誇りに思っている」
スパイス学は人気があるわけではない。
それでも２００人を越える学生が集まっていた。
スパイスは先端の仕事ではない。アナログの仕事である。しかし、スパイスを人はどこまでも求める。
ジャカルタの人達にも、スパイスの魅力が消えることがないのだろう。
若者も、スパイスをやろうと思ってくれる人も多くいるようだ。
「今日のスライドを公開しているから大学のパブリックホルダを検索してください」
「ダウンロードできるのですか」
「自由にしてかまわない」
湯花邪無は、大学のパソコンから、ジンと水野まさみにスライドを添付してメールした。
「パブリックホルダに収めてみんなにメールしてください」
「自分でコショウの学習ができるようになっている」
湯花邪無は、そのままお昼まで大学に残って、10月１日のレッドペッパーのスライドを何枚か書き加えた。
「今日の大学のスパイス学の講義が終わった」
「１回目はコショウだ」
「ジンがパブリックホルダに収めるから見てほしい」

「10月１日の２回目はレッドペッパーにするつもりでいる」
「スライドつくりを手伝ってほしい」
湯花邪無は、ジャカルタスパイス工房のリーマイにメールをした。エミルをＣＣにしておいた。
１分もしないうちに返事がきた。
「まだパブリックホルダに収まっていないが、スライドつくりを手伝うことは了解した」
「どうすればいいのか知らせてほしい」
「明日９月２日火曜日の午後にスパイス工房ジャカルタに行くから相談したい」
「了解した」
湯花邪無は、大学からスパイスｙｕｈａｎａに向かうアースカーの中で、華美美鈴の月でのアースバッテリー利用のニュースを調べた。ライブテレビでは何もやっていない。
ライブテレビが追いかけているのは地球温暖化のことだ。ＣＯ２削減問題である。１００年も前から必死になって実行してきているのだが、大国インドの目標達成が難しい。
現在の地球の人口は１００億人である。ここ１００年で70億人まで減ってしまうと言われているのだが、２１１４年が問題である。
日本の海岸も、１００年前に較べて42センチ海が上昇している。満潮時には、海水が道路に溢れる。
今後１００年では、アフリカ諸国が経済発展するのだが、またもや。ＣＯ２問題を置き去りにする可能性がある。
すべて後手になっているのだ。
華美美鈴が月に出かけるのは13日である。
24時間後には月に到着する。
アメリカの民間の月連絡船の会社である。
火星にも連絡船を出している。
８月21日に１８２人が乗った連絡船が消えた。ソーラーバッテリーが故障したらしい。
同じ会社の連絡船である。湯花邪無には、勇気がないから同じ会社の連絡船

には乗れない。
多分、今回の連絡船にはアースバッテリー搭載されている。特に、月の重力圏内でのアースバッテリーが試される。計算上はいくらでもできるのだが、実際には、何が起こるかわからない。
アースバッテリーの月タクシーを積んでいるのだろう。多分、華美美鈴は自分で運転してみるのだろう。
「こんにちわ〜」
「こんにちわ〜」
湯花邪無は、今朝はスパイスｙｕｈａｎａには寄らなかった。
「お昼休みにみんなミスタージャムのスライドを見ると思う」
「ありがとう」
「ミスタージャムはやっぱり教授なのね」
ジンが珍しく持ち上げてくれた。
「これから新宿？」
「そうだ」
「明日はお昼からリーマイね」
「そうだ」
「お昼は？」
「飛行機で食べる」
「わかった」
湯花邪無は、少し満足げにジャカルタ空港に向かった。
空港でサンドイッチを食べた。
「こんにちわ〜」
「こんにちわ〜」
「わたしパブリックホルダを見ています」
「コショウでお給料もらってるんだけどコショウのこと知らなかった」
「グッドです」
「みんなもパブリックホルダを見てる」
「ありがとう」
「こっちがありがとうだ」
「コーヒーだけど」

牧野由香がコーヒーを持ってきた。
「ミスタージャムさんはいいです」
「ありがとう」
「わたしも勉強することにした」
「お願いしたい」
「何か変わったことはありませんか？」
「今日わさびの森とわさび工房が発足した」
「わさびの森に１０００万円わさび工房に２０００万円の資本金だ」
「機械の４２２万円もその中から払ってもらった」
「わさびがスタートした」
「どうもありがとう」
「ジャカルタの大学だけどわさびもやるのか」
「そのつもりでいる」
湯花邪無は、北千住のマンションに帰ると寒々しくて辛い。沢風ゆりが姿を消して20日を過ぎた。１度も姿を見せない。連絡もない。スポーツジムも辞めたそうだ。多分、近所にはいない。
近所のスーパーマーケットで、ビールとすき焼きの材料を買って帰った。ごはんを炊く。
ミナに教わっているインドネシア料理は参考になっている。料理をすることを心待ちにしているわけではないのだが、少しは楽しくなってきている。
すき焼きなどは、簡単に出来ることもあるが、食べるときの楽しみを予想して下ごしらえがスムースだ。
ごはんが炊けるまでシャワーをする。
しばらく前までは何もしなかった。

３日目のジャカルタになるのか

９月２日である。
湯花邪無は、羽田までのアースカーでライブテレビを見ていた。ニューヨークだ。華美美鈴の月へ行く準備で何かニュースはないか見ている。

日本のライブテレビを見ることは少ない。華美美鈴が日本人なのにフロリダに住んでいることもある。先里風香もフロリダにいる。興味のあるアースバッテリーもフロリダである。
日本は、人口減少に歯止めがかからなくて焦りが大きい。８４００万人だが、１００年後には４０００万人になるのではないかと言われている。経済は再生産と消費だから、生活者が少なければ経済は萎んでしまう。
まだ膨大な借財を残している。１８００兆円だ。消費税は28％で国民の財産を国家に拠出していることになっている。
このままでは、更に消費税を引き上げないといけない。国債の暴落が確実視されているのだが、なんとか踏みとどまっている。
このままでは消費税を35％にして、今回は、全額財政再建に当てないと、世界が黙っていない。日本の主要産業は観光になったのかもしれない。豊かになった社会が、豊かな時につくったモノが観光資源になる。昔から変わらない。
日本の感性溢れる新しい生活の開発発想はどこに行ったのだろうか。もう蘇らないかもしれない。
日本のライブテレビはおもしろくない。淡々と日常生活をニュースにしているだけだ。
それに較べて、先里風香と華美美鈴のアースバッテリーは、躍動感がある。リスクももちろん大きいのだが。
「おはようございます」
羽田空港で、あまり会いたくない人が待っていた。
有村聡と真野裕也だ。
「なにかありましたか？」
「沢風ゆりと連絡がとれない」
「ご存知でしょうけど北千住のマンションからいなくなりました」
「なにかあったのか」
「なにかってなんですか」
「我々に情報をくれていた」
「裏切ったと思って責めたのではないか」
「私は沢風ゆりがいなくなる時に知らされた」

「私を疑っているのか」
「佐野次郎と飯野修と繋がったら湯花邪無が危なくなる」
「華美美鈴を助けていることが知れたらまずい」
「湯花邪無を脅せば華美美鈴は日本に来てアース戦車を手伝う」
「それはない」
「華美美鈴は13日に月に行く」
「もしかしたら危ない」
「私の命と天秤にかけることはない」
「愛は思った以上に重い」
湯花邪無には、有村聡の言葉が重かった。どうしてこんなことが警察官にわかるのか、不思議だった。
「佐野次郎と飯野修に何か動きがあるのか」
「頻繁にジャカルタに出かけている」
「何をしているのだ」
「湯花邪無をウオッチしているかもしれない」
「確証はないが」
「また華美美鈴がジャカルタに行くこともあるかもしれない」
湯花邪無は、華美美鈴がジャカルタに来ることを知らなかった。華美美鈴は13日に月に行く。湯花邪無は、そのことばかりを考えていた。
「なぜ私を待っていたのだ」
「警告だ」
「私のためなのか」
「深入りすると私たちが湯花邪無に聞くことが多くなる」
「任意で同行させてもらうことになると誰かに知られる」
「こんなとこで立ち話はまずいのではないか」
「だから駐車場で待っていた」
「ジャカルタに行くのか」
「このまま帰る」
「気をつけろ」
湯花邪無は、慌ててジャカルタ行きの搭乗前に華美美鈴を検索した。
華美美鈴がジャカルタに来ることなどどこにもない。

時間が切れて湯花邪無は搭乗した。
飛行機の中でも華美美鈴の動向を調べた。もともと、華美美鈴は、スケジュールを直前にならないと明らかにしない。警察だから知っているのだろうか。それならば、もっと詳しく聞いていけばよかった。
７月31日にジャカルタにやってきてアースバッテリーを従来の機械に搭載する装置を置いていって。スパイスｙｕｈａｎａにスパイスを買いにきた。８月21日にジャカルタ自動車にやってきて、工場の一部がアースバッテリーで動く点灯式をやった。
３回目のジャカルタは何のために来るのだろうか。
佐野次郎と飯野修が頻繁にジャカルタに来ているのは、湯花邪無ではなくて華美美鈴を狙っているに違いない。しかし、どう探しても、華美美鈴がジャカルタに来るニュースは見つからない。

リーマイとレッドペッパー

「おはよう」
「おはようございます」
「遅かったけど」
「羽田で会いたくない人に会った」
「オンナの人？」
「拳銃持ったオトコだ」
「危ないの？」
「私に危険はない」
湯花邪無はまずいと思った。
ジンを怖がらせたらいけない。
拳銃を持ったオトコはウソではないがジンにはまずい。
ジンは、オンナが心配なのだ。
「今晩ジンのごはんもいいけど外で日本食でも食べてみないか」
「うれしい」
「ここに７時に来てくれ」

「山河？」
「ネットで調べてみて」
ジンは山河を探した。すぐにわかる。
「予約しないと難しい」
「ネットでやっておいてくれないか」
リニがコーヒーを煎れてきた。
「コーヒーでいいか」
「ありがとう」
「今日はどこでお昼にするのか」
「スパイス工房だ」
「ラニに伝えておく」
「ありがとう」
ジンは、山河に予約をしていた。
「こんにちわ〜」
「こんにちわ〜」
スパイス工房でもみんなは同じようにコーラスのように声を揃えて湯花邪無にあいさつをする。
「お昼の時間だけど」
リーマイがやってきた。
「エミルはどうしているんだ」
「スパイス工房のアースバッテリーやってるから忙しい」
「どんな具合なのか」
「機械１つ１つに取り付けているから時間がかかる」
「工房が止まっているのではないのか」
「動いている」
「アースバッテリーを取り付けている機械だけが止まっている」
「そうか」
「ミーアヤムだから」
「わかった」
鶏肉入りラーメンだ。
「パブリックホルダを見たのか」

「見せてもらった」
「あのレッドペッパー版をつくればいいのか」
「そうだ」
「わたしにはたくさんの写真がある」
「シナリオを書いてあるからごはん食べたら相談したい」
「わかった」
スパイス工房のミーアヤムは大盛りである。工房で作業をしている人が多いからだろう。
「スパイスｙｕｈａｎａのお昼はすごくおいしいと言われている」
「どうしてだ」
「スパイスをふんだんに使えるから」
「なるほど」
「スパイスの種類が多いほどおいしい」
リーマイは、たくさんの写真を持ってきて湯花邪無に説明した。
「リーマイが動画で説明役をやってもらえないか」
「植えるところから商品にするまで」
「ｙｕｈａｎａの森とスパイス工房で撮影が可能だと思うけど」
「それは可能だ」
「カメラはミスタージャムがやってくれるのか」
「私がやる」
「わたしは話せるけど文句がわからない」
「それは私がつくる」
「種類はどうするのだ」
「この写真を使おう」
「今日はどうするのだ」
「私に説明できますか？」
「そしたらｙｕｈａｎａの森に行かないといけない」
「出ましょう」
「シナリオができてるって聞いたけど」
「できてるけどリーマイに読んでもらう事は考えていなかったから」
「言葉にしないといけないのか」

「そうだ」
リーマイと湯花邪無は、暗くなるまでｙｕｈａｎａの森にいた。いきなり撮影したのだ。言葉は後でナレーションを入れることにした。
「リーマイ、スパイス工房まで送っていく」
「ありがとうございます」
「次なんだけど９月９日に来てもいいか」
「準備しておく」
「これつくって中国語でもつくりたい」
「わかった」
湯花邪無は、和食のお店の山河に急いだ。
遅くなってはいない。
19時の約束だ。
ジンはロビーで待っていた。
「遅くなった？」
「わたしが少し早く来た」
「人の目が気になる」
ジンと湯花邪無は、こんなふうに外で食事をすることがない。常にタベットのマンションで食事をしていた。４年になる。誰もジンと湯花邪無のことを知らない。
「どうしたのか気になる」
「あれだけ人目を気にしていたのに」
「ジンに日本食を食べてもらいたい」
「ミスタージャムと一緒じゃないけど日本食は好きだ」
「一緒に食べたい」
ジャブシャブだった。海鮮のシャブシャブである。
ジンも湯花邪無もお酒は飲まない。
別々の車で湯花邪無のタベットのマンションに帰る。
「ジャカルタは人が多いから平気かもしれない」
「誰かと出会っても仕事の延長で食事をすることはおかしくはない」
「わたし先にシャワーしてる」
「わかった」

９月３日だった。
「白ごはんに目玉焼きだから」
遠くからジンの声がした。
湯花邪無は、シャワーに向かった。
「わたし今日はシンガポール行く」
「朝からですか？」
「一度スパイスｙｕｈａｎａに寄る」
「先に行くから」
「わかった」
「今日は料理学校でしょ？」
「新宿ね」
「ええ」
「明日はフツウどおり？」
「そうだ」
ジンは、手際がよい。
素早く洗物をして着替えて化粧をする。
湯花邪無はジャカルタのライブテレビを見ている。新聞は、時々空港で買うことにしている。
「おはよう」
「おはようございます」
「ジンはシンガポールに出かけました」
「わかりました」
シンガポールのインドネシア料理やタイ料理やインド料理の大きなレストランのお客さんへの営業だろう。
湯花邪無は、すべてジンに任せている。ジンを社長にしようと思っている。カサブランカのお店ができる時にやろうと思う。
「ミスターユハナおはよう」
「１日は休みだったが忙しいのか」
「忙しくはないが時々用事もある」
「何をしているのだ」
「自分でごはんが食べられるように修行している」

「おいしいレストランで食べないと料理は上手にならない」
「９月９日に予約しておくけどいいか」
「まだスケジュールがはっきりしない」
「ダメだったら連絡をくれ」
「どうするのだ」
「キャンセルの電話をくれればよい」
かなり強引なミナの誘いを、みんなは笑いながら聞いている。
「今日はサンバルゴレンウダングだ」
「レシピを配る」
湯花邪無はスマホで検索した。まだミナがレシピを配っている時に検索できる。エビのココナツ煮である。
「ココナツミルクは買ってきてもいいのか」
「かまわない」
「エビを売っていなかったらどうするのだ」
「自分で考えてくれ」
今日は１番若い女性のラエルが買い物をするつもりなのだ。
「５人で日本に行くんだけど１日晩ごはんを一緒に食べられないか」
「ラエルの友達なのか」
「ここの独身の５人だ」
「レストランを２日休んで日本を見てくる」
「勉強なのか」
「そうだ」
「いつだ」
「９月20か21」
「土曜日か日曜がグッドだ」
「９月20日を空けておく」
「勉強したい料理はあるのか」
「チャンコ」
「私が手配する」
「相撲に興味があるのか」
「見たい」

「９月20日は15時に両国駅にいてくれ」
ラエルは、スマホにメモしていた。
「５人に連絡していいか」
「ちょっと待ってくれ」
「電話しているから先にスーパーマーケットに行っていてくれ」
湯花邪無は、国技館を検索して９月20日秋場所の７日目の座席を予約した。６名である。
この日は、ジャカルタの日である。午後に日本へ行かないといけない。
「９月20日15時に両国駅にいてくれ」
「５人全員なのか」
「そうだ」
「みんなに知らせてくれ」
「わかった」
これを知ったらミナが怒ると思った。
「ただいま」
「おかえりなさい」
「ジンはまだ帰っていません」
「わかった」
「何かかわったことはありませんか？」
「順調です」
「私はこのまま新宿に行きます」
「何かあったら電話をください」
「承知しました」
湯花邪無は、ジャカルタ空港までのアースカーで、アースバッテリーを検索した。華美美鈴の月行きが近いのだ。気になっている。
何も情報はなかった。
「こんにちわ〜」
「こんにちわ〜」
いつもの時間に湯花邪無は新宿のスパイス湯花に入った。
「何か変わったことはありませんか？」
「順調だ」

「今日はスパイス教室をやっている」
「行きます」
「９月５日のカラオケは大丈夫ですか？」
「平気だ」
牧野由香はそれだけは確認しておきたかったのだろう。
湯花邪無は、そっと、水野まさみとジニがやっているスパイス教室に入った。
ジニが今日のメニューとレシピを持ってきた。
インドネシア風ハンバーグだった。
多分、スパイスを何種類も使うのだろうと思った。
12人が参加してくれていた。
料理教室ではないので、自分では調理しない。メモを書いて帰ってインドネシア風ハンバーグをつくるのだろう。
「ミスタージャム、このハンバーグを食べてみますか？」
「みんなに食べてもらえば良かったのに」
「12人いるからまずい」
「水野さんは？」
「ミスタージャムに聞いてみろ」
「わかった」
「今日も料理教室でしょ？」
「そうだ」
「なんですか？」
「エビのココナツミルク煮」
「おいしくできましたか？」
「少しはおいしくなった」
「お昼のパンが少しあるから」
「わかった」
湯花邪無は、水野まさみとジニが調理したインドネシア風ハンバーグを食べた。
味そのものは、完全にインドネシアである。スパイスのせいである。
醤油も加えていないようだ。

「すごくおいしい」
「ありがとうございます」
「みなさんスパイス料理をやってくれるとうれしいです」
エミルから電話があった。
スパイス工房の機械のすべてがアースバッテリーになった。電灯もアースバッテリーになった。おかしなことなのだが、スパイス工房の電気代はタダになる。
故障のことを考慮して、いままでの電源は確保してはいるが、故障がなければ使うことはない。
「使い勝手はどうですか？」
「今までと何も変わらない」
「マイナスになることは何もないのか」
「何もない」
「おつかれさま、エミルありがとう」
「新宿もやったらどうか」
「水野まさみに話す」
水野まさみが片づけを終えて帰ってきた。
「なかなか食べられないようね」
「おいしい、腕は確かだ」
「ありがとう」
「スパイス工房がすべてアースバッテリーになった」
「電気代がゼロになる」
「スパイス湯花もできるのですか？」
「できる」
「どうすればいいのですか？」
「アースバッテリーのライティングを仕事にしている会社です」
「スパイスｙｕｈａｎａはどうするのですか？」
「10月１日に工事だ」
「わたしがジンに聞いてやります」
「お願いします」

ジャカルタ港

湯花邪無は、北千住のマンションに帰ることに暗くなる。
多分、こうして外食ばかりになって肥満するのだろうと思ってしまう。
インドネシア風ハンバーグをつくってみようと思った。
料理に興味を持ったことは良かった。
沢風ゆりがいなくなったことは、やはり寂しいのだ。ジャカルタにジンがいるのだから、北千住にもう１人いることはない。欲張りである。
しかし、沢風ゆりはごはんもおいしかった。楽しかった。
湯花邪無は、水野まさみのインドネシア風ハンバーグのレシピを持って帰らなかった。
それでも、レシピに慣れてきている。だいたいわかってきている。
ごはんを炊いている間に、ハンバーグを２つつくる。サラダをつくる。
焼き方は、強火でガチっとやって弱火で時間をかけて焼く。
９月４日だった。
日本はジャカルタのように暑い。
１人である。エアコンをつけっぱなしにしないように気をつける。沢風ゆりがいた時は、何も気にならなかった。
昨日の余りのごはんにチンをして納豆ごはんにする。味噌汁をつくればいいのだが、こころが動かない。コーヒーだけは煎れる。
羽田までのアースカーで日本のライブテレビを見た。
少子化と言われて１００年が過ぎたのだが、一向に改善しない。８４００万人になった。
アースバッテリーの開発者の先里風香はどう言っているのか気になった。香風里先を検索してみた。エッセイを書いているはずである。
『豊かさを維持したいエクスタシー』のキャッチコピーを読んだ。
一旦豊かになった人間社会では、豊かさを維持したいエクスタシーなるものがあって、何よりも優先させるのだそうだ。
その豊かさを維持したいエクスタシーでは、子どもが増えると豊かな社会を維持できない考えがあるために、子どもを増やさない風習というより掟のよ

うなものができるために、子どもが増えずに人口が減っていくのだそうだ。
人口が減ると、経済は再生産と消費だから、消費する生活者が少なくなるのだから、経済は縮小して、社会そのものも縮小して、財政的にも破綻してしまって、社会はなくなる。
こんなようなことを言っているエッセイらしい。
湯花邪無は、ダウンロードした。
日本に較べてジャカルタでは、豊かになり方が遅かった。２１１４年の今が最高に豊かではないかと思える。人口も３億３千万人である。アメリカを抜いてしまいそうである。インド中国インドネシアの順になる。経済も、インド中国アメリカインドネシアになっている。日本は40年前にインドネシアに抜かれた。
しかし、香風里先に従えば、インドネシアは、これから苦境に陥ることになる。豊かを維持したいエクスタシーに目覚めることだ。人口減少になる。すでに、インドや中国やアメリカは、人口減少をしている。
羽田の駐車場で、有村聡と真野裕也が待っていた。
「今日も佐野次郎と飯野修がジャカルタに行く」
「私を追っているのか」
「湯花邪無がジャカルタに行く曜日とは限っていない」
「華美美鈴と湯花邪無のことを知らないと思う」
「それはありがたい」
「沢風ゆりが裏切ったらわからなくなる」
「あなたたちは私を裏切らないのか」
「私達は警察官だ」
「それで何か用事なのか」
「多分、華美美鈴の拉致を計画していると思う」
「証拠はあるのか」
「ジャカルタの戦車の会社と組んでいるかもしれない」
「インドネシアは戦争の道具はつくらない」
「お金で雇ったかもしれない」
「注意しろなのか」
「あなたたちはなぜ華美美鈴の誘拐を防ごうとするのか」

「アメリカから外交ルートと通じて依頼がある」
「保護してくれ？」
「守ってくれ」
「拉致の犯人を特定しているではないか」
「訴えがないから事件にならない」
「靴の上から足を掻いているかのようだ」
「なるほど」
「湯花邪無がずっと華美美鈴を助けてきたの承知している」
「なぜ助けているのかわからないが」
「今度も助けるかもしれない」
「我々はジャカルタでは手を出せない」
「私にやれと言っているのか」
「言っていないが知っている情報は知らせる」
「佐野次郎と飯野修はどんな顔をしているのか」
湯花邪無は、はじめて、佐野次郎と飯野修の顔を知った。40歳か50歳だ。忍者ではないかもしれないと思った。忍者だったら、羽田で、華美美鈴に簡単には置いていかれないだろう。
「おはよう」
「おはようございます」
「どうしたの？」
ジンが聞いてきた。
「なにが」
「顔が沈んでる」
「また羽田に会いたくない人がいたから」
「拳銃を持ったオトコか」
「いい人だ」
「気になる」
「心配いらない」
「わたしお昼からバンコク」
「何かありますか？」
「タイ料理食べてくる」

「わかった」
「今日は夕食会でしょ？」
湯花邪無は、ジンに話したかどうか記憶がなかった。料理学校の仲間８人と晩ごはんを食べる。アルコールがないから飲み会にはならない。
「夜はマンション？」
「そうだ」
「遅くならないように」
リニがコーヒーを持ってきた。
「ジンと一緒にバンコクに行く」
「それはよかった」
「ミスタージャムは行かないのか」
「今日は用事がある」
「それは残念」
湯花邪無は、買い物があると言って外に出た。
「佐野次郎と飯野修は何時の飛行機に乗ったのだ」
「９時だ」
「東京時間か」
「そうだ」
湯花邪無はジャカルタ空港に向かった。
時差は２時間だ。
急がないと間に合わない。
湯花邪無は運転をアースカーに任せて着替えた。ラフなジャカルタの野郎になった。帽子をかぶった。
湯花邪無は、到着ロビーで佐野次郎と飯野修を待った。
２人は顔パスで入国できるのだろうから、前科などはないことがわかる。身元はしっかりしているのだ。
佐野次郎と飯野修は最初に出てきた。何も持っていない。50分でやってくるのだから何もいらないのだろう。
２人は駐車場に向かった。
湯花邪無はアースカーの中で、佐野次郎と飯野修の車が発車するのを待った。

車の中は２人のようだ。佐野次郎と飯野修は車を駐車させていたのだろう。
どこへ行くのか。
ジャカルタ港へ向かった。
華美美鈴を船で日本へ連れてくるのだ。
高速で航行しそうな船の中へ入って行った。
湯花邪無は羽田で華美美鈴を守る方法は心得ている。華美美鈴の短距離選手のような足の速さだ。湯花邪無のアースカーまで走らせればよい。しかし、羽田以外では、どこに向かって走らせればよいのかわからない。
ジャカルタでは、ジャカルタ港から船だったら、どうするか考えなければならない。
「ただいま～」
「おかえりなさい」
湯花邪無がスパイスｙｕｈａｎａに戻ったのは、15時を過ぎていた。
「ミスタージャムなにをしていたのだ」
ラナンがコーヒーを持ってきた。
「今日のごはんは余ってないか」
「お昼を食べてないのか」
ラナンは５分もしないうちにラーメンをつくってきた。
「余りの野菜だ」
「ありがとう」
「何をしていたのだ」
「海を見たくなった」
「港に行ったのか」
「そうだ」
「おいしいレストランがたくさんある」
「海を見ていた」
「お店に出てるから用事があったら電話してくれ」
「わかった」
「おいしいのか」
「最高だ」
「先においしいって言わないとこれから作ってもらえない」

「ありがとう」
「変わったことありませんか？」
「順調」
バンコクからはメールもなかった。
17時になってジンとリニがバンコクから帰ってきた。
「クロントイ市場で食べ歩いた」
「レストランじゃなくてですか？」
「屋台のレストランがたくさんある」
「みんなおいしい」
「今度の９月11日の誕生会はタイ料理にする」
「タイ舞踊団も頼んできた」
「タイ料理のレストランにも今行ってきた」
「ジャカルタにあるタイ料理のレストラン」
ジンは、湯花邪無の同意を求めているのではない。結果報告をしているのだ。
「もう出るの？」
「ええ」
「わたしみんなに連絡してから帰るから」
「９月11日しか連絡してないから」
「タイ料理にタイの舞踊団だって知らせないといけない」
「みんな楽しみにしてる」
「お願いします」
「誕生日祝は同じだけど」
湯花邪無は、18時ピッタリに、ダウンタウンのインドネシア料理店に入った。
ミナと行くような所ではない。
日本の居酒屋のような所だ。お酒がないだけで雰囲気は同じである。
たくさんの料理をみんなで摘む。
「ミスターユハナ大丈夫か？」
主婦のサナが聞いた。
「サナは平気なのか」

「ここのレストランも教えている」
「料理学校の仲間だと出やすい」
「今日は美人でしょ？」
「そうだ」
「これがフツウだから」
「まだ揃ってないのか」
ヤユクがやってきた。
「みんなお店は休みなのか」
「休んだ」
「たまには息抜きも必要だ」
８人である。今の湯花邪無とは友達にはなれそうもない人達である。
湯花邪無には、お酒がなくて話に夢中になるジャカルタの人がおもしろいと思う。日本人の湯花邪無には、少し物足りない。少しアルコールが入ってハイになっていた方が、おもしろい話ができる。
愉快で楽しい時間だった。
「みんなで分けるから」
ラエルがスマホで計算して知らせた。
「もう２時間経ったのか」
「もっと話したいのか」
「楽しかった」
「ミスターユハナは失業中だがお金は払えるのか」
「蓄えがある」
「明日はミナには内緒だから」
「ミナに言うとミスタージャムがしかられる」
みんな納得した。
すごく安上がりである。
ミナが紹介するレストランで２人で食事をするよりも安上がりだ。
「ただいま」
「おかえり」
「楽しかった？」
「楽しい時間だった」

「ごはんは？」
「コーヒーがいい」
「先にシャワーしたら？」
「わかった」

レトルト鶏肉バジル炒め

９月５日である。
「わたし先に行くから」
「ジニとカワン食品に行くから」
「ああ」
「レトルトバジルソースとレトルト鶏肉バジル炒めを頼んである」
「ジニはレトルト全般もやるんですか？」
「いけない？」
「任せますけど」
「和食学んでいるのは知ってる」
「ああ」
「遅くなるから出るから」
「わかった」
「コーヒー煎れてある」
「ありがとう」
湯花邪無とジンは、ついつい会社の話が多くなる。途中で打ち切らないと会社に遅れる。
「おはよう」
「おはようございます」
リニがやってきた。
「料理教室ですか？」
「そうだ」
「すぐに出かけられますか？」
「なにかありますか？」

「ハーブ茶煎れようと思って」
「お願いします」
「リニはファンですか？」
「ハーブ茶おいしいです」
「わかりました」
湯花ジャムは、スパイスしかやってこなかったが、ハーブも研究しないといけないと思った。
「ミスターユハナおはようございます」
「おはようございます」
「９月９日は予約したから遅れないように」
「わかりました」
料理教室の７人の仲間は笑っている。
昨日のことはミナには内緒だとみんな知っている。
「今日は魚の揚げ物にサンバルです」
「レシピを配りますから買い物をしてきてください」
「魚は何にするのだ」
「おいしそうなものだったらなんでもよい」
「油とかは料理学校のを使うのか」
「かまわない」
インドネシアでは、最近は、調理された魚も売っているし下処理だけの魚も売っている。もちろん、網から上がったままの魚も売っている。
「なまずにしよう」
ヤユクが言った。
主婦の２人は、顔をしかめた。どうしたらいいのか全く見当もつかないだろう。
「ヤユクは揚げ物にできるまでにおろせるのか」
「やらせてもらったことはないが見ているからなんとかなる」
「最悪の場合はミナに教わればいい」
「そのための料理教室だから」
８人でなまずを２匹買って帰った。
「包丁はあります」

「ミナ教えてくれ」
「難しい魚を買ってきた」
なまずの揚げ物にサンバルはおいしかった。
みんなおいしかったようだ。
「ミスターユハナの揚げ物はおいしくできました」
「サンバルも最高です」
「持って帰って使ってください」
「小瓶があるからどうぞ」
ミナは、湯花邪無しか教えていないかのようです。
それでも７人は笑っている。
「ただいま〜」
「おかえりなさい〜」
みんなはコーラスのように声が揃う。
ジンとジニが帰っていた。
「ミスタージャム、今日はなんだ」
「なまずの揚げ物とサンバルソースだ」
「おいしくできたのか」
「ミナに褒められた」
「ミナは先生なのか」
「そうだ」
「サンバルソースだけど」
「ミスタージャムがつくったのか」
「そうだ」
「わたしいただいていいか」
「どうぞ」
「お昼ごはんに使ってみる」
ジニは興味深そうに湯花邪無から小瓶を受け取った。
「報告しておく」
「これレトルトバジルソース」
「たくさん他の会社もやっているから特別に試作したわけじゃないらしい」
「レトルト鶏肉バジル炒め」

「これもすでにあるんだけどｙｕｈａｎａの唐辛子とスパイスを使ってもらった」
「ジニのレシピ」
「１００つくったから５つ北千住に置いておけばいい」
「驚くから」
「いくらなのか」
「82円」
「スパイスｙｕｈａｎａは１５４円でネット販売と自分の店売りをする」
「バジルはｙｕｈａｎａの森から買ってもらう」
「生葉と乾燥バジルもやるのか」
「バジルで３つの商品」
「11月１日発売」
「わかった」
湯花邪無はレトルト鶏肉バジル炒めを持ってジャカルタ空港へ急いだ。
「こんにちわ〜」
「こんにちわ〜」
「牧野さんちょっと」
湯花邪無は、売場にいた牧野由香を呼んだ。
牧野由香は心配そうに湯花邪無に続いて２階へ上がった。
４人の女子社員とカラオケに行くことになっている。雰囲気として、急に用事ができたからと言われそうだった。
「水野さんこんにちわ」
「どうしたんですか？」
「これを食べたいんだけど」
「レトルトですか？」
「自分でできるけどごはん余ってないだろうか」
「お昼のごはんですか？」
「これはなんですか？」
「レトルト鶏肉バジル炒め」
「どうしたのですか？」
「ジャカルタとバンコクで販売してみようと思っているんだけど」

「ハーブ？」
「そうです」
「バジル？」
「生バジルと乾燥バジルとレトルト鶏肉バジル炒め」
「１つしかないのですか？」
「湯花邪無は５つをテーブルに出した」
「わたしも食べてみるから牧野さんも食べてみて」
牧野由香は、厨房に急いだ。
「変わったことはありませんか？」
「順調です」
レトルト鶏肉バジル炒めはホントにおいしかった。
スパイスｙｕｈａｎａのスパイスをたくさん使っているからかもしれない。
「これおいしいわ〜」
「ミスタージャムは料理教室だったでしょ？」
「そうだ」
「お昼を食べてないんですか？」
「なまずの揚げ物にサンバルソースだった」
「難しい料理」
水野まさみは、ごはんも一緒に食べている湯花邪無を見て聞いた。
「牧野さんはどう思いますか？」
「すごくおいしいから発売したら売れると思う」
「そうですか」
「いつ発売するのですか？」
「11月１日」
「わさびと鳥と米のスープと同じですか？」
「そうだ」
「値段も同じですか？」
「そうだ」
「日本でも売ります」
「ああ〜そしたらジンと相談してください」
「ジニが行っているけど」

「ジニも同じように思っているかもしれない」
「相談します」
「ミスタージャム、今晩だけど」
「空けてあります」
牧野由香は、１番気になることを聞いてきた。
「みんな楽しみにしてるから」
「水野さんにも話してあります」
「ミスタージャムの歌なんて想像できない」
「上手くはありません」
「うわさが広がってるけど」
「６時にここにいてください」
「わかった」
「カラオケレストランですからごはんもおいしいです」
「わかった」
湯花邪無はアースバッテリーを検索した。
華美美鈴が月へ行く話しがたくさん出てくる。事故を起こして最初のフライトだから危ないのではないかとの意見もたくさんある。
細かく全部読んでみたが、華美美鈴がジャカルタに来る話しはどこにもない。しかし、有村聡と真野裕也が、佐野次郎と飯野修が何度もジャカルタを訪れているとの情報をくれた。
華美美鈴が近々にジャカルタに来ることは間違いないとは思う。
佐野次郎と飯野修はジャカルタ港で高速船に入って行った。
華美美鈴は月へ行くのだ。忙しい。ジャカルタに来るわけがない。何をしに来るのだ。
「ミスタージャム６時になったけど」
「平気です」
「歩いて行きます」
新宿である。少し歩けば、カラオケレストランのお店はたくさんある。
「ミスタージャムこんばんわ〜」
まだ明るいのだが、お店の前で４人が待っていた。
最新のランキングでは、彗星での恋の歌が１位だった。２人で彗星に着陸し

て住む話だ。食べるものが何もないし水もないのだが、そんなことを言っていたら若者の中には入れない。今日も誰かが歌うはずである。
アジアンテイストのカラオケレストランである。個室レストランにカラオケの装置が付いている。
日本はすごいと思ってしまう。日本というより新宿と渋谷がすごいのだ。
「ミスタージャムの歌は聴ける」
「こんな歌はどこで習ったのですか？」
１５０年前に流行ったのだが、もう忘れられている。時々テレビで歴史を振り返る時に出てくる音楽だ。
「ジャカルタの社員がステキだって言っていたのがわかる」
湯花邪無は社長だから持ち上げているとしか思えない。
「音程外してなかったのがいいよね」
結局、イエスタデイとレットイットビーを歌った。
ラナンに教わったビートルズの曲である。他に何も歌えないわけではないが、リクエストが、この２曲なのだ。
「レットイットビーとイエスタデイの他に仕入れないと難しくなるかも」
北千住のマンションに帰って湯花邪無はラナンにメールした。
「今日は上手くいったのか」
「音程を外さないらしい」
「わかった」
短いメールがラナンから返ってきた。

カサブランカのお店

９月６日だった。土曜日だ。
湯花邪無はパンを買うのを忘れていた。コーヒーは豆を挽いた。羽田でおそばを食べようと思った。だんだん、北千住の朝ごはんを食べなくなってきている。よくないと思う。
タベットのインドネシアの朝ごはんの方は、しっかり食べられている。
和食にしたらどうかと思うのだが、ごはんを炊かないといけない。

沢風ゆりがいた時は、こんなことは考えもしなかった。
羽田に向かうアースカーでニューヨークのライブテレビを見た。
アメリカの人種問題は、１００年毎に薄まりつつあって、１００年前には、黒人初の大統領だっていた。確かに薄まってはきているのだが、それでも、問題が起こっている。
肌の色は紫外線に対して皮膚がメラミン色素を用いて防御している技に過ぎない。
２２１４年にはどうなっているのだろうか。
湯花邪無は搭乗ロビーでおそばを食べた。
搭乗ロビーだけに素早く出てくる。
「おはよう」
「おはようございます」
スパイスｙｕｈａｎａは年中無休である。
社員は、週に４日働く。シフト勤務をしている。残業などはない。
「カサブランカだけど」
「飛行機予約した方がいいですか？」
リニがコーヒーを持ってやってきた。
「明日日帰りだから後で清算します」
「ジニもですか？」
「そうだ」
「わかった」
「イエスタデイは良かったらしいけど」
「早いな」
「下にいますから呼んで下さい」
「わかった」
湯花邪無とジンは、カサブランカに行くことにしている。こっちはプライベートだ。
「明日のチケットを今買うから」
「今晩キャンセルする」
「わかった」
カサブランカまでは50分だ。日帰りにしないとおかしい。

湯花邪無は３回目の大学の講義のテーマを考えることにした。２回目はレッドペッパーだ。レッドペッパーは、リーマイが手伝ってくれているので、もう出来上がっているも同じである。
３回目11月１日を何にするかだ。
ターメリックがいいのではないかと思った。
ジンは、監査法人から呼ばれていると言って出かけた。お昼までに帰ってくるかどうかわからない。
インドネシアでは、クニッツというインドネシア原産のターメリックがある。日本ではウコン。春ウコント秋ウコンがある。
原産はインドで、生産も輸出もインドが１番である。カレーのスパイスでは欠かせない。
スパイスｙｕｈａｎａでもたくさん売っている。ｙｕｈａｎａの森でもたくさん栽培している。
「ミスタージャムごはんだけど」
「わかった」
「ジンは監査法人で食べるそうです」
「わたしと食べてくれってメール来ました」
「それはうれしい」
「ミーゴレンだけど」
「わかった」
お昼はみんなで食べる。担当は持ち回りになっているので時間通りに食べないと仕事にさしつかえる。
19時に、湯花邪無とジンは、ジャカルタ空港にいた。
「ちょっと明日のチケットをキャンセルしてくる」
「ええ」
「ミスタージャムもキャンセルしたけどそのチケットで清算して」
「わかった」
結婚してしまえばなんともないことなのだが、スパイスｙｕｈａｎａのみんなには内緒にしている。
ジンがいるのに、華美美鈴に心が揺さぶられる自分をどうしたものかと悩んでしまう。ジンを愛していることは確かなのだ。

ジンと湯花邪無は、ＦＡＲ通りのホテルにチェックインをして、モロッコ料理店に出かけた。
ジンは、モロッコ人のように装った。
カフタンワンピースドレスのお店に向かった。
藍色のドレスにした。シューズも合わせた。
「キレイ？」
「最高だ」
「うれしい」
ＦＡＲ通りのモロッコ料理のレストランだった。
ゆっくりした時間が流れる。
９月７日だった。日曜である。
「わたし昨日のドレスで行ってもいいかな〜」
「どうぞ」
「でも交渉でしょ？」
「ジンが交渉してください」
「なんで？」
「ジンが社長だと言うから」
「スパイスｙｕｈａｎａでも社長やってる」
「ミスタージャムがいるから安心してやってる」
「この通りにあるんだけど」
「こんな立派な通りでスパイスのお店やっていけるかな〜」
「ｙｕｈａｎａのスパイスは高品質のスパイスだから」
「ここです」
７階建てのビルの１階だった。
「２階も借りる予定だ」
「２階はネット販売の予定だけど」
「スパイスｙｕｈａｎａのようね」
「おはようございます」
主人が待っていた。
「イスマルおはようございます」
「よくいらっしゃいました」

「スパイスｙｕｈａｎａカサブランカの社長のジンです」
「モロッコ人ではないのか」
「ジャカルタの人だ」
「キレイだ」
「モロッコ人かと思った」
「言葉は英語でいいのか」
「そうだ」
「いつから引き継いでくれるのか」
湯花邪無は黙っていた。
「都合がありますか？」
ジンが話しはじめた。
「２階に住んでいるが引っ越しをやっている」
「９月中には引っ越す」
「１階と２階を貸していただけるのですか？」
「そうだ」
「イスマルさんはどうされるのですか？」
「ここの賃料で静かに暮らす」
「引退するのですか？」
「オリーブオイルをここで販売をはじめてビルにもなった」
「78になったから静かに暮らしたい」
「３階から７階はオフィスですか？」
「貸している」
「このビルはイスマルさんのものですか？」
「そうだ」
「条件がある」
「オリーブオイルの販売の仕事は引き継いで欲しい」
「これは譲れない」
ジンは湯花邪無の顔を見た。
湯花邪無は少しうなずいた。
「賃料のことだけど」
「３階から７階の賃料だ」

「１回と２階は高くしたいがオリーブオイルを引き継いでくれるのだったら３階と同じでかまわない」
ジンは、ジャカルタのスパイスｙｕｈａｎａよりも安いことに驚いた。すごい通りにあるのに。
「10月１日から少し改装していいか」
「９月末に引き継ぐのか」
「そうなる」
「11月１日から営業をはじめる」
「スパイスとオリーブオイルの販売店だ」
「わかった」
「オリーブオイルの商品を教えてください」
「賃料はいいのか」
ジンは湯花邪無の顔を見た。
「かまわない」
「契約をしてもいいのか」
「サインをして帰る」
イスマルはうれしそうにオリーブオイルの取扱商品の説明をはじめた。
驚いたことに、イスマルは、広大なオリーブ畑を持っていてｙｕｈａｎａの森モロッコにテニスコート１０００枚分の土地を売ったアマルから、オリーブオイルを買っていた。
「アマルは今日14時に会えるそうだ」
「30分もらった」
「引継ぎのあいさつをやってくれ」
「わかりました」
食事の用意をするから少し時間をくれとイスマルに言われて、湯花邪無とジンは、ＦＡＲ通りに出た。暑い。
「アマルへの支払いはまだやっていないが」
「今日決めないといけない」
「９月末20万ドルでいいのか」
「柴田五郎さんへの支払いも９月末でいいのか」
「30万ドルだ」

「会えるのか」
湯花邪無は、16時に柴田五郎と会う約束をした。
「契約書にサインすると言ったから頼む」
「わたしがサインするのか」
「スパイスｙｕｈａｎａカサブランカ社長にしてくれ」
「まだ社長ではないが」
「明日社長にする」
「ｙｕｈａｎａの森モロッコは40万ドルの資本でいいか」
「スパイス工房モロッコは50万ドルの資本でいいか」
「かまわない」
「またすぐにカサブランカに来て預金をつくる」
「会社も設立する」
「スパイスｙｕｈａｎａカサブランカの資本は10万ドルでいいか」
「わかった」
「10月１日に会社ができるようにする」
「わかった」
14時ピッタリに、湯花邪無とジンとイスマルは、アマルの豪邸にいた。
「ミスターユハナ久しぶりだ」
「イスマルのオリーブオイルの販売店を引き継ぐそうだけど」
「社長のジンだ」
「モロッコ人ではないのか」
「ジャカルタだ」
「カフタンが似合う」
「ありがとうございます」
「土地を譲っていただいたお支払いですが」
「20万ドルで９月30日に振り込ませていただきます」
「すぐに秘書らしい男がやってきて書類を渡した」
「支払日を入れてサインもしてくれ」
「ジンは躊躇なく支払日を入れてサインをした」
「２通つくっている」
「わかりました」

「いつから引き継ぐのか」
「10月１日だがお店を改装して11月１日にオープンする」
「オリーブオイルは改装中も販売している」
「承知した」
「ジャカルタでもオリーブオイルを売ってくれるとありがたい」
「検討する」
ジンは、テニスコート１０００枚分のｙｕｈａｎａの森モロッコを見て歩いた。
16時に、ジンと湯花邪無は柴田五郎のオフィスにいた。もう撤退するのだ。整理をしていた。
「スパイスｙｕｈａｎａカサブランカの社長のジンです」
「よろしくお願いします」
「カサブランカの人ですか？」
「ジャカルタです」
「カフタンが似合います」
「契約書をつくっておきました」
「私どもの社長のハンコも捺してあります」
「サインします」
「９月末に30万ドルを振り込ませていただきます」
「よろしくお願いします」
湯花邪無とジンは、柴田五郎の会社から買ったスパイス工房モロッコを見に行った。
「ｙｕｈａｎａの森モロッコで栽培してないからここの工房も稼動しないのね」
「エミルと相談して欲しい」
ジンは、その場でエミルに電話をした。
「うん〜30万ドル９月末で支払う」
「クミンとパプリカとターメリックとシナモンはステファノとアイチャが近くの農場で探しているから」
「ｙｕｈａｎａの森モロッコで栽培できるまで他の農場のスパイスを買うの？」

「手配している」

「ここのスパイス工房モロッコは？」

「クミンとパプリカとターメリックとシナモンの機械を持ち込む」

「レッドペッパーの機械はそのまま使うつもりだけど」

「資本はいくらにしてくれたの？」

「50万ドル」

「30万ドルは支払いね」

「20万ドルも使わないで機械買える」

「工房もキレイにできる」

「明日ファティマと一緒にモロッコに行くから」

「ファティマって？」

「ジャカルタのスパイス工房にいるモロッコ人」

「オンナ？」

「アイチャもだけど将来はモロッコの人でやった方がいいから」

「わかった」

「明日お願い」

「聞いてた？」

「ええ」

「いいよね」

「ええ」

「電話してよかった」

「ええ」

「帰ろう」

「ええ」

「今日はどうするの？」

「タベット」

「ごはんつくろう」

「明日は料理教室ね」

「ええ」

「新宿ね」

「ええ」

華美美鈴ジャカルタ港で拉致

「わたしジャカルタと東京の社員全員にメール出したから」
「今ですか？」
「決まったことだからみんなで協力しないといけない」
湯花邪無は、ジンが全員にメールをした内容を読んだ。
そして、ジンのスパイスｙｕｈａｎａの社長と水野まさみのスパイス湯花の社長就任を、全員に知らせた。
湯花邪無は会長に就任した。
まだ湯花邪無の個人経営のようであるが、スタイルは先端をいっていると思っている。
「承知しました」
「水野まさみからすぐに返事がきた」
「わたし先に行くから」
「わかりました」
「清算するの間違えないでよ？」
「わかった」
湯花邪無は、アースカーで、ジャカルタのライブテレビを見た。華美美鈴は、13日に月に向かう。今日は９月８日である。ジャカルタに来るのは月から帰ってからだろうか。どこにも情報がない
華美美鈴を検索してみた。
出てくるのは、月へ向かう準備状況だけだ。
「おはよう」
「おはようございます」
朝送ったメールを全員見ているのだろうが、湯花邪無のことを社長という人は誰もいなかった。当然会長とも言わない。ミスタージャムと呼ばれている。
「ハーブティーにしました」
「ありがとう」

リニがやってきた。すぐに料理教室に行くことをわかっている。
「ミスターユハナおはよう」
ミナの月水金の料理教室は８人なのだが、ミナは、湯花邪無にしかあいさつしない。それをみんなもよくわかっている。
「就職は決まったのか」
「主夫もできるように修行中だから」
「オトコはお金も稼がないとダメだ」
「わかっている」
ミナは、湯花邪無よりも少し年上である。時々姉のような言い方になる。
「今日はテンペです」
インドネシア風納豆である。湯花邪無も知っていたがつくったことはない。
「テンペだけではお昼にならないからナシゴレンをやってもいいか」
ラエルが聞いた。
「ナシゴレンのレシピも配る」
ミナは、みんなが自分から提案することに満足げだった。
「ミスターユハナはお昼はどうしているのだ」
「東京に行くからジャカルタ空港で何か食べる」
「料理教室のときは何も食べない」
「料理教室の料理でいいのか」
「今日なんかはありがたい」
「ナシゴレンのことか」
「テンペだけではお昼にならない」
「ミスターユハナはジャカルタ人なのか東京人なのか」
「両方だ」
「失業中なのによく移動できる」
「少しだが蓄えがある」
テンペはインドネシア風の納豆なのだが糸をひかない。
片栗粉で固めるので、日本の納豆の食べ方とは異なる。
「ミスターユハナは料理が上手になってきています」
「料理は見た目も大事です」
「キレイになってきています」

湯花邪無は、最近、ミナに褒められることが多くなった。
「ただいま〜」
「おかえりなさい」
コーラスのように声が揃うことを不思議だと思う。
「今日はなんだったんだ」
「テンペにナシゴレンだ」
「じゃ〜お昼はいらないのか」
「すぐに新宿に行く」
「それで褒められたのか」
「おいしいと言われた」
「今度やってもらおうかな」
湯花邪無は、ジャカルタ空港までアースカーでインドネシアライブテレビを見た。
華美美鈴がジャカルタに来るはずである。
アースバッテリーのニュースはない。
アースバッテリーを検索した。
依然として、華美美鈴の月への飛行が話題になっている。すごい数である。
９月13日だ。こんな時期にジャカルタに来るのだろうか。もちろん、ジャカルタ行きのニュースなどない。
「こんにちわ〜」
「こんにちわ〜」
「何かありますか？」
「順調だ」
「わたしの仕事で変わるところはあるのですか？」
「何もない」
「水野まさみさんはいままでも社長をやってくれていた」
「足りないところがあったら言って欲しい」
「わかった」
「届け出の書類を揃えてください」
「承知しました」
「かなりたくさんあります」

「そうでしょうね」
「やっておきます」
「お願いします」
「月に１度はジンと相談したいけど」
「どうぞ自由にしてください」
「わかった」
湯花邪無は、ハーブの資料を読んでいた。
エミルから電話があった。
「明日ステファノとアイチャにｙｕｈａｎａの森モロッコに来てもらってクミンとパプリカとターメリックとシナモンを農場から買ってもらうことにした」
「ステファノとアイチャは準備できているのか」
「まだ契約はしていないらしいが相談はできているらしい」
「機械は９月15日にジャカルタから持ち込む」
「９月15日から試作をしたい」
「レッドペッパーは機械も動くことがわかったのですぐにできるが畑を管理しないといけないのでアイチャに任せる」
「アイチャもファティマもモロッコ勤務にしないといけない」
「どうするのだ」
「ジンと話した」
「アイチャとファティマのマンションをジンが明日一緒に探す」
「わかった」
ｙｕｈａｎａのみんなは足が速い。
北千住のマンションは寂しい。
何か料理をつくればいいのだが、何もする気がしない。近所のスーパーマケットで刺身を買う。ごはんも買うようになった。味噌汁はインスタントを買う。
こんな食生活は良くない。
和食も研究しないといけないと思う。
「私が自分で料理できそうな和食のレシピを頼みたい」
「時間をかけないで調理できる料理がよい」

湯花邪無はジニにメールをした。
９月９日火曜日だ。
湯花邪無は羽田までのアースカーでアースカーを検索していた。
相変わらず、華美美鈴の月飛行の情報ばかりである。華美美鈴のジャカルタ訪問などどこにもない。
「おはよう～」
「おはようございます」
「ジンはモロッコに行きました」
「わかりました」
「コーヒーか」
「ハーブティーだ」
「珍しい」
「最近おいしいと思うようになった」
「ハーブティーは前からおいしい」
「今日はリーマイと相談があるからスパイス工房に行きます」
「わかりました」
「ハーブティーを飲んでからにして」
「わかった」
ジニからメールが来た。
「ごはんはアース炊飯器にしてスマホからスイッチを入れる」
「無洗米に水を自動で足して自動的に炊飯する」
「スーパーマーケットのごはんを買わないように」
「鍋はアース鍋にして冷凍室に下ごしらえして入れておく」
「帰ったらアース鍋を冷凍庫から出してスイッチを入れる」
「自動的におかずができる」
「アース鍋のメニューは、肉ジャガ、餃子、野菜炒め、スパニッシュオムレツ、マーボ豆腐、すき焼き、カキ鍋等」
「アース鍋は５個くらい買って冷凍庫に入れておくと便利」
「調理して冷凍庫に入れるまでは自分でやらないといけない」
湯花邪無はネット通販を調べてアース炊飯器を買った。お米の収納庫と水が繋がっている炊飯器だ。

こんなものが出ていることを知らなかった。
これだったら、羽田に着いたらスマホからスイッチを入れればよい。簡単なことだ。
このアース鍋はなんだろう。
冷凍庫に５個くらい入れておけだ。
１人か２人用だ。器のような鍋である。
こんな便利なものがあることを知らなかった。
これはまずい。
５個買っておいた。
「ミスタージャムは出なくていいのか」
「すぐに出る」
リニが顔を見せた。
「おはようございます」
「おはようございます」
「エミルはモロッコです」
「今日はリーマイに用事があってきました」
「呼びますか？」
「私が行きます」
「ミスタージャムはここでごはんですか？」
「お願いします」
ラニがハーブティーを煎れてくれた。
「リーマイの部屋まで持っていく」
「ありがとう」
「リーマイおはよう」
「唐辛子の種類を集めています」
「写真です」
トリニダードスコーピオン、ハバネロ、アヒリモ、アヒチーノ、インディアンペッパー、ベトナムオレンジ、青唐辛子など、写真が用意されていた。
「こっちは中国で栽培されている唐辛子です」
「すごい種類があります」
「唐辛子はスパイスでもあるけど野菜でもあります」

「スパイスの森で栽培しているのは10種類だけです」
「ペッパーにしてコショウなどと一緒に販売しています」
「野菜としては販売していません」
「栽培中の写真は10種類ですか？」
「ハバネロはあります」
「10種類あります」
「中国での栽培は15種類くらいやって野菜としても販売しないといけない」
「お昼から栽培の写真を撮りに行きましょう」
「朝はペッパーにする工程が撮れます」
「１種類でいいですよね」
「ええ」
「レッドペッパーの歴史の部分はどうするのですか？」
「リーマイにナレーションを読んでもらう」
「私も撮るのですか？」
「少しは顔を見せた方がリアルになると思う」
「唐辛子の専門家がナレーションしている感じになるから」
「大学の講義だからミスタージャムがナレーションやった方がいいのではないですか？」
「リーマイの方が美人だし華がある」
「みんな私の原稿だと知っているから」
「それだったらわかりました」
９月９日だったが、10月１日の湯花邪無のスパイス学の原稿は準備ができた。30分は、リーマイが、唐辛子の種類や唐辛子が世界的なスパイスになったいきさつをナレーションした。
18時になった。
「リーマイありがとう」
「わたしも勉強になったし中国での唐辛子の仕事を本気でやりたい」
「これ食事券だけど、カレと一緒に出かけてください」
「ミスタージャムは？」
「私は今日は約束がある」
「仕方がないからカレと行きます」

湯花邪無は、今日は、ミナと約束していた。
料理学校に向かうアースカーにジンから電話があった。
「アイチャとファテマのマンションの候補を決めました」
「２人ともモロッコなんだけど仕事場に近いマンションに住みたいって言うから」
「聞いてますか？」
「聞いてる」
「エミルとファティマは人を募集しました」
「大丈夫ですか？」
「唐辛子の工場に勤めてた人に電話してる」
「なるほど」
「ステファノとアイチャは農場を走り回っています」
「ｙｕｈａｎａの森モロッコもあるからすごく忙しい」
「人を募集しています」
「わかった」
湯花邪無は、18時に料理学校に着いた。
ミナはパーティードレスを着ていた。
「私が似合わない」
「ミスターユハナはイケメンだから何を着てもグッド」
「ゆっくり行って時間があるから」
「何時だ」
「19時」
「話す時間がながくなっていい」
「ミナが支払いに来ても会計は終わっていると言ってくれ」
こんなメモをキャッシャーに渡した。
キャッシャーは、ミナを見て確認をした。
湯花邪無はうなづいた。
「この前のホテルと違うけど」
「こっちの方が料理はおいしい」
「フランス料理もやっているけど」
「わたしはイタリアンも好きだけど今日はミスタージャムの指導に来てい

る」
「だからインドネシア料理なのか」
「そうだ」
なかなか料理が運ばれてこない。
時間が早かったせいだ。
「ビールもあるが」
「冷たい紅茶がいい」
「ミスターユハナは謎だらけだけど」
「東京ではどこに住んでいるのだ」
「北千住だ」
「マンションか」
「アパートだ」
「東京でもアースカーに乗っているのか」
「そうだ」
「友達のだ」
「ジャカルタでも友達の車なのに」
「失業中だから」
ウソはつきたくないのだが、会社の社長などとは知られない方が友達になれる。
「どうして結婚しないのか」
「相手がいない」
「わたしも１人だけど」
「ミナはキレイだし技もあるから私では似合わない」
「ミスターユハナくらい食べさせることができる」
「ありがたいが私は自由が欲しい」
「ミスターユハナはどういう生き方をしてきたのだ」
「ごくフツウだ」
湯花邪無は、ある線から深入りされないように注意している。
ミナは、料理の解説者のようによく話した。
そして９時になった。
湯花邪無は、トイレにたつフリをして支払いを済ませた。

「そろそろ９時だ」
「まだ早い」
「またおいしい料理を紹介してくれ」
湯花邪無はタナアバンのチグリ川沿いのミナのマンションまで送った。
「このまま帰るのか」
「そうだ」
「おいしい紅茶がある」
「明日料理学校がある」
ミナはシブシブマンションに入って行った。
「今日はミナとごはんなのね」
「そうだ」
「なにか？」
「コーヒーが欲しい」
「大丈夫？」
ジンは、湯花邪無がミナにアプローチされていることを知っている。
「今のところ大丈夫？」
「ずっと大丈夫だ」
「お酒は飲んでないの？」
「紅茶だ」
「ホテル？」
「そうだ」
「部屋を予約してたりしないのか」
「私に嫌われたくはないと思う」
「レストラン？」
「インドネシア料理を教わっている」
「私が支払っている」
「まだ続くのね」
「続いても何もない」
ジンは、珍しくいろいろ聞いてきた。
湯花邪無は、ジンのことを何も知らないし何も聞かない。
仕事のパートナーでもある。

何があっても信じようと思っている。
９月10日だった。
「たまごおいしくできたから」
「食べます」
「おいしそうなパンがあった」
「今日は料理教室で新宿ね」
「ええ」
「スパイス湯花の誕生会でしょ？」
「そうだ」
「なんなの？」
「インドネシア料理だと思う」
「インドネシアの舞踊と」
「ジニがやってるのか」
「牧野由香とやっていると思う」
「楽しそう」
「今日はジンはなにかあるのか」
「わたしはモロッコからの連絡を待ってる」
「わかった」
「先に出て」
「わたし片づけて行くから」
湯花邪無は、アースカーでインドネシアライブテレビを見た。アースバッテリーのことはニュースになさそうだった。アースバッテリーを検索した。どこを探しても、華美美鈴のジャカルタ行きなど１行もない。
「おはよう」
「おはようございます」
「ジンはまだ来ていません」
「わかりました」
「料理学校ですか？」
「そうだ」
「今日のスパイス湯花の誕生会は何ですか？」
「インドネシア料理と舞踊だ」

「それは楽しそう」
「ハーブティーにした」
リニは元気そうだ。
「ミスターユハナ昨日はごちそうさま」
ミナが湯花邪無にごちそうさまと言ったことに料理学校の仲間は驚いた。
ミスターユハナは失業中である。
「私がインドネシア料理を教わっている」
「勝手に支払いを済ませるのはよくない」
「教わる身だから許してほしい」
「アルバイトもしてないのか」
「少しの蓄えがある」
みんなはミナと湯花邪無の話がおもしろい。
「今日は何だ」
湯花邪無からこう言わないと、ミナと湯花邪無の２人の話になってしまう。
「スイーツやりますコラツ」
「レシピを配ますから買い物に行ってください」
スイーツははじめてである。
「わたしに買い物をさせてくれ」
もう１人の主婦であるナミラが言った。ナミラは、裕福な主婦で何もしないサナの影に隠れているのだが、はじめて自分で手を挙げた。
「やったことがあるのか」
「ないから教わっている」
近所のスーパーマーケットでココナツミルクとサツマイモを買った。シナモンとラム酒を買った。
「砂糖も買っておいた方がいいんじゃないか」
「これ沸かすのかな〜」
「ミナに聞かないとわからない」
最初にサツマイモを茹でた。
「ミスターユハナは皮はどうしたのだ」
「剥くのか」
「そうだ」

湯花邪無は火を止めてサツマイモの皮を剥いた。
「ミスターユハナは料理をしたことがないのね」
ミナは驚いたように湯花邪無を見た。
「ミスターユハナの半分をください」
「わたしの半分を食べてみて」
７人の仲間はほとんど聞いていない。自分達で交換して食べる。
「ミスターユハナは料理には慣れてないけどおいしくなってきました」
「わたしのはどうですか？」
「最高だ」
ミナは満足げだった。
「ただいま〜」
「おかえりなさい」
「すぐに新宿ですか？」
「何か変わったことはありますか？」
「順調だ」
「コーヒーですか？ハーブティーですか？紅茶ですか？」
「今はコーヒー」
「承知しました」
リニが駆け上がってくる。
「今日はなんだ」
「スイーツだ」
「コラツ」
「おいしくできたのか」
「熱いコラツを食べた」
「シナモンとラム酒が効いている」
湯花邪無は、おそばが食べたくなった。
羽田までガマンした。
「あなたは時間通りの飛行機に乗っている」
有村聡と真野裕也が待っていた。
「何か情報はないか」
「私はスパイスの仕事をしている」

「我々はジャカルタに不案内だ」
湯花邪無はそば屋に入った。
有村聡も真野裕也もそばを頼んだ。
「華美美鈴はホントにジャカルタにやってくるのか」
筆談をした。
「今日も佐野次郎と飯野修はジャカルタに行った」
ジャカルタ港の高速船にいるに違いないと思ったのだが、有村聡と真野裕也には黙っていた。
「何かあったら連絡をくれ」
「あなたたちがジャカルタには行かないのか」
「出張の許可がもらえない」
「華美美鈴がジャカルタに行く日がわからない」
今のところ、誰もわからないのではないかと思った。そもそも、９月13日に、華美美鈴は、月に飛行するのだ。今日は９月10日である。佐野次郎と飯野修がなぜジャカルタに行ったのかわからない。
「こんにちわ〜」
「こんにちわ〜」
「ミスタージャム今日のことは知っていますか？」
「誕生日会ですか？」
「よろしくお願いします」
「牧野由香とジニはもう出かけています」
「準備ですか？」
「料理をはじめています」
「山井生江さんと次郎さんも来ます」
「わかりました」
「今日はスパイス教室はやらないのですか？」
「今からはじめますが料理はしません」
「ミスタージャムのコショウのスライドを流します」
「わたしが説明します」
「なるほど」
湯花邪無は、佐野次郎と飯野修がジャカルタに入っていることが気になって

いた。特別のルートがあって、２人は、華美美鈴のスケジュールを知っているのだろうか。
「ミスタージャムそろそろ出ます」
「わかりました」
「ミスタージャムのアースカーでいいですか？」
「どうぞ」
「みんなはバスで行きます」
「わかりました」
「こちらには帰ってきません」
「ホテルで散会します」
「わかりました」
「山井さんは今晩はどうしているのですか？」
「長野に帰るそうです」
「わかりました」
「締めますけどいいですか？」
「もう誰もいないのですか？」
「バスは出ました」
９月の誕生会の社員は５名だった。全員女性である。
湯花邪無も水野まさみもあいさつをしない。
牧野由香が進行させる。
５人にお祝いを渡す時だけ水野まさみが壇上に上がる。
山井生江と次郎がやってきた。
「おいしいごはんをありがとうございます」
「毎月やっていますので予定をしておいてください」
「みなさんと顔を合わせることがないので助かります」
「50人足らずだからみんなに顔を覚えてもらうといいです」
「そうですね」
ジニからインドネシア風の料理のとりわけ方の説明があった。中央にごはんがあって周辺におかずをたくさん乗せる。
ごはんは、チャーハンもあれば白いごはんもありココナツミルクで煮たごはんもあった。

ジャカルタのスパイスｙｕｈａｎａと決定的に異なるところは、お酒があることだ。
すべて赤坂のインドネシア料理店がやってくれる。
踊りもお店のダンサーである。
９月11日だった。
湯花邪無は少し飲み過ぎたと思った。
ついついみんながやってきて話がはずんでしまう。
お酒の量も増える。
羽田でおそばを食べようと思った。
シャワーをしてヒゲをあたってそのままアースカーに乗った。
「今日ジャカルタ港に行きます」
「はじめて船にアースバッテリーを搭載した船が進水します」
「小さな船ですがわたしにとっては興味ある出来事です」
湯花邪無の心臓は一気に高鳴った。
気がつかなかった。
佐野次郎と飯野修が高速船に入って行った時に気がつけばよかった。
マスコミがこぞってジャカルタ港に向かう。
湯花邪無は進水式がどこであるのか検索した。
11時10分だった。ジャカルタ港の西側である。
華美美鈴が何時の飛行機に乗ったのかわからない。
多分、ニューヨークの空港からだから、もうジャカルタに着いているかもしれない。
ジャカルタ空港だった。
「ミスタージャムどこですか？」
「ジャカルタ空港を出た」
「華美美鈴がｙｕｈａｎａのスパイスを買いに来ている」
「ジンもまだ来ていない」
「15分で着くからリニのハーブティーを出しておいてくれ」
鳴きそうな声でリニから電話があった。
こんなときでも、アースカーはスピードが出ない。
湯花邪無は通りにアースカーを止めてお店に入った。

瞬間、華美美鈴と目が合った。
サマンサとジムと２人の警備員がいた。
「ｙｕｈａｎａのスパイスのファンだと聞いています」
「わざわざ来ていただいてありがとう」
「明後日月に行きますが、それまでにあなたのスパイスで食事をしたかった」
「気をつけてください」
マスコミも誰もいなかった。
華美美鈴がここにいることを誰も知らない。
華美美鈴は、ジムに背中を押されて車に乗り込んだ。
５人のチームだ。
アッという間だった。
モロッコにいるジンから全員にメールがきた。
「華美美鈴さんがスパイスｙｕｈａｎａでスパイスを買ってくれたことは、華美美鈴さんの安全のために、内緒にしてください」
「メール見ました」
「どうしたのですか？」
「アイチャとファティマのマンションの契約に来た」
「わかりました」
「お昼過ぎには帰るから」
「わかりました」
10時になった。
「大学に行ってきます」
「お帰りですか？」
「電話をします」
「わかりました」
湯花邪無はアースカーをジャカルタ港に走らせた。
お店から遠いわけではない。
とりあえず、現地を見て考えようと思った。いつもの湯花邪無のやり方である。
港から１キロ手前に車を止めた。

湯花邪無は帽子をかぶってジャンバーとジーンズに着替えた。
ライター風にした。
すでにマスコミのみなさんで人ごみになっていた。
小さな造船所だか修理工場だかわからない工房風の建物から、高速船のような船が飾りを付けていた。
華美美鈴が、ロープをカットするのだろう。
華美美鈴のことだ。高速船に自分で乗ってしまうだろう。
こんな状態だと危ないと思う。
サマンサとジムと２人の警備員を探した。
もちろんどこにも見えない。
サマンサも湯花邪無を見ても、すぐにはわからないかもしれない。変装しているわけではないが、雰囲気がゼンゼン違う。
11時10分になって、車がやってきた。
市長の車だった。
そして華美美鈴の車もやってきた。
狭い場所である。人で溢れてしまう。
「世界ではじめてアースバッテリーで動く船をジャカルタで開発できたことは誇りである」
こんなあいさつを市長がした。
「それでは華美美鈴さんにテープカットをお願いします」
華美美鈴は、あいさつを何もしなかったが、メッセージは伝わっている。
佐野次郎と飯野修がどこにいるかわからない。
帰りの空港で華美美鈴を拉致するのではなくて、ここで拉致するのだ。間違いない。
羽田とは違ってサマンサもジムもいるのだ。簡単には拉致できない。
カメラマンから多くの注文があって、何度も斧を振り上げて写真を撮った。
「それでは本番です」
「華美美鈴さまお願いいたします」
華美美鈴は、躊躇なく斧を振り下ろした。
船は滑り降りて水に入っていった。ゆっくりである。
大きな拍手が上がった。

エンジンがかかるかどうかである。
いままでの船のエンジンとは全く異なっている。
高速船がやってきて華美美鈴が乗り込んだ。
思ったとおりである。華美美鈴だと、アースバッテリーの船に乗り込む。
湯花邪無は、佐野次郎と飯野修が入って行った高速船に向かった。４００メートルは離れている。
今進水したアースバッテリー船に較べたら大きな高速船である。これだと、日本まで飛んでいってしまいそうだ。
船首で２人がタバコを吸っている。
湯花邪無は船の階段を下りた。部屋が３つある。キッチンとシャワーなどの部屋と大きなリビングと小さな客室のような部屋だ。
もし華美美鈴の拉致に成功したならば、この部屋に軟禁するに違いない。そして日本へ向かうのだ。
湯花邪無は、４畳くらいしかない部屋のベッドの下にもぐり込んだ。隙間が15センチくらいしかない。ベッドが膨らんでいるのではないかと思ってしまう。
30分くらいこのままだろう。
もし華美美鈴がここに拉致されても、船が出発するまでに脱出しないといけない。公海上で見つかったら、海に投げ込まれてサメのエサになってしまう。湯花邪無は何キロも泳げない。
こうまでして体が動いてしまうのはなんだろう。
湯花邪無は起き出して１ヶ所ある窓を調べた。喫水よりかなり上にある。リビングに出てドライバーを探した、
なかなか窓のネジを緩めることができなかった。当たり前である。緩んだら浸水してしまう。
キッチンに出て油を持ってきて振りかけてみた。
もう10分近くかかっている。
やっと１つのネジが緩んだ。
ネジが12もある。
湯花邪無は諦めようと思った。他の方法を考えないといけない。しかし、外からカギをされたらどうにもならなくなるのだ。

最後の12個目のネジを緩めている時に、船の外が騒がしくなった。
湯花邪無は慌ててベッドにもぐり込んだ。
窓が外せるかどうか確認していない。
「この船を追ってくるから早く移せ」
華美美鈴に間違いない。
どのようにしてここまで拉致したのだろうか。
ドカドカと誰かが乗り込んできた。
「発車してくれ」
エンジンがかかった。
部屋が開いて華美美鈴が入ってきた。
「狭いがここにいてくれ」
「日本に行くのか」
「高速船なので短い時間だ」
「わたしは月に行かないといけない」
「中止するメッセージを出してくれ」
「みんな安心するから」
「カギをするからトイレだったら言ってくれ」
佐野次郎と飯野修は、カギをしているようだった。
湯花邪無は、船が動きはじめたと思った。
早くしないと湯花邪無は泳げない。
「アッ！」
一瞬華美美鈴は声を上げた。
湯花邪無は黙って12本目のネジを外しにかかった。エンジンは静かだった。
まだ湾の中を目立たないように静かに走っているのだろう。
12本目のネジを外して、ドライバーで窓をこじ開けると、窓は、外れた、床に落ちて大きな音がした。
湯花邪無は心配した。
何も起こらなかった。
「泳げますか」
華美美鈴は、運動系の学校出身者だ。
問題は、小さな窓を通れるかどうかである。

華美美鈴は着ているものが少ないがフォーマルである。
上向きで頭から出ていった。デッキに誰かいたら見つかってしまう。スクリューに巻き込まれるのも心配である。
気にしている湯花邪無を尻目にアッという間に海に飛び込んだ。足で蹴って遠くに飛んだ。
湯花邪無はジャンパーを海に投げ込んだ。財布をお尻のポケットにねじ込んで頭から窓に入った。
肩がギリギリだった。腰が心配である。
ダメだと思った。腰が抜けない。
右を少し通して左を少し通した。腹筋がガマンできない。お尻を先に抜いた。多分３分かかった。
高速船は、湾を出ようとしている。堤防を越えようとしている。
湯花邪無は、一気にバックで泳ぐスタートのように、窓から飛び出した。
湯花邪無はクロールだと息継ぎができない。平泳ぎは少しできる。バックだと何分も泳げそうだが、プールで長距離を泳いだことがない。
目立たないようにゆっくりバックで泳いだ。堤防がすぐそばにある。華美美鈴のことは心配はない。運動系の学校出だ。
「得意じゃないのね」
「そうだ」
「よく窓から出れたじゃない」
「自分でも感心している」
「堤防までまだか」
「10メートル」
「どうしてこの船だってわかったの？」
「佐野次郎と飯野修を以前につけた」
「あの２人？」
「あの高速船に入って行った」
「きっとこの船に拉致される？」
「それでベッドの下に？」
「アースバッテリー船からどうやって拉致されたのですか？」
「帰りの船だというので乗った」

「そしたらゼンゼン違いところに向かった」
「堤防に着くから手を頭ぶつけないように」
「ありがとう」
「どこから上がるんだ」
「階段が向こうにある」
「船は帰ってこいないか」
「気づいてない」
湯花邪無はタクシーに乗って華美美鈴の泊まっているホテルに向かった。
多分、イベントは終わって誰もいなくなっているだろう。華美美鈴が拉致されたことなど誰も知らない。
「何階だ」
「８階」
「ズブ濡れの華美美鈴と湯花邪無に誰も気づかない」
「部屋は開いていた」
「サマンサ〜湯花邪無に助けられた」
「みんなに連絡します」
「シャワーしてるから」
「わかりました」
「湯花邪無一緒でいいから」
華美美鈴はキレイだった。
「身体が冷え切ってた」
「こっち来て」
「ほんの10分しか時間がなかった」
「カミサマがチャンスをくれた」
「カミサマありがとう」
「もし月から帰れなくてももう悔いはない」
「湯花邪無ありがとう」
「サマンサです」
「大丈夫ですか？」
「傷があるのですか？」
「湯花邪無の腰が切れてる」

「華美美鈴は？」
「わたしは何もない」
「みんな帰ってきました」
「すぐ出ます」
「バスローブ置いておきます」
「大丈夫ですか？」
「カミサマ今度はベッドにしてください」
「腰の傷は痛いの？」
「皮が削れてる」
「出たら治療しないと血が出てきた」
バスタオルが真っ赤になった。
湯花邪無は華美美鈴の身体を調べた。
どこも血がついていない。
「先に出てください」
「血を洗うから」
タクシーに乗ったときは何もなかった。シャワーで温かくなったからかもしれない。
サマンサが大きな貼りクスリのようなものを持ってきた。
「見せてください」
左の尻の皮が剥けている。
「ギリギリ窓から抜けた時ね」
ジムも２人の警備員も何が起こったのかわからない。
サマンサは湯花邪無の傷近くを押して聞いた。
「中が痛くはないですか？」
「なんともない」
「歩いてみてください」
警備員がバスローブを取りに行った。
「フツウに歩ける」
「じゃ〜これを貼っておきます」
「血も止まります」
「わかった」

「海に飛び込んで泳いで逃げたのですか？」
「そうだ」
「どうして湯花邪無がいるのですか？」
「佐野次郎と飯野修をつけたらあの高速船に入った」
「あの高速船の小さな部屋のベッドの下に隠れてた」
「窓のネジを外してそこから海に飛び込んだ」
警備員がホテルのコンビニで下着とパンツとシャツを買ってきた。
「ここまでアースカーで来たのですか？」
「そうだ」
「止めてある場所まで送ります」
「ありがとう」
「あなたたちはどうするのですか？」
「後１時間で搭乗時間になります」
「フロリダに行って準備をします」
「わたしたちもすぐ出ます」
「じゃ〜気をつけて」
華美美鈴は黙っていた。
言葉を発するとなみだが出そうなのだろう。
「なんとお礼を言っていいのかわかりません」
サマンサとジムがお礼を言った。そして華美美鈴を見た。
「うれしい」
湯花邪無は振り向かないで部屋を出てエレベーターに向かった。

あいしている

「ただいま〜」
「おかえりなさい〜」
ジンは帰っていた。
「どこに行ってたの？」
「大学だ」

「調べ物をしていた」
「電話が通じなかった」
スマホが海水に浸かっていた。財布も見ていないがどうなったかわからない。アースカーで着替えをしたので、ジンにはわからないはずである。
「どうしたの？」
「スマホをトイレに落とした」
「落とした？」
「キレイに洗ったんだけど使えるかどうかわからない」
「かけていい？」
「ああ」
湯花邪無は、この２時間、１度もスマホを見なかった。
電話があったことも気がつかなかった。
「これわたしの電話」
「無視されてる」
「乾かしてたから」
「緊急だったらどうするの？」
「トイレでメールしないようにします」
「みんなには話せない」
「今日はタベットのマンション？」
「ええ」
「明日は料理学校と新宿ね」
「ええ」
今晩困ったことになると思った。
ジンと一緒にシャワーができない。ベッドでもまずいことになる。
サマンサの言うように、血は止まったように思える。
華美美鈴たちは、もうニューヨークに着いたのだろうか。
華美美鈴のぬくもりが残ってしまっている。
ずっと残るだろう。
こんなことでジンとベッドを共にしていけるのだろうか。考え込んでしまう。
「今晩のことはわかってるよね」

「ええ」
「リニとラナンは準備に行ってるから」
「タイ料理にタイの舞踊だから」
「ステファノやアイチャやファティマは帰ってくるのですか？」
「アイチャやファティマはもうモロッコのｙｕｈａｎａの人になっているから帰ってこない」
「引越しもやっていないのでしょ」
「昨日マンションが決まったばかりだ」
「それでも帰ってこないのですか？」
「もうモロッコの立ち上げしか頭にないからジャカルタでタイごはんを食べても落ち着かない」
「そうですか」
「ステファノは一時帰ってくるけど」
16時30分になってバスがやってきた。
「私のアースカーで行きますか」
「わたしもアースカーで行く」
スパイスｙｕｈａｎａとｙｕｈａｎａの森とスパイス工房もみんなが集まった。それぞれバスで迎えに行ってバスで帰ってくる。
「みなさんこんばんわ～」
今日の司会はラナンがやる。
「今日は９月の誕生日の人にお祝いをする会です」
「楽しく愉快な晩ごはんにしましょう」
「今日協力していただいたのは、ここのタイ料理レストランです」
「ここのダンサーの方も全員が協力してくれます」
「レストランは今日はｙｕｈａｎａ専用になっていますのでゆっくり楽しんでください」
「後ほど誕生日の方のお祝いをいたします」
湯花邪無は、尻の皮が剥げているのが気にかかる。
違和感があるのだ。
みんなにお土産がある。９月の誕生日の社員にはお祝いもある。旅行券のような気がするが湯花邪無は知らない。

そして、みんなバスに乗って職場に帰る。まだ20時30分だ。
「わたし先に帰ってるから」
「わかりました」
湯花邪無は、すんなりタベットのマンションに帰れない。尻の皮が削れていることを見られたら。ジンに説明のしようがない。
「ちょっと腰が痛いから温めてきます」
湯花邪無は、ドラックストアーでサマンサが貼ってくれたデカイ貼りクスリのようなものを買った。
「なにしたの？」
「大学の図書館で本を運ぶキャスターとぶつかった」
「交通事故？」
「病院に行ったら貼りクスリを処方してくれたから買って来ました」
「貼ってるの？」
「ええ」
「今晩できるの？」
「どうぞ」
「ああ〜それだったらいいのか」
もう４年になる。
少しの会話で起こるであろう多くのことを表現できる。
気がつかなかったが、シャワーの水でしみてしまう。サマンサが貼ってくれた貼りクスリは、剥がすと痛かった。
血がにじむのではないかと心配になる。
骨や筋肉に異常があるようには思えない。
素早くバスタオルで拭いて、買ってきた貼りクスリを貼った。
「大丈夫？」
「ええ」
「見せて」
ジンは下着を下ろして触ってみた。
「熱あるんだね」
「大丈夫？」
「多分」

「フツウに歩けるの？

「ええ」

「できる？」

「ええ」

「いま元気にならないでいいから」

ジンはさっさとアースレンジに向かった。

９月12日だった。

「腰はどうなの？」

「大丈夫そうだ」

「先に行って」

「料理学校だよね」

「ええ」

「新宿ね」

湯花邪無は、アースカーで華美美鈴を検索した。

華美美鈴がジャカルタからニューヨークの空港に到着して、船へのアースバッテリー普及を訴えている動画が、多くアップされていた。

高速船は難しいのだが、フツウのボートだったらすべてアースバッテリーで船は動く。

新幹線だって動かせたのだから、漁船だってできるのだろう。

それよりも、明日は、華美美鈴は月へ出発するのだ。

「おはよう」

「おはようございます」

「ミスタージャム昨日華美美鈴が帰るとき、ミスタージャムに渡してくれと頼まれた」

「昨日渡せばよかったのだがここの机に置いていたから」

「ありがとう平気だ」

湯花邪無は階段を上がりながらメモを開いた。

「あいしている」

ひらがなだからだれもわからない。

湯花邪無に会えないと思ってメモにしたのだろう。

「リニ昨日の誕生会はグッドだった」

「ありがとう」
「来月もよろしくお願いします」
「もう内緒だけど決めてある」
「ありがとう」
「ハーブティーだ」
「ありがとう」
「料理教室か」
「そうだ」
「ジンはまだ来てないがもうすぐ来ると思う」
「わかった」
湯花邪無は、「あいしてる」のメモを財布にしまった。前回の「あいしてる」のメモは、メキシコシティーの監禁された華美美鈴を助けるために使って行方が知れない。
また何かで使うことがあるかもしれないと思った。
「ミスターユハナおはよう」
「おはようございます」
「今日もスイーツです」
「ルジャック」
「レシピを配りますから買い物をしてきてください」
「わたしが買い物をします」
ナミラが手を挙げた。
ナミラはスイーツをやりたいのだろうか。
ルジャックは果物スイーツである。
「ミスターユハナのルジャックを持ってきてください」
「今日はナミラがガンバッたけど」
「じゅ〜ナミラのルジャックを持ってきて」
「ミスターユハナはわたしのルジャックを食べて」
湯花邪無は仕方なくミナのルジャックを受け取りに行った。
「ただいま〜」
「おかえりなさい〜」
湯花邪無はすぐに新宿に向かうのだ。またすぐに「出かけます」「いって

らっしゃい」になってしまう。
それでも湯花邪無は、必ずスパイスｙｕｈａｎａに１度帰ってくる。
「ジンなにかありますか？」
「腰はどうなんだ」
「忘れていた」
「よくなったのか」
「貼りクスリを貼ってやろうか」
「見られたら説明が難しくなる」
「何かありますか？」
「順調だ」
「出かけます」
「気をつけて」
湯花邪無は、アースカーで華美美鈴を検索した。
華美美鈴が昨日拉致されたことは、どこにも出ていない。誰も知らないのだ。
知っているとしたら、タクシーの運転手だが、まさか華美美鈴とは思わないだろう。
羽田の到着ロビーに、有村聡と真野裕也が待っていた。
「佐野次郎と飯野修がさっきの便で帰ってきた」
「何もなかったのか」
「佐野次郎と飯野修と会ったのか」
「会ってない」
「私は写真をもらったけど佐野次郎と飯野修は私を知らないだろう」
「知らせない方がいい」
「ヤツ等が失敗しているのはみんな湯花邪無のせいだとわかったら湯花邪無が狙われる」
「ありがとう注意する」
「何もなかったのか」
「私は知らない」
「ジャカルタで拉致しようとしたのではないのか」
「２人に聞かないとわからないが華美美鈴は明日月に出発する」

湯花邪無は、真野裕也と有村聡の言っているとおりだと思った。湯花邪無の存在が明らかになったら、湯花邪無が危ない。そのことは、華美美鈴が最も恐れていることだ。自分が狙われるのは覚悟ができているとしても、湯花邪無が狙われることには覚悟ができない。
華美美鈴は湯花邪無と接触することを極力避けているのだ。
「こんにちわ〜」
「こんにちわ〜」
「水野さん何かありますか？」
「順調です」
「今日の料理教室は何ですか？」
「ルジャックだ」
「ルジャックってなんですか？」
「果物スイーツ」
「おいしくできたのか」
「できたと思う」
牧野由香がコーヒーを煎れてきた。
「ミスタージャムこんにちは」
「コーヒーだけど」
「ありがとう」
「今日の17時からコショウの勉強会するんだけど」
「どうせわたしたちだけでやるつもりなんだけど」
「うれしい」
「なんでもする」
「ヒマなのか」
「いつもヒマだ」
「一緒にいて見ててくれないか」
「みんなが調べたことを話すから」
「もし質問があったら答えてほしい」
「私は座っていればいいんだ」
「みんなに連絡していいか」
「何人だ」

「12人」
「わかった」
湯花邪無はうれしかった。

華美美鈴が月へ

９月13日になった。土曜日である。
湯花邪無はずっと気になっていた。
華美美鈴が月に行くのだ。
８月21日に１８２人が乗っていた月連絡船が行方不明になった。ソーラーバッテリーが故障した。とんでもないところに飛んでいったのか何かに衝突したのか攻撃されたのかわからない。
湯花邪無は、月タクシーのアースバッテリーを開発したのだ。月タクシーは地球と月の連絡船ではない。月の中で移動するタクシーのことだ。
連絡船である宇宙船では、やはりアースバッテリーは使いにくい。しかし、今回はアースバッテリーも搭載した。月のアースと地球のアースを自動的に判別する装置をつけているらしい。
そして、月ホテルのアースライティングをアースバッテリーに変更する。
他に別荘マンション棟が３棟に13カ国が研究所を持っている。みんな、月連絡船を利用している。
８月21日の事故以来、月への連絡船は運航していない。
１ヶ月も経ないで華美美鈴が月へ向かう。華美美鈴とスタッフだけらしい。
ライブテレビで中継される。ジャカルタの21時に出かける。
湯花邪無は、いつものように羽田に向かった。今日はずっと緊張しているに違いない。心配である。
９月13日９時にフロリダから出発する。ジャカルタ21時では、タベットのマンションでジンと一緒にいる。ライブテレビで華美美鈴の月へ出発を見ることができない。
あれこれ考えてみたが、難しいと思った。
「おはよう」

「おはようございます」
「明日わたしモロッコに行くから」
「なんですか？」
「ステファノとアイチャがクミンとパプリカとターメリックとシナモンを農場から買うから」
「話はついたんだ」
「しばらくはモロッコの森では栽培できないから買うしかない」
「そうですね」
「キチンと話をしてきたい」
「契約をするのか」
「１年契約にしたい」
「モロッコの森のことは話すのか」
「もちろん」
「騙すようなことはしたくない」
「わかった」
湯花邪無は、アースバッテリーを検索していた。ジンが明日モロッコに出かけることは聞いていた。
８月21日の事故はソーラーバッテリーが原因であることがはっきりしている。今回は、新しいソーラーバッテリーとアースバッテリーを搭載している。安全は担保されているとする専門家と、１８２人もの人が、どこに消えたのかはっきりしない。こんな状態で出かけることは無謀だという専門家もいる。
湯花邪無は、無謀だと思ってしまう。
まず無人で出せばいいではないかと思う。
どうしていきなり有人でしかも華美美鈴が行くのか、よくわからない。
「ミスタージャム、お昼だけど」
「ジンとリニは会計事務所に行っている」
「わたしが一緒に食べるようにジンに言われた」
「それはうれしい」
「いいのか？」
「平気だ」

ラナンがやってきた。
「今日華美美鈴が月に行くんだけど知ってるか」
「そうですか」
「みんなうわさしてる」
「なんだ」
「危ないんじゃないか」
「また事故になるんじゃないか」
「ナシゴレンにスープだ」
「おいしそうだ」
「今晩中継があるんだけど」
「なんだ」
「華美美鈴が月に行く中継」
「そうか」
「みんな見る」
「あの事故は月から帰りだったから行きは何もないかも」
ジンは華美美鈴の話はしなかった。
興味はないのだろうか。
９月11日に、ここにスパイスを買いにやってきたのだ。
興味がないわけはない。
18時になった。
「わたし先に帰るから」
「どうぞ」
21時である。まだ時間がある。湯花邪無は自分が黙りっこくなっていることを知っていた。そうかといって何かを考えても仕方がない。
「ただいま〜」
「おかえり〜」
「なまずのスープとサテだから」
「シャワーしてきます」
「一緒に入って見てあげるから」
「自分でできるから平気だ」
湯花邪無は、さっさとシャワーに向かった。

一緒に入って貼りクスリを剥がれたらまずい。
図書館でキャスターとぶつかったことになっているのだ。
皮が剥がれていることを説明できなくなる。
それにしてもなまずのサテはどうしているのだろうと思ってしまう。
シャワーをしてそっと剥がしてみた。血が出る雰囲気はない。しかし、生皮が剥がれているのだからまだしみる。多分、水道の塩素にしみるのだろう。
バスタオルでキチンと拭いて新しい貼りクスリを貼っておいた。
「どうなってんの？」
「腰ですか？」
「もうなんともないんだけど用心してる」
「医者に行ったって言ったけどレントゲンは撮ったの？」
「筋肉痛だと言っていた」
「そうね〜わたしが乗っても痛がらないもんな」
「なまずのサテってなんだ」
「これ見て？」
「焼き魚にしたものだった」
「なまずのスープに餃子入れた」
「おいしいと思う」
湯花邪無は、黙りっこくなっている自分に、ジンがおかしく思うのではないかと気になっていた。
「ミスタージャムはプールは最近は行かないのか」
「料理教室に通いはじめて時間がなくなった」
「会員は止めたのか」
「北千住の会員は止めた」
「ジャカルタはそのままか」
「そうだけど行ってない」
「明日一緒に行こうか」
「日曜だけど用事があるのか」
「何もない」
「じゃ〜いい？」
「わかった」

「お腹出てきちゃうよ？」
「出てきてるのか」
「自分でわかるでしょ？」
「出てないと思う」
「もう２ヶ月くらい行ってないでしょ？」
「ジンはどうなのだ」
「わたしは熱心」
「１週間に２回は行く」
「なにしてるんだ」
「泳ぐこととラン」
「わたしいい身体してるでしょ？」
「ええ」
「ミスタージャムに嫌われないようにしてる」
「嫌われるなんてとんでもない」
ジンがテレビをつけた。
「華美美鈴さんが月に行くから」
「事故あったばかりなのに」
「まだなのね」
湯花邪無は言い出せなかったのだが、ジンがテレビをつけた。
「行きも危ないのかな〜」
「この前の事故は帰りだった」
湯花邪無はじっとテレビを見ていた。返事をしない湯花邪無を、ジンはおかしく思うかもしれない。
「コーヒーだけど」
「ありがとう」
「カウントダウンはじまった」
そして華美美鈴の乗っている月連絡線が発射した。
「大丈夫でしょ？」
「ええ」
「問題は帰り」
ジンはマンゴを持ってきた。

「どうぞ〜」
「ありがとう」
「ジャカルタの女性の身長はいくらなんだ」
「わかんないけどわたしがフツウだと思う」
「１７３」
「ミスタージャムは２００でしょ？」
「そうだ」
「インドネシアの人も大きくなった」
「みんな豊かだからね」
「そうだな」
急に湯花邪無はおしゃべりになった。
一瞬である。
上がってしまえば、もう映像では捉えられない。

月着陸

「鶏かゆだけど」
ジンはなかなか離してくれなかった。睡眠が不足している。
シャワーに向かった。
どういうわけだか、緊張感のようなものがとれている。
華美美鈴の月連絡船がとにかく事故なく月に向かったからだ。
華美美鈴が月の駅に到着するのは48時間後だ。38万キロある。近いと言えば近い。
９月15日の21時だ。ジャカルタ時間だ。
「わたしお昼からモロッコだから早く食べてスポーツジム行くから」
「睡眠不足だけど」
「わたし忙しい」
10時にはスポーツジムにいた。
「わたしプールにいるから」
「なにするの？」

「ラン」
「わたし１時間で出ちゃうから」
「モロッコ行くからね」
「電話もしないで行くから」
「わかりました」
湯花邪無は走るのはしばらくぶりだった。
お腹がまだ出ていない。
湯花邪無は、スポーツジムのレストランでパスタを食べた。華美美鈴は、月連絡船の中だ。
湯花邪無は、13時にスパイスｙｕｈａｎａに向かった。
「こんにちわ〜」
「こんにちわ〜」
「ミスタージャムが日曜にスパイスｙｕｈａｎａにいるのは珍しいが」
「スポーツジムに行っていた」
「ミスタージャムがカッコいいのはスポーツジムのせいなのか」
「カッコよくはない」
「ジンはモロッコだ」
「リニは今日は休みだ」
ラナンは19歳になって少しはジンの秘書らしくなっている。
「ハーブティーにしたけど」
「ありがたい」
「下にいるから用事があったら呼んで下さい」
ラナンは売場に立つのだろう。
湯花邪無は華美美鈴を検索した。
13日の華美美鈴の出発の映像が多くアップされている。
月連絡船の中の華美美鈴の映像は出てきていない。
事故があったという情報もない。順調に飛行をしているのだろう。
「今晩はタベットのマンション？」
「そうだ」
「モロッコ料理買って行くから」
「一緒に食べられるよね」

「わかりました」
「クミンとパプリカとターメリックとシナモンの農場と１年契約したから」
「数も契約したのですか？」
「数はファティマが連絡する」
「最初の買い入れをしたから」
「試作用なんだ」
「明日スパイス工房モロッコに機械入れるから」
「エミルは明日行くんだ」
「わたしもお昼から行く」
「わかりました」
「遅くならないように帰ってよ？」
「どこですか？」
「空港」
「わかりました」
湯花邪無は、18時になってスパイスｙｕｈａｎａを出た。
「ラナン帰ります」
「何かありますか？」
「順調です」
「わかりました」
「今日はどちらですか？」
「タベットです」
「明日は料理学校と新宿ですか？」
「そうです」
「ジンはモロッコから帰りますけど今日はこちらには寄らないそうです」
「わかりました」
湯花邪無は真っ直ぐタベットのマンションに向かった。
何度も華美美鈴を検索しているが何もない。
「腰はどうなっているのだ」
「だいぶ良くなった」
「ランなんかやったらまずいのではないか」
「すぐにプールにした」

「見せてみて」
「大丈夫だから」
ジンには見せられない。図書館の本を運ぶキャスターとぶつかったことになっている。皮膚が剥がれることなどない。
「シャワーしてきます」
「後で見てあげるから」
「いいです」
もう少しなのだ。ここで見られたくない。皮膚が元に戻るには４週間必要だ。皮膚が真皮から持ち上がってきて最上部の角質層になって剥げ落ちるまで４週間だ。
９月11日に高速船の窓に削られた。左の尻の皮だ。まだ３日しか経過していないが、違和感はなくなったし、ジクジクもしない。何もないのだが皮が剥げた状態であることには違いない。
だから大きな貼りクスリを貼っている。
今日は、なにも貼っていない。
ジンに見られる可能性がある場合は貼っておかないといけない。
早くシャワーをして大きな貼りクスリを貼っておかないといけない。
「タージーンだけど」
「いい匂いね」
「羊の肉なんだけど」
「ごはんもあるから」
「いただきます」
「どうぞ」
「モロッコどうですか？」
「なにが？」
「スキかどうか」
「ジャカルタと似てるからスキだよ」
「宗教も同じだし」
「やっていけるだろうか」
「平気」
「アイチャもファティマもモロッコの人だから」

「それにスパイスとハーブが好きな人達だし」
「ミスタージャムは最近新宿が少ないのではないのか」
「何かあったのか」
「なにもない」
「わたしはジャカルタにずっといてくれてうれしいんだけど」
８月17日に沢風ゆりが北千住のマンションから消えて、なんとなく北千住のマンションに影がある感じがするのだ。もちろんこのことは、ジンには話していない。
なんとなく東京の話が少なくなっているのかもしれない。
９月15日だった。月曜日である。
「わたし今日はお休みだから」
「モロッコに行くんじゃないんですか？」
「休みだけど午後からモロッコ」
「働き過ぎだ」
「週に３日休むのはタイヘン」
「ミスタージャムだって３日は休んでないどころか毎日仕事してる」
「仕事は何もしていません」
「ブラブラしているだけです」
「料理教室に遅れる」
「出ます」
「新宿ね」
「ええ」
「今晩は東京ね」
「ええ」
湯花邪無は、アースカーで華美美鈴を検索した。
これといった情報はない。今晩21時に月に到着する。
東京時間の23時だ。
「おはよう」
「おはようございます」
「ハーブティーだけど」
リニがやってきた。

「ジンは今日はお休みの日ですが午後からモロッコに行きます」
「なにかありますか？」
「順調です」
湯花邪無は、誰もわからないだろうが、心臓が高鳴っているのだ。華美美鈴が月に到着する。到着時もいろいろあるだろうと予想する。
「ミスターユハナおはよう」
「おはようございます」
「新しくできたインドネシア料理のお店から招待状がきました」
「２枚あるから一緒に行きましょう」
「10月９日だけど」
「予定しておいてください」
「せっかく招待してくれるんだから」
「いいですか？」
料理教室の７人は笑って聞いている。
「今日はインドネシアスイーツです」
「ココナッツムーンクッキー」
「レシピを配ります」
「わたしに買い物をやらせて欲しい」
スイーツの時は、常にナミラが手を挙げる。凝っているのだ。
「紅茶と合うから買ってきておいしく煎れてください」
湯花邪無はオーブンなど使ったことがない。
「ナミラどうするのか教えてくれ」
「ミスターユハナは使ったことがないのか」
「ない」
「珍しい人だ」
沢風ゆりは常に使っていた。電子レンジのオーブンでもよかった。
「ナミラのが１番おいしい」
「ミスターユハナのクッキーはどうしたのだ」
「オーブンの使い方がわからなかった」
「時間がおかしいのか」
「短かったかもしれない」

「わたしのクッキーを食べたか」
「おいしい」
みんなは、ミナと湯花邪無の会話を聞いていない。
お互いのクッキーを食べ較べている。
「ただいま〜」
「おかえりなさい〜」
「今日は何だ」
「ココナッツムーンクッキー」
「リニこれを食べてみてくれ」
湯花邪無は、自分の焼いたクッキーをリニに渡した。
「後で食べる」
「今食べてみてくれ」
リニは、戸惑ったが口に運んだ。
「おいしいと思う」
「はじめてオーブン使って温度がうまくいかなかった」
「それでしっとりしているのか」
「そしたらお昼はここで食べるのか」
「新宿に行くから空港で何か食べる」
「もしよかったらクッキーを全部置いていく」
「わたしはおいしい」
「ありがとう」
湯花邪無はジャカルタではガマンした。お腹は空いていたが50分だ。おそばが食べたい。あのお醤油の焼けた匂いが無性に恋しくなることがある。日本人だとつくづく思う。
アースカーで華美美鈴を検索した。
まだ地球と月の間を飛んでいるはずである。
月到着は東京時間の23時だ。
「こんにちわ〜」
「こんにちわ〜」
「水野まさみさんは八ヶ岳わさび工房に出かけています」
「今日機械を設置するんだ」

「連絡は入っていませんか？」

「まだです」

「コーヒーですか？ホットですか？」

「ホットで」

牧野由香は元気そうだ。

15時になって水野まさみから電話がきた。

「今日の料理はなんだったのか」

「ココナッツムーンクッキー」

「おいしかったのか」

「もう少しかな」

「スライスわさびの機械を設置して今日からテストするから」

「問題は何かありませんか？」

「順調」

「10月１日生産開始で販売開始だから」

「わかりました」

「山井生江さんと次郎さんは元気です」

「もう試作の準備をしています」

「天海豊さんも朝から来ています」

「10月１日まで時間はないけど」

「機械の設置だけが問題でもうできているから心配はない」

「わかりました」

「ありがとう」

「みなさんにお礼を言っておいてください」

「わかりました」

水野まさみは、スパイス湯花の社長になっている。態度も社長である。

17時になって水野まさみから電話があった。

「ミスタージャム喜んでくれ」

「どうしたのだ」

「試作が成功している」

「わたしは今日は遅くなるけど明日新宿に持っていく」

「ジニもいますか？」

「宅急便でジャカルタに送るように言ってください」
「ミスタージャムと同じくらいにジャカルタに着くと思う」
「よろしくお願いします」
「今日スライスわさびの日本料理店への案内をやってるんだけど」
「どこからですか？」
「ホームページ」
「著名な日本料理店にはメールで案内」
「ああ」
「10月１日出荷で４３３本の注文があった」
「まだ試験的だとは思うけど」
「毎日２６０程度の注文があると思っている」
「専門店だけですか？」
「そうです」
「家庭用は情報が届くまで待つんだ」
「そうです」
「わかりました」
18時になった。
「牧野さん何かありますか？」
「順調です」
「北千住ですか？」
「水野さんは遅くなりそうです」
「電話がありました」
「直接自宅だそうです」
「わかりました」
「失礼します」
湯花邪無は、北千住のマンションまで華美美鈴を検索していた。ニュースは何もない。
近所のスーパーマーケットでサラダとカツカレーとビールを買った。
こんな食生活は良くないとは思うのだが、暗い部屋に帰って料理する気になれない。
スマホアース炊飯器とアース鍋はまだ使っていない。

20時になって、ジンから電話があった。
「明日でもいいんだけど」
「スパイス工房モロッコのスパイスの機械の据付が終わった」
「クミンとパプリカとターメリックとシナモンとレッドペッパーの試作を行える」
「９月20日にはもう１度モロッコに来て試作を持って帰って試験する」
「それまでエミルはモロッコですか？」
「９月20日にわたしとエミルはジャカルタに帰ってくる」
「わかりました」
「機械はみんな順調だから心配はない」
「ありがとう」
21時が近くなって湯花邪無は落ち着かなくなった。
月連絡船はどのように月に着陸するのだろうか。
月の重力は地球の１／６になる。アースバッテリーも、地球仕様と月仕様に分けなくてはならない。
着陸のことを考えると、月の方が危険度は少ない。月連絡船が、何かの都合で月に衝突する時も、地球よりも厳しくはない。
ビールを飲んでいるのだが、ホットウイスキーをつくってきた。飲んでいないとおかしくなりそうだ。最悪のこともイメージしておかないといけない。
考えてみたら中継などしていない。
地球から出発する時は、８月21日の事故以来だから中継をするが、月着陸では何もない。

月からの帰還

翌日、いつものように羽田に向かった。
「９月16日日本時間15時に華美美鈴が月タクシーの月アースバッテリーでのテストを中継します」
日本のライブテレビがいきなり言った。
何も情報がなかったのだが、確かに、華美美鈴が情報を出さなかったら、何

もわからない。ジャカルタ時間の13時だ。
今日は終日スパイスｙｕｈａｎａにいようと思った。
「おはよう」
「おはようございます」
「ミスタージャムおはよう」
「宅急便が届いています」
「スライスわさびです」
「ありがとう」
「試験用の冷蔵庫に入れてあります」
「ジンは知っていますか？」
「もう試食をしています」
「試食ですか？」
「ステーキをわざびで食べています」
「どうなんだろうか」
「新鮮なステーキだそうです」
「醤油味です」
「なるほど」
湯花邪無が何も言わなくてもジンは興味があるから動いてしまう。
10時30分になって、ジンがステーキをを少し持ってきた。
「これ食べてみて」
「わさびステーキ」
「どうぞ」
湯花邪無は一口で食べた。
「ああ〜これはスライスわさびの特長が出てるな〜」
「そう思うでしょ？」
「これってアメリカで売ったらいいんだけどｙｕｈａｎａはアメリカにないから」
「アメリカで売ったら生産できなくなる」
「それはそうだ」
「わさびは予定通りでいいの？」
「10月１日ですか？」

「料理屋からは４３３本の注文をいただいているんだそうです」
「なんで？」
「いかにも料理屋好みだからホームページです」
「今晩いいの？」
湯花邪無は、こんなジンの言葉には反応しないことにしている。だいたいリニが近くにいるのだ。
「今日はリニはお休みだから」
湯花邪無が何を気にしているのか読まれている。
「今日のお昼もわさびステーキを少し用意してる」
「わかった」
「わたし会計のことで打ち合わせあるから」
「どうぞ」
湯花邪無は、華美美鈴を検索した。
何もない。
２時間後に月タクシーの月アースバッテリーでのテスト走行が中継される。
華美美鈴は月の表面に降りるのだろうか。
イメージが湧かない。
12時になってジンが帰ってきた。
「お昼に行くけど」
「わかった」
「わさびステーキだけでいいです」
「ごはんは白ですか？」
「わかった」
「じゃ〜わたしが焼くから」
湯花邪無はホントにおいしいと思った。醤油とよく合うのだ。料理屋からの注文が多いことがわかりやすかった。
湯花邪無は、食べているのに、スマホでメールした。
「わさびステーキが素晴らしい」
「これは全く新しい味だ」
「ホームページでわさびステーキも写真でお知らせしてください」
水野まさみと牧野由香とジニと山井生江と次郎に送った。

ジンにも送った。
湯花邪無はスパイスｙｕｕｈａｎａのリビングの時計を何度も見ている。月からの中継は13時からだ。ゆっくりお昼を食べていたら間に合わない。
ジンに電話があった。ジンがリビングを出たことは好都合だった。
「ごちそうさま」
「ステーキはどうでした？」
「グッドでした」
ジンはまだ帰ってこない。
12時55分になっていた。
湯花邪無は机がない。
会長になったのだが部屋もない。
ソファーに座ってテーブルでライブテレビを開いた。
「それでは月タクシーのアースバッテリーでの走行テストをいたします」
「施設と施設間を走ります施設タクシーと宇宙服着用の月タクシーの両方を同時に発車させます」
「施設タクシーは月駅からホテルまで走行します」
「月タクシーはわたしがここから乗車してホテルまで行きます」
華美美鈴なのだろう、宇宙服を着て月タクシーに乗り込んだ。
時速10キロくらいだろうか、静かに走りはじめた。
向こうから、施設タクシーが走り始めた。タクシーそのものが宇宙服になっている。
月駅もホテルも連絡船も宇宙服がいらない。
月タクシーは、静かに月駅から去っていった。
「どうでしょうか〜月タクシーは月アースバッテリーで動きます」
「時速は20キロが最高速度です」
「施設タクシーも見ていただけたでしょうか」
実際には、今スタートした。順調に走っている。
華美美鈴はどうして施設タクシーに乗らないで宇宙服を着ないといけない月タクシーに乗るのだろうか。
カメラが華美美鈴の月タクシーを追った。
「わたしちょっと出かけてくるから」

「なにかあったらラナンがいるから」

「わかった」

「何かありますか？」

「順調」

「一旦帰ってくるから」

「わかりました」

湯花邪無はずっとライブテレビを見ていた。

月連絡船のアースバッテリーはどうなっていたのだろうか。

何も情報がない。

帰りはどうするのだろうか。

月に向かったときはどうしたのだろうか。

このライブテレビはいつまでやっているのだろうか。

「これから月ホテルのアースライティングをやります」

「１時間後にまたお会いします」

ジャカルタ時間の14時30分だ。

15時30分にライブテレビが再開される。

湯花邪無はコーヒーが欲しくて厨房へ向かった。

「ミスタージャムコーヒーですか？」

湯花邪無は名前がわからない。

「煎れます」

湯花邪無は黙っていた。

「この豆はｙｕｈａｎａの森の豆です」

「ありがとう」

コーヒーはボタンを押せば自動で１人分を煎れてくれる。

「どうぞ」

「ありがとう」

「クッキーです」

いけないことなのだが、少ない人数なのに湯花邪無は名前がわからない。

「ネット販売をやってるユルキです」

「19歳です」

湯花邪無が名前がわかっていないことを読まれていた。

インドネシアの人は人を察することができる。
「どうもありがとう」
湯花邪無はクッキーとコーヒーを持ってジンの部屋に戻った。
湯花邪無は落ち着かない。ジンが出かけているからまだ助かっている。話しかける人がいない。こんなことではジンに申し訳ないとは思うのだが、どうにもならない。
「月ホテルの月アースライティングを点灯します」
いきなり華美美鈴の声が聞こえた。
真っ暗で何も見えなかったのに、明るい部屋になった。ホテルのロビーだろう。エネルギー節約のためだろう。地球地上のホテルのように豪勢な感じではなくてシンプルである。
「みなさんこんにちわ〜」
「どうでしょうか」
「月アースバッテリーはうまくいきました」
「月ホテルの月アースライティングはこのとおりです」
「今後、ホテルの電源を月アースバッテリーに切り替えます」
「明日わたしは地球に帰りますが、月連絡船はアースバッテリーで動きます」
「月に来るときもアースバッテリーで動きました」
「今回の月連絡船のアースバッテリーは月と地球を自分で判断してシステムを切り替えることができます」
「少し心配もあったのですがすべてうまくいっています」
「明日帰還できれば月アースバッテリーは完璧になります」
湯花邪無は何時に月を出発するのか言わない華美美鈴にイライラしていた。
仕方なく湯花邪無は検索した。
９月17日日本時間の15時だ。到着が19日の日本時間15時だ。
まだしばらくドキドキが続くと思った。

『fasterbigger2』

２０１５年１月

げんじあきら

Faster Bigger 2

げんじあきら

fasterbigger2

著者　　　げんじあきら

＊本書は（株）ボイジャーのRomancerで作成されました。